明野町埋蔵文化財発掘調査報告書第４集

山王堂遺跡発掘調査報告書

平成４年９月

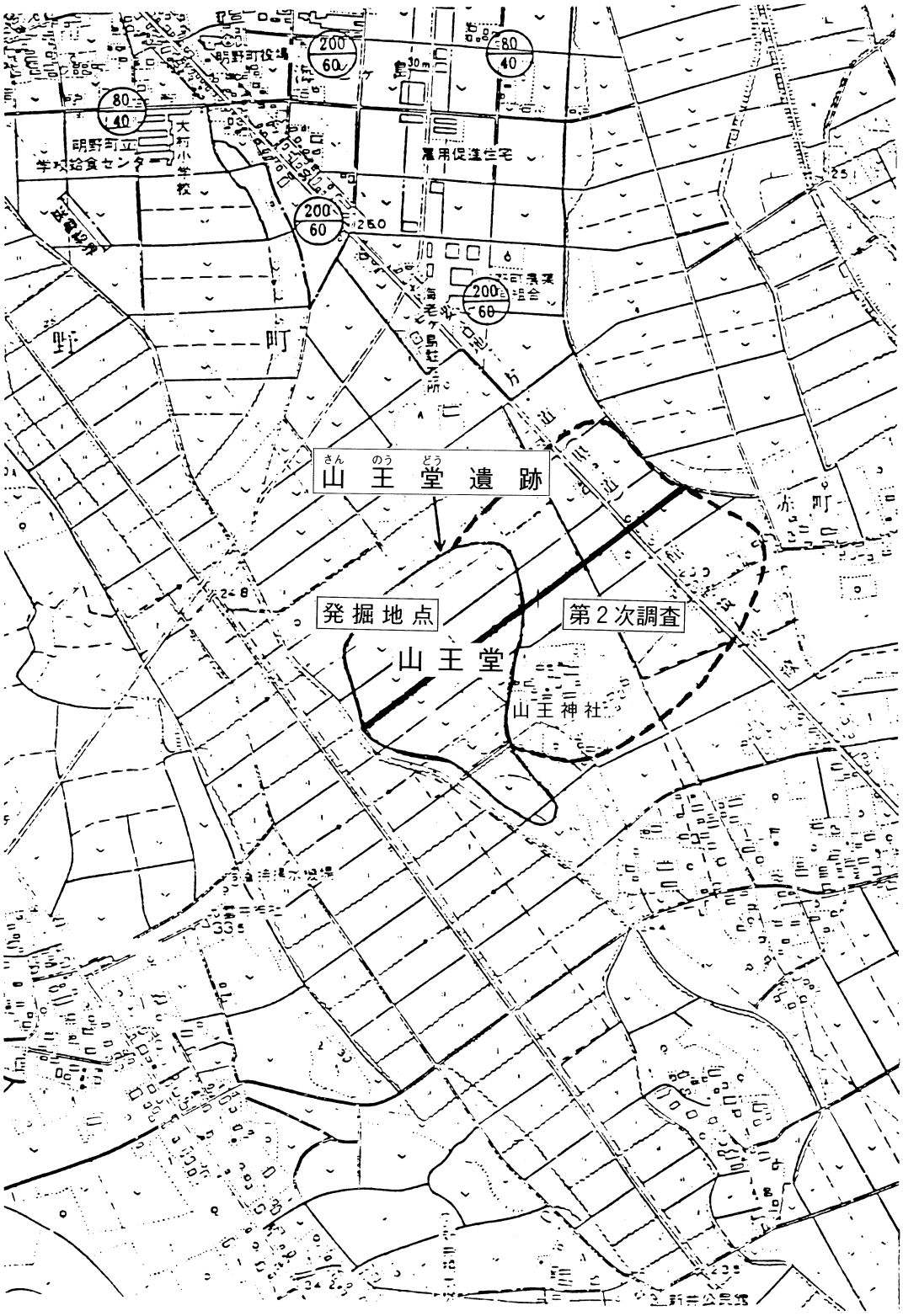
明野町教育委員会
明野地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会

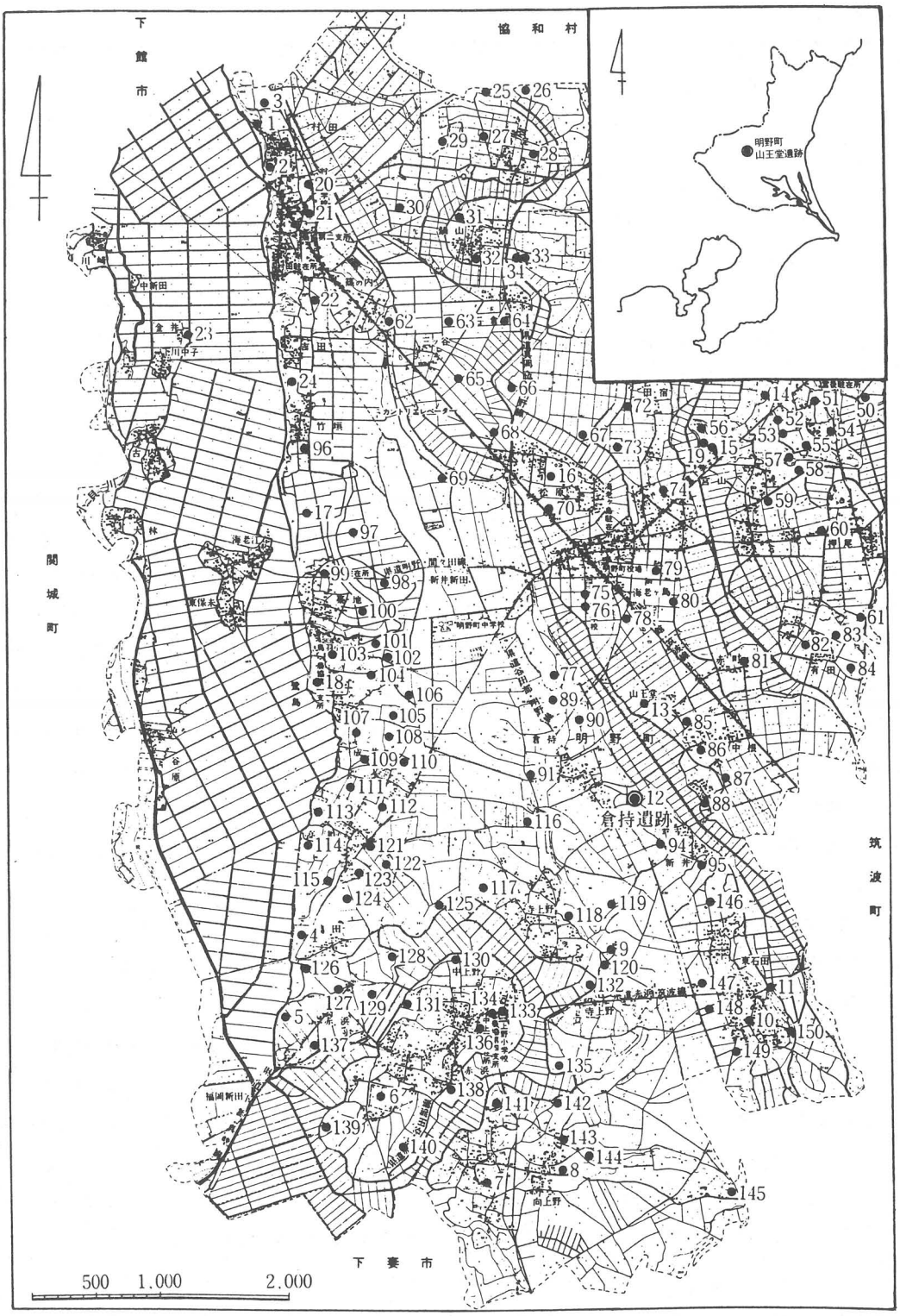
明野町埋蔵文化財発掘調査報告書第４集

山王堂遺跡発掘調査報告書

平成４年９月

明野町教育委員会
明野地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会


山王堂遺跡
発掘地点
第2次調査
山王堂
山王神社
明野町役場
明野町立
学校給食センター
大村小学校
雇用促進住宅
町
赤町



明野町遺跡分布図

明野町遺跡地名表

No	遺跡名	備考	No	遺跡名	備考	No	遺跡名	備考	No	遺跡名	備考
1	台畑古墳	前方後円墳	34	八坂神社古墳	円墳	82	有田西遺跡	古墳~平安	115	新畑遺跡	中世
2	灯火山古墳	前方後円墳	50	駒込古墳群	円墳2基	83	有田北遺跡	古墳~中世	116	池ノ台遺跡	中世
3	えんなみ台古墳	縄文~平安	51	陣場遺跡	古墳~平安	84	有田東遺跡	縄文~平安	117	清水頭遺跡	古墳~中世
4	鶴田石葉山古墳	縄文~古墳	52	犬場場遺跡	縄文~平安	85	宮先遺跡	縄文~平安	118	孤ケ宮遺跡	古墳~中世
5	六丁部遺跡	縄文~中世	53	硲西遺跡	古墳~中世	86	狭間遺跡	縄文~中世	119	山ノ入遺跡	中世
6	東叡山承和寺跡	平安時代	54	向台遺跡	古墳~中世	87	台遺跡	古墳~中世	120	鶴田遺跡	中世
7	北峰遺跡	縄文~平安	55	硲西南遺跡	古墳~中世	88	堂前遺跡	中世	121	鳥ノ子島遺跡	中世
8	滝ノ上遺跡	縄文~中世	56	宮山倉遺跡	(不明)	89	倉持北原遺跡	古墳~平安	122	下山遺跡	中世
9	池ノ上(藤山)遺跡	縄文~平安	57	山合遺跡	中世	90	宮北遺跡	縄文~中世	123	中島山遺跡	中世
10	東石田古墳群	円墳古基	58	矢尻跡跡	古墳~平安	91	水落遺跡	縄文~中世	124	鶴田東遺跡	奈良・平安
11	堂ノ下遺跡	弥生~中世	59	坪内遺跡	古墳~中世	92	宮前遺跡	弥生~中世	125	台山ノ下遺跡	古墳~中世
12	倉持中妻遺跡	縄文~中世	60	押尾古屋敷遺跡	古墳~中世	93	原久保遺跡	縄文~古墳	126	一丁田西遺跡	縄文~古墳
13	山王堂遺跡	縄文~中世	61	下宮遺跡	古墳~中世	94	富士山遺跡	縄文~中世	127	一丁田東遺跡	奈良~中世
14	宮山古墳群	円墳5基	62	稲荷前遺跡	古墳~中世	95	倉持前原(新井)遺跡	古墳~平安	128	西田向遺跡	中世
15	宮山遺跡	縄文~中世	63	石倉西遺跡	古墳~平安	96	竹垣前遺跡	縄文~平安	129	南久保遺跡	縄文~平安
16	海老ケ島城跡	室町時代	64	石倉東遺跡	古墳~平安	97	上口地前路	古墳~中世	130	北ノ内遺跡	奈良~中世
17	藤塚遺跡	縄文~中世	65	中根遺跡	古墳~平安	98	金塚遺跡	古墳~中世	131	5軒遺跡	縄文~平安
18	鷺島遺跡	弥生~中世	66	炭焼戸西遺跡	中世	99	東浦遺跡	古墳~中世	132	山ノ下遺跡	古墳~中世
19	宮山観音古墳	前方後円墳	67	炭焼戸東遺跡	中世	100	中坪遺跡	縄文~中世	133	糀屋前東遺跡	古墳~中世
20	三所宮北遺跡	古墳時代	68	新掘遺跡	古墳時代	101	舟塚遺跡	奈良・平安	134	糀屋前西遺跡	古墳~平安
21	三所宮南遺跡	古墳~中世	69	台北遺跡	縄文~平安	102	稲荷窪遺跡	古墳~平安	135	塚ノ上遺跡	古墳~平安
22	村東遺跡	古墳~中世	70	城ノ内遺跡	古墳~平安	103	北門遺跡	古墳~中世	136	我仁内前遺跡	縄文~中世
23	吉田金井遺跡	古墳~平安	71	田宿炭焼戸遺跡	中世	104	高ケ山遺跡	中世	137	谷原道遺跡	古墳~中世
24	吉田新田前遺跡	古墳~平安	72	菰冠北遺跡	古墳~中世	105	一ツ塚遺跡	中世	138	節子台遺跡	古墳~中世
25	境ノ町遺跡	古墳~平安	73	菰冠南遺跡	古墳~中世	106	成井北原遺跡	古墳~平安	139	光連遺跡	縄文~古墳
26	塔ノ内遺跡	縄文~古墳	74	戸張遺跡	古墳~中世	107	成井古屋敷遺跡	縄文~中世	140	遊内遺跡	古墳~中世
27	内淀西遺跡	古墳~中世	75	岡山遺跡	縄文~中世	108	中島遺跡	縄文~中世	141	篠合遺跡	古墳~平安
28	北浦遺跡	古墳~中世	76	稲荷塚古墳	方墳	109	向山遺跡	縄文~中世	142	作合遺跡	縄文~中世
29	北明遺跡	古墳時代	77	久保山遺跡	縄文~中世	110	十三塚遺跡	縄文~中世	143	香取遺跡	縄文~中世
30	西明遺跡	古墳~平安	78	久保新田遺跡	中世	111	林跡東遺跡	縄文~中世	144	百日畑遺跡	縄文~古墳
31	屋敷付西遺跡	古墳時代	79	海老ケ島東原遺跡	古墳~中世	112	林跡西遺跡	中世	145	上城畑遺跡	古墳~中世
32	屋敷付南遺跡	中世	80	館野遺跡	縄文~中世	113	狸塚遺跡	縄文~中世	146	宮台遺跡	古墳~中世
33	鍋山東原遺跡	縄文~中世	81	赤町遺跡	古墳~中世	114	大地遺跡	縄文~中世	147	西原北遺跡	縄文~中世

はじめに

明野町は，町内各地から貝塚，古墳や集落跡が発見され，埋蔵文化財の包蔵地が151か所を数えて，古代から開けていた地として知られてます。

この度，水質資源開発公団の霞ケ浦用水建設に伴う導水管理設工事のため山王堂遺跡の一部を発掘調査いたしました。

山王堂遺跡は，面積16.0ヘクタールに及ぶ広大な遺跡で，今回の調査でも，縄文時代中期，晩期にかけて土器が大量に出土しており数の多さからもまれにみる重要な遺跡であることをうかがわせています。

また，縄文時代の住居跡２例や土師式住居跡６例も確認されています。

これらの，重要な文化遺跡を記録，保存し，次の世代に引く継いでいくことが，私共に課せられた責務と考えます。

この調査の成果である本報告書が，郷土の歴史の理解を深めるとともに研究資料として活用されることを希望します。

終わりに，発掘調査を担当されたた方や調査に従事された方々のご努力に，また，水資源開発公団，地権者や関係機関の皆様のご支援に心から感謝申し上げます。

平成４年９月

明野町教育委員会

教育長　黒　須　　勉

例　　言

1．本報告書は平成３年１月から同年８月に亘って緊急発掘調査を実施した真壁郡明野町山王堂遺跡の調査記録である。

2．発掘調査は明野町教育委員会内に設けられた「明野地区埋蔵文化財包蔵地（山王堂遺跡）発掘調査会」が実施した。

3．発掘にかかる経費は明野町教育委員会と水資源開発公団との協議に基づき，公団から支出されたものである。

4．調査は当初公団から要請のあった区域（第一次調査）の他，追調査を実施した第二次調査が行なわれた。

5．本報告書の構成は発掘調査に基づいて次のように分担した。

明野地区埋蔵文化財包蔵地
発掘調査会役員名簿

役職名	氏名	
会長	黒須　勉	明野町教育委員会教育長
副会長	飯島庄一	明野町文化財保護審議会会長
理事	皆川昌造	明野町教育委員会いきいき学び課長
	大森信英	明野地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査団長
	谷口　俊	明野町文化財保護審議会副会長
	柴　真	明野町文化財保護審議会委員
	山口　清	明野町文化財保護審議会委員
	佐々木皖之	水資源開発公団霞ケ浦用水建設所副所長
	古橋幹夫	山王堂区長
	柴　栄	明野町産業課長
監事	古宇田和夫	明野町収入役
	鏡　日出夫	水資源開発公団霞ケ浦用水建設所用地課長
幹事	飯塚秀夫	明野町教育委員会いきいき学び課係長
	中島真一	明野町教育委員会いきいき学び課主幹

(1) 発掘全般の指揮，監督は調査主任　大森信英・菊池政徳（同助手）

(2) 測量・実測図・原図等の作成　菅谷敬・大森信宏（測量助手）

(3) 遺跡写真　大森茂男

(4) 実測図のトレース・遺物の識別　瓦吹堅・大森信英

(5) 遺物の写真撮影　高根信和

(6) 出土遺物の洗浄・実測図の作成・復元・拓影・写真等　豊田かほる・綿引和子・長南かほる・中武典子・菊池まゆみ・鈴木みどり

(7) 指導助言　茨城県立歴史館・高根信和・茨城県真壁郡明野町教育委員会・茨城県教育庁文化課，茨城県県西教育事務所

(8) 報告書の編集

本文執筆　大森信英

編集協力者　菅谷敬・大森茂男・大森信宏・豊田かほる・綿引和子・長南かほる・中武典子・菊池まゆみ

(9) 事務担当　中山芳子

(10) 発掘作業協力者

横田　友吉・中里　武一・岡本　一視・塚田　知市・鈴木　和夫・大吉　保
酒寄　一夫・北島　さく・北島　ふじ・中島　茂・橋本清一郎・武井　四郎
柴　敏夫・高島　米吉・柴　久江・柴　きぬ・熊倉　しつ・熊倉　きみ
高島　みよ・中山　純一・武井　良平・武井　よし・大木やい子・山口　いし
飯村勘三郎・飯村　栄一・深見　はく・上野　とよ・柴　さと子・須藤ふぢ江
島田金一郎・篠崎　しげ・山口　こう・飯島　はま・熊倉　いの・山口喜久雄
宮田新三郎・藤田登女子・林　定四郎・稲葉勝一郎・坂入　つね・小林　ちか
坂入　うめ・坂入　アサ・中里　ひさ・大吉　米吉・中里　すい・深見　とよ
林　水三郎・林　こと・坂入　絹子・北島　佐久・西村よ志乃・武井　ひで
北島　ふじ・武井　しつ江

調査日記抄

年	月	日	曜	天　気	備　　考
3	1	24	木	晴	８時30分現場集合　発掘に当り，作業協力員を集め，作業の趣旨内容，勤務時間，用具の使い方，安全注意について説明する。本日の作業計画を述べ，遺跡の確認のため，地区内を１㎡ごとに区画し，遺物の分布作業を行う。町教委職員来訪。
		25	金	小雨後晴	昨夜来雨のため中止，発掘作業の準備，用具を整備する。
		26	土	晴	８時30分作業開始，採集土器を太田へ搬送。
		28	月	晴	表面採集。試掘の準備をする。町教委職員来訪。
		29	火	晴	表面採集をほゞ完了する。試掘のための杭打を行う。コンボ搬入。試掘を手掘にて実施後コンボを導入する。
		30	水	晴	試掘作業を続行し乍ら，他方ユンボによる除土作業を行う。表土を－30まで下げる。杭番30の39まで。採集土器を整理班へ搬送依頼する。
		31	木	晴	コンボにより杭番31－60まで除土・土層確認のためベルトを５ケ所に設定する。一本は道路を利用する。降霜除けのシートを依頼する。霜により凍土，10時近くまで作業が進まず。
	2	1	金	晴	ベルト東南両面を整備，コンボ作業31＋61～33＋20まで進む。表土（耕土）30除去完了。シート押え土嚢造りを行う。
		2	土	晴	中層（第２層）をさらに15㎝下げる。ジョレンによる。33＋14～32＋94まで，出土土器，出土状態撮影，出土土器の位置測量。
		4	月	晴	ジョレンによる，除土作業を続行する。耕土面(－30)から中層（第２層）付近に土器が集中して発見され，一部に張り床状の粘土のブロックが見られる。杭番32＋70付近でスクレパー出土。
		5	火	晴風強し	引続きジョレンと手作業で発掘を行う。一部コンボを導入する深さ30。
		6	水	晴	ジョレンによる除土と移植ゴテによる発掘を行う。コンボを一部導入。深さ－15。
		7	木	晴	側壁測量のため削る。杭番29＋85～30＋41～30＋89。杭番30＋80付近から石棒出土。長さ55センチメートル，径３センチメートル，独鈷石出土。
		8	金	曇後晴	コンボによる除土。石棒石斧等中心部付近から出る。強風により作業を一時中止する。掘り上げた土の積み上げを補正する。
		9	土	晴	調査区域のロープの張替えを行う。投上げ土の盛土修正，写真撮影

年	月	日	曜	天　気	備　　考
					を行う。主要土器洗浄約180ケ。
		11	月		休業（祝日）。
		12	火	晴	コンボ最後作業，杭番32＋80ジョレンによる除土，土器洗浄，土偶等出土（31＋18，31＋21）。
		13	水	晴	杭番31＋８～10表土面より第２層まで掘り下げる。写真撮影。土器搬送，ベルト側面，測量のため削る。
		14	木	晴	盛土崩壊修正作業，ベルト面測量，36＋40以下62件8,385ケ。
		15	金	雨	作業中止，作業員一部出勤，土器洗浄を行う。総計12,118ケ。課長補佐来訪。
		16	土	晴	昨日の雨のため発掘作業出来ず，全員土器洗浄，員数確認を行う。土器搬送，水資源公団，水越主任他１名来訪。
		18	月	晴後曇	降霜により凍結10時すぎまで発掘不能。午前中，盛土の整備，空中撮影の準備を行う。社教中島氏来訪。
		19	火	晴	空中撮影を行う。（10時40分～13時20分まで）午後ジョレンによる除土作業，土偶の日却部出土　社教課長補佐来訪。
		20	水	晴	トレンチ間隔５ｍおきにローム面まで試掘を行う。深さ0.35センメートル（層位第３層～第４層）。
		21	木	晴	昨日と同じ試掘作業を行う。杭番31＋80付近に巾２メートル，深さ1.00メートルの水路状溝が発見される。
		22	金	晴	トレンチ内ジョレンで除土，中央部ローム面まで完了。測量杭番31＋75～78土溝（水路），土器搬送。
		23	土	晴	杭番32＋10，＋90，＋80，ローム面まで除土，写真撮影，土器搬送来週から杭番29＋85より本調査に入る。
		25	月	晴	霜が降り，本調査に入る予定であったが東側断面の仕上げ，杭番32＋40までジョレンによる除土，盛土の修正，一部残存したトレンチ内付着部をコレボで除去する。土器１件洗浄（1,094ケ）。
		26	火	晴	霜害のためセクションの仕上げを実施，写真撮影，実測図の作成を行う。一部土器洗浄。
		27	水	晴	北側断面作図，杭番30＋96～31から石錘・石錘等出土。杭番32＋20～44までジョレンにより除土。
		28	木	曇強風	北側断面作図，土器洗浄，写真撮影，土器搬送。トレンチ南側土砂崩れ部分除土強風により土砂吹込む。
	3	1	金	曇	強風により吹込み土砂の引上げ除土，北側断面図作成，土器洗浄。

年	月	日	曜	天　気	備　　考
		2	土	晴	断面及びトレンチ底部整備　北側セクション撮影，土器搬送。
		4	月	晴	トレンチ北側，南側，東側断面図作製，土器洗浄992ケ，石錘，土玉等出土（30＋80）。
		5	火	晴	断面図作成，土器洗浄，住居跡本調査準備　水資源は水越氏，関口補佐来訪。
		6	水	晴	断面図作成，住居跡発掘土器洗浄等。
		7	木	晴	住居跡，竈あり，トレンチジョレンによる除土，南側セクション測量，強風ふき一時調査中止，土器洗浄。
		8	金	曇後雨	住居跡調査，トレンチセクション測量，写真撮影，天候悪化作業中止。
		9	土	曇	作業出来ず（昨日来の雨）標本用土器，土器搬送。
		11	月	雨	雨により作業中止，土器写真，図面整理。
		12	火	曇	昨日の雨のため作業できず，住居跡保護ヒートの準備，写真整理。
		13	水	曇	住居跡にたまった水の排水，土器搬送。
		14	木	曇後雨	住居跡測量，ジョレンによる遺構確認，雨により午後作業中止。
		15	金	晴	霜が降り作業不能，土器洗浄。
		16	土	曇時々雨	先週から天候不良で作業が思うように出来ず，土器搬送，一部ジョレンにより除土，高根信和氏来訪。
		18	月	晴	霜降る。住居跡No１～No５までベルト削除，遺物測定セクション測量，高根信和氏来訪。
		19	火	晴	住居跡調査，トレンチ床面ジョレン除土，南側セクション仕上げ，土器搬送。
		20	水	晴	住居跡No５完了。No６～No７発掘。31＋95付近セクショントレンチ除土（ジョレン）。
		22	金	曇	32＋50～33＋17までセクション測定。土溝発掘31＋78。
		23	土	雨後曇	雨のため作業中止。写真整理，主要土器整理。
		25	月	雨	雨天作業中止。写真実測図作成，道具手入れ。
		26	火	晴	水路（溝）円形土拡，長方形遺構調査，山本貴之氏応援のためくる。（～28日まで）。
		27	水	雨	作業中止　33～33＋30まで遺構確認，石器の実測を行う。
		28	木	雨	雨のため作業中止。33＋30の遺構を確認，石器の実測を行う。
		29	金	晴	ビニール上の雨水の排水を行う。土拡住居跡らしきものを発掘，写真撮影，土拡，住居跡測量実施。

年	月	日	曜	天　気	備　　考
		30	土	曇	大溝，土拡及び住居跡の発掘（33＋10～20）写真撮影，土器搬送。
	4	1	月	雨	作業中止。図面，写真整理，道具手入れ。
		2	火	曇	排水作業，遺構確認のためジョレンで除土，断面整備。
		3	水	晴	ジョレンによる遺構確認，31＋63注口土器出土，土拡セレクション測量。
		4	木	晴	ジョレンによる遺構確認作業。土拡測量・石錘50＋70。
		5	金	晴	円形土拡32＋７ベルトセクション，水資源鏡課長来訪。
		6	土	晴後曇	31＋68　遺構確認作業，溝撮影，土器搬送。
		8	月	雨	作業中止，測量図面整理，主要石器作図。
		9	火	晴	一昨日以来の雨のため浸水した遺構の排水を行う。ジョレンによる除土，土拡，柱穴の発掘を行う。
		10	水	曇	水路（溝）発掘ジョレンによる遺構の確認，遺構発掘。
		11	木	曇	土拡30＋53～58発掘，注口土器30＋81（№２）出土遺構発掘（30＋83）。
		12	金	曇後晴	遺構発掘，注口土器写真撮影，土溝，ベルト，セクション撮影，注口土器，残鉢出土，水資源鏡課長来訪。
		13	土	曇	30＋63，同＋53－58土溝，ベルト１～２写真撮影，土拡基発掘，歴史館高根氏来訪　土器搬送　独鈷石出土。
		15	月	曇	30＋82～88　ベルト　主要土器出土，土溝発掘。
		16	火	晴	30＋30～40　東西トレンチ－５㎝掘下げ。
		17	水	晴	16日と同一場所を発掘する。
		18	木	曇	強風，30＋30～40，20～30東西トレンチ他発掘。
		19	金	晴	30＋10～30＋15　東西トレンチ10㎝発掘　ジョレンらよるトレンチ除土33＋17～30，32+20～30～90，コレボ作業33～31＋50（150ｍ）。
		20	土	晴	29＋30～30＋７住居跡，カマド写真撮影，コンボによるトレンチ面25～30掘下げ，拡上げ盛土整形，注口土器（31＋68）出土。
		22	月	晴	31＋50～60　ジョレンによる遺構確認作業，31＋90～30＋10住居跡カマド撮影，土拡発掘，曲玉出土，関口補佐宿泊の件打合せ。
		23	火	晴後曇	32＋60～80，30＋71～91　土拡，ピット21基発掘。
		24	水	曇	トレンチ，北南両面セクション崩れ，コレボ底面修正。
		25	木	雨後曇	雨のため中止，土器整理を行う。土器搬送，出土骨片鑑定。
		26	金	曇	30＋80～90　出拡発掘，ベルト１－２出土土器撮影。
		27	土	曇	土溝発掘，30＋53～56，30＋73～75　上巾250，深さ1.3，下巾1.10

年	月	日	曜	天　気	備　　考
					31＋50～60　ピット10基発掘。
		30	火	晴	昨日来の雨のため作業不能のため，土器洗浄，盛土修復作業。
	5	1	水	曇後晴	土拡発掘１～11（完掘）２，３，５，６，７，12（中途）。
		2	木	晴後雨	土拡発掘，ピット９基完掘７基中途，雷雨により15：20中止。
		7	火	晴	30＋20　ベルト撮影，土拡撮影，ピット土拡発掘。
		8	水	晴	出土土器写真撮影準備，撮影後土器あげ，土拡ピット同上。
		9	木	雨	作業中止，土器洗浄（３班７名）関口補佐打合せ。
		10	金	晴後曇	30＋92～31＋10　ジョレンによる遺構確認，東西方向写真撮影準備測量，土器洗浄　関口補佐打合せ。
		11	土	晴後曇	土拡ベルト写真撮影，測量。
		13	月	晴	昨夜来の雨により作業不可により中止，写真撮影，ポンプによる排水作業を依頼　午前中１名　午後２名。
		14	火	晴	ジョレンによる除土，土器あげを行う，水資源鏡課長他２名来訪。
		15	水	曇	30＋98～31＋３，0.1メートル掘下げる。土器破片数出土。
		16	木	雨後曇	雨天作業中止　土器整理，写真整理。
		17	金	晴	排水作業を行う。30＋98－31＋３発掘　土拡写真撮影。
		18	土	晴	引続同一地点発掘，土製リング出土，土拡写真撮影。
		20	月	晴	30＋92～32＋98　全面0.15メートル掘り下げる。31＋10ピット発掘。
		21	火	晴	昨日と同じ，出土土器測量写真撮影土器あげ。
		22	水	雨	作業中止，土器整理。
		23	木	晴	全面発掘，31＋20～30ピット，31＋25～32.5土溝セクション。
		24	金	曇	31＋４～10　0.15掘り下げ，31＋20～30　フクロ状土拡，31＋37土器出土。
		25	土	曇	31＋30－16，0.15～0.2メートル掘り下げ，土器搬送，航空写真準備。
		27	月	雨後曇	航空写真準備。
		28	火	晴	航空写真撮影準備，11：10～11：32撮影（竜ケ崎）。
		29	水	曇後晴	30＋92～31＋18ベルト，31＋16～31＋42発掘作業，写真撮影。
		30	木	曇後晴	31＋16～42　発掘作業写真撮影，土偶脚部破片出土ピット平面図。
		31	金	晴	セクション測量，予定地区発掘完了，用具まとめ，作業協力者反省会実施。

年	月	日	曜	天　気	備　　考
	6	20	木	曇後雨	第２次調査に入る。東側第一次のつゞきを行う。
		21	金	曇	芯土上の土器の採集を行う。洗浄の上発掘史料とする。縄文土器に比べて土順，須恵器が比較的多く発見されている。
		22	土	雨	作業出来ず，表面採集土器整理，事務用机搬入，東西建設町長来訪。
		24	月	雨	作業出来ず。出土土器選別，実測用枠作業。
		25	火	霧雨後曇	作業出来ず，現場作業準備。
		26	水	曇後晴	１，２区ジョレンによる除土。
		27	木	晴	１区ジョレンによる表土除去。
		28	金	晴	芯土面ほゞ除去完了，文化課打合せ。
		29	土	晴	２区ジョレンによる除去，３区コンボによる作業準備。
	7	1	月	曇	１区ジョレン作業の残り部分土砂除去，土器片洗浄。
		2	火	雨後曇	作業出来ず，午後作業開始，鏡課長来訪。
		3	水	曇	３区０～30までセクショレ測量，２区同，32土拡４基。
		4	木	晴	３区遺構確認　土拡５基　２区セレクションによる除土 １区83m，２区102.9m，３区66.5mＴ252.40m。
		5	金	雨後曇	現場作業中止　午後作業開始，建文化課荒掘係長，公団佐々木副所長，境課長，明野古橋次長来訪地様さ打合せ。
		6	土	雨後晴	午前中中止，午後発掘，発掘調査を正式に実施することになる。 コンボによる掘削を行う。３区写真撮影，１区ジョレン作業。
		7	日	曇後晴	１区コンボ，２区ジョレンによる除土作業，１区セレクション。
		8	月	曇後晴	１，２区ジョレンによる除土，１区壙３基，２区２基，３区４基。
		9	火	晴	１区，土壙発掘，水路発掘，３区土壙住居跡・水路発掘３区遺構確認作業。
		10	水	曇	１区土壙，２区住居跡土壙，水路発掘，内藤所長来訪。
		11	木	曇	引続き遺構の発掘を行う。
		12	金	曇時々雨	３区トレンチ上空撮影，２区住居跡カマド発掘土壙。
		13	土	雨後曇	８：45作業開始，１～３区ベルトセレクション，２区袋状ピット発掘。
		15	月	曇	航空撮影９～11時，午後発掘地域整理　団長挨拶解散。

目　　次

序
例　　言
調査日誌抄
第１章　山王堂遺跡の発掘調査にいたる経過…… 1
　第１節　遺跡の位置と周辺の環境…… 1
第２章　山王堂遺跡の調査…… 14
　第１節　縄文時代の遺跡…… 14
　　１．縄文式住居跡…… 14
　　(1)　土　　壙…… 17
　　(2)　柱穴状遺構…… 19
　　(3)　溝…… 19
　第２節　縄文時代以外の遺構…… 20
　　１．土師式住居跡…… 20
　　(1)　第５号住居跡…… 20
　　(2)　第１号住居跡…… 21
　　(3)　第２号住居跡…… 21
　　(4)　第３号住居跡…… 22
　　(5)　第４号住居跡…… 22
　　(6)　第８号住居跡…… 23
　第３節　用 具 類…… 25
　　１．石　　器…… 25
　　(1)　石　　鏃…… 25
　　(2)　石　　錐…… 25
　　(3)　石　　錘…… 26
　　(4)　石　　斧…… 28
　　(5)　石　　棒…… 28
　　(6)　独 鈷 石…… 28
　　(7)　ペンダント…… 28
　　２．土　　器…… 35

(1) 縄文式土器…… 35
a．注口土器…… 51
b．異型土器（水差し状土器）…… 57
c．香炉状土器…… 57
d．土　偶…… 58
e．有孔土器円板…… 58
f．小型手づくね土器…… 58
(2) 縄文以外の時期の土器類…… 66
a．土 師 器…… 66
b．須 恵 器…… 68
(3) 中世土器…… 68
第3章　第二次調査…… 71
第1節　発掘調査…… 71
1．第9号住居跡…… 72
2．溝…… 73
第2節　出土遺物…… 73
1．縄文式土器…… 73
2．土 師 器…… 74
3．須 恵 器…… 74
第4章　結　言…… 78
写真図版　1～55

挿図目次

第１図　山王堂遺跡付近図……２
第２図　山王堂遺跡……３
第３図　第一次発掘実測図……４
第４図　第二次発掘実測図……５
第５図　ベルト断面図－１……６
第６図　ベルト断面図－２……７
第７図　ベルト断面図－３……８
第８図　ベルト断面図－４……９
第９図　発掘側面図－１……10
第10図　発掘側面図－２……11
第11図　発掘側面図－３……12
第12図　発掘側面図－４……13
第13図　第６号住居跡及び第７号住居跡実測図……16
第14図　第50号土壙実測図……17
第15図　土師式第５号住居跡実測図……21
第16図　土師式第１号住居跡実測図……22
第17図　土師式第２号住居跡実測図……23
第18図　土師式第３・４号住居跡実測図……24
第19図　土師式第８号住居跡実測図……25
第20図　石鏃・石錐実測図……26
第21図　石錘実測図……27
第22図　石斧実測図－１……29
第23図　石斧実測図－２……30
第24図　磨製石斧実測図……31
第25図　石棒実測図……32
第26図　独鈷石及びペンダント実測図……33
第27図　山王堂遺跡出土石棒・独鈷石実測図（明野町史所収）……34
第28図　縄文式土器実測図－１……35
第29図　縄文式土器実測図－２……36
第30図　縄文式土器実測図－３……37
第31図　縄文式土器実測図－４……38
第32図　縄文式土器実測図－５……39
第33図　縄文式土器拓影－１……40
第34図　縄文式土器実測図－６……41
第35図　縄文式土器拓影－２……42
第36図　縄文式土器拓影－３……43
第37図　縄文式土器拓影－４……44
第38図　縄文式土器実測図及び拓影－５……45
第39図　縄文式土器拓影－６……46
第40図　縄文式土器拓影－７……47
第41図　縄文式土器実測図－７……48
第42図　縄文式土器実測図－８……49
第43図　山王堂遺跡出土土器実測図（明野町史所収）……50
第44図　縄文式土器実測図－９……51
第45図　縄文式土器実測図－10……52
第46図　縄文式土器実測図－11……53
第47図　縄文式土器実測図－12……54
第48図　縄文式土器実測図－13……55
第49図　注口土器注口部実測図……56
第50図　縄文式土器実測図－14……57
第51図　縄文式土器実測図－15……57
第52図　土偶実測図……59
第53図　山王堂遺跡出土土偶・土版実測図（明野町史所収）……60
第54図　有孔土器円板実測図……61
第55図　小型手づくね土器実測図－１……64
第56図　小型手づくね土器実測図－２……65
第57図　土師器実測図－１……66
第58図　土師器実測図－２……67
第59図　須恵器坏等実測図……69
第60図　中世土器実測図……70
第61図　第９号住居跡実測図……72
第62図　縄文式土器実測図……73
第63図　土師器実測図……75
第64図　須恵器坏等実測図－１……76
第65図　須恵器実測図－２……77

表　目　次

表１　主要出土品一覧表（第一次調査）……15
表２　土　一覧表……18
表３　柱穴状遺構一覧表……19
表４　土師式住居……20

図版目次

図版第１　発掘全景
図版第２　発掘状況－１
図版第３　発掘状況－２
図版第４　第一次発掘区域内ベルト及び側面図
図版第５　第一次発掘区域主要遺構出土部分図
図版第６　縄文式第６・７号住居跡
図版第７　土壙全景
図版第８　土師式第１・２・３号住居跡発掘状況
図版第９　土師式第４号住居跡発掘状況
図版第10　石鏃・石錐
図版第11　石　　錘
図版第12　石斧－１
図版第13　石斧－２
図版第14　石斧－３
図版第15　石　　棒
図版第16　独鈷石及びペンダント
図版第17　縄文式土器－１
図版第18　縄文式土器－２
図版第19　縄文式土器出土状況
図版第20　縄文式土器－３
図版第21　縄文式土器－４
図版第22　縄文式土器－５
図版第23　縄文式土器－６
図版第24　縄文式土器－７
図版第25　縄文式土器－８
図版第26　縄文式土器－９
図版第27　縄文式土器－10
図版第28　縄文式土器及び出土状況－11
図版第29　縄文式土器－12
図版第30　縄文式土器－13
図版第31　縄文式土器－14
図版第32　縄文式土器－15
図版第33　縄文式土器及び出土状況－16
図版第34　縄文式土器及び出土状況－17
図版第35　縄文式土器及び出土状況－18
図版第36　縄文式土器及び出土状況－19
図版第37　注口土器注口部
図版第38　異型土器及び香炉状土器
図版第39　土　　偶
図版第40　有孔土器円板及び出土状況
図版第41　小型手づくね土器－１
図版第42　小型手づくね土器－２
図版第43　土師器－１
図版第44　土師器－２
図版第45　須恵器坏等
図版第46　中世土器
図版第47　第９号住居跡全景
図版第48　第９号住居跡壁及び全景
図版第49　第９号住居跡カマド
図版第50　第10号・11号住居跡全景
図版第51　溝全景
図版第52　縄文式土器
図版第53　土師器－１
図版第54　須恵器坏－１
図版第55　須恵器及び出土状況－２

第１章　山王遺跡の発掘調査にいたる経過

この調査は水資源開発公団の行う霞ケ浦用水基幹線水路管埋設工事に予定された明野町山王堂遺跡にかかる埋蔵文化財の記録保存報告書である。

水路管埋設用地の山王堂遺跡にかかる範囲は明野町大字山王堂字屋敷北222－1他37筆であるが，具体的には大字山王堂字屋敷北15筆，字塚下23筆で，水路管埋設巾は7.5メートル，長さ330メートル，総面積2,442平方メートルである。

山王堂遺跡は，明野町教育委員会の遺跡地名表によれば，13（2230），所在地は大字山王堂字塚下，屋敷化，宮先，73～148，152～159，166～168，185～187，222，223，240，241番地とあり，立地は西側に水田を臨む台地縁辺部にあるとし，標高24メートル，比高差１～２メートル，現状は畑地及び宅地としている。

遺跡の総面積は450メートル×350メートル,157,500平方メートル，約16ヘクタールに及ぶ大遺跡で，縄文式土器，土師器，須恵器，土師質土器が多量に散布する。時代は縄文時代中期，後期，晩期，古墳時代，奈良，平安時代，中世以降と記してある。

今回の基幹水路管埋設は山王堂遺跡のほぼ中央部を南西から北東に二分する位置にあたり，発掘面積は全遺跡の1.5％ではあるが，埋蔵文化財保存の上からは極めて好ましからざる調査となったと言えよう。このことからも，予定区域の調査完了後，調査中発掘地点の北東端から県道下館・筑波線の北東側にかけて遺跡の拡がることがわかり，緊急協議の上，270メートルまで延長して調査する結果となった。

第二次における調査面積は巾8.0メートル，長さ272.2メートルで，総面積2,177平方メートルである。

以上のことから第一次調査及び第二次調査をあわせると，総延長602.2メートル，発掘総面積は4,619平方メートルとなった。

第１節　遺跡の位置と周辺の環境（第１図）

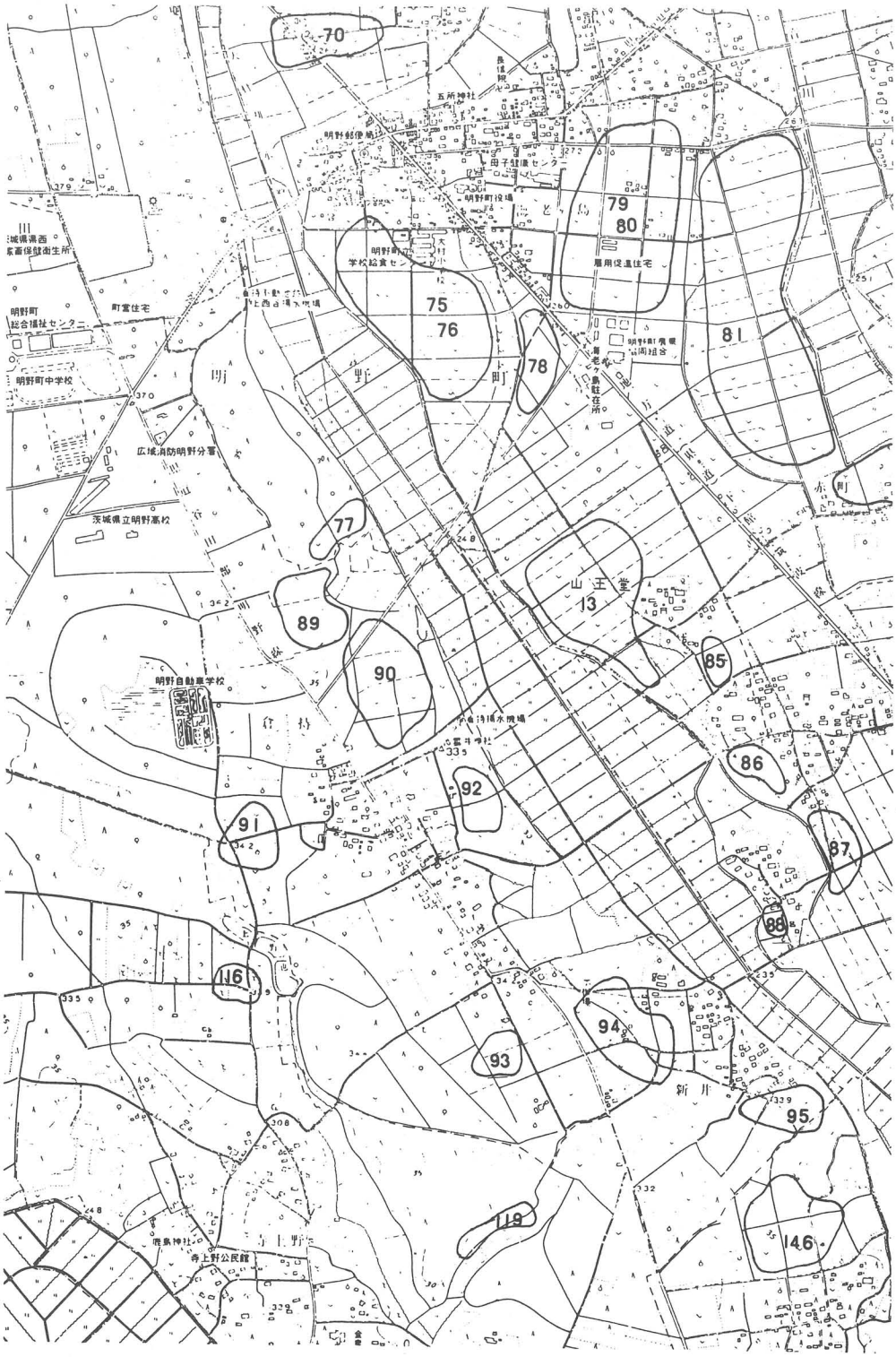
山王堂遺跡は行政的には茨城県真壁郡明野町大字山王堂字屋敷北，字塚下，字宮先にある。

この地域は南東に名峰筑波山を望み，東北に筑波連山を，北には遠く日光の山波を，また朝夕には西に富士山を望む風光明眉な農村地帯で，遺跡を跨いで南東方向から北西方向に県道筑波・下館線が走り，遺跡の西側の水田化した谷津には県道に併行して用水が流れているが，さらにその両面には水田を挟んで台地が見られる。

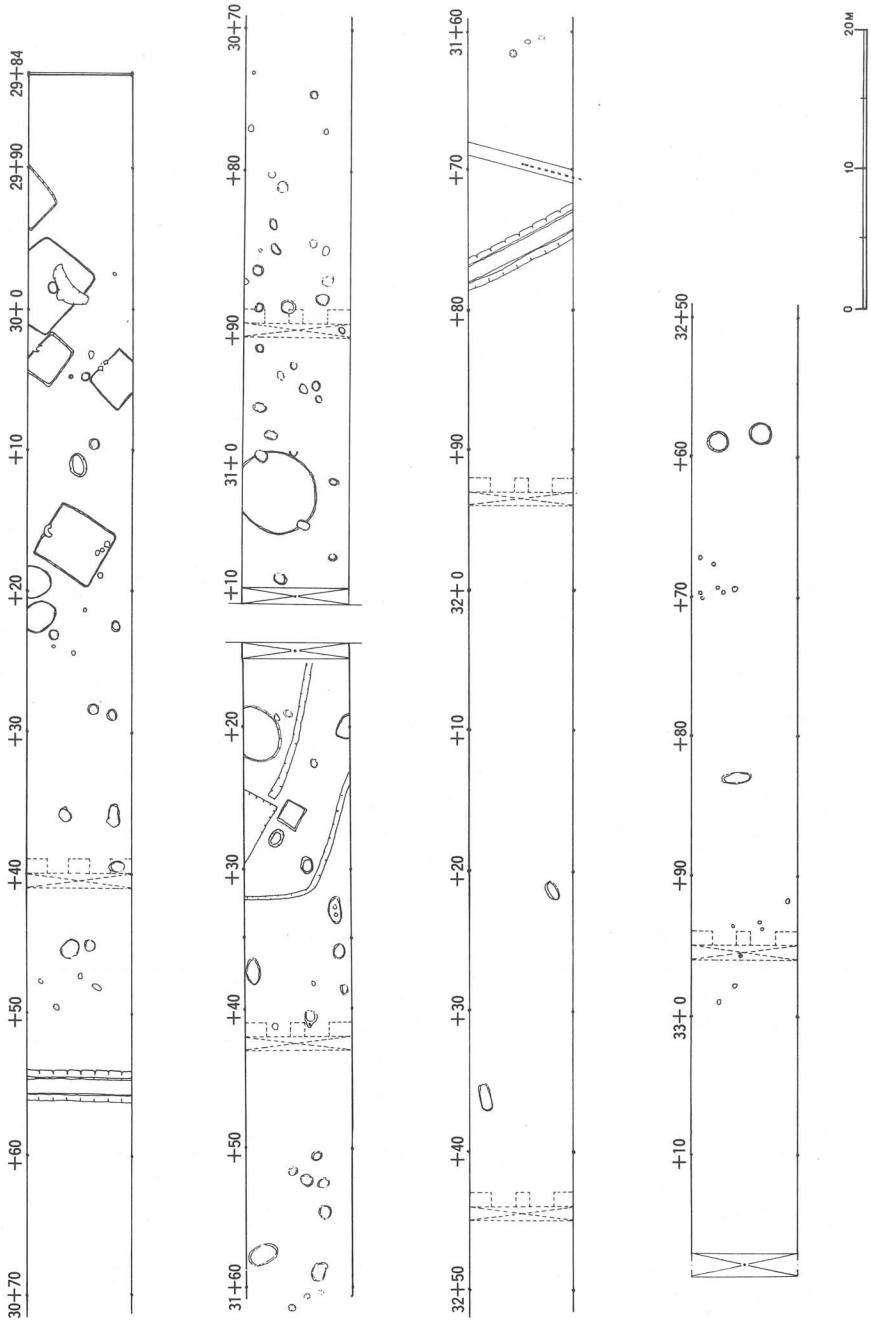
山王堂遺跡はこのような環境に囲まれた平地で，標高24メートル乃至26メートル前後の平坦な畑地または宅地，若しくは平地林をなし，遺跡の東側は県道に沿って水田化した谷津が南北に延び，遺跡の西側も南北に連なる標高35メートル前後の台地をなしている。

第１図はこれらの周辺に見られる遺跡を示した分布図であるが，山王堂遺跡に隣接する遺跡を捉えただけでも20数例に及んでいる。

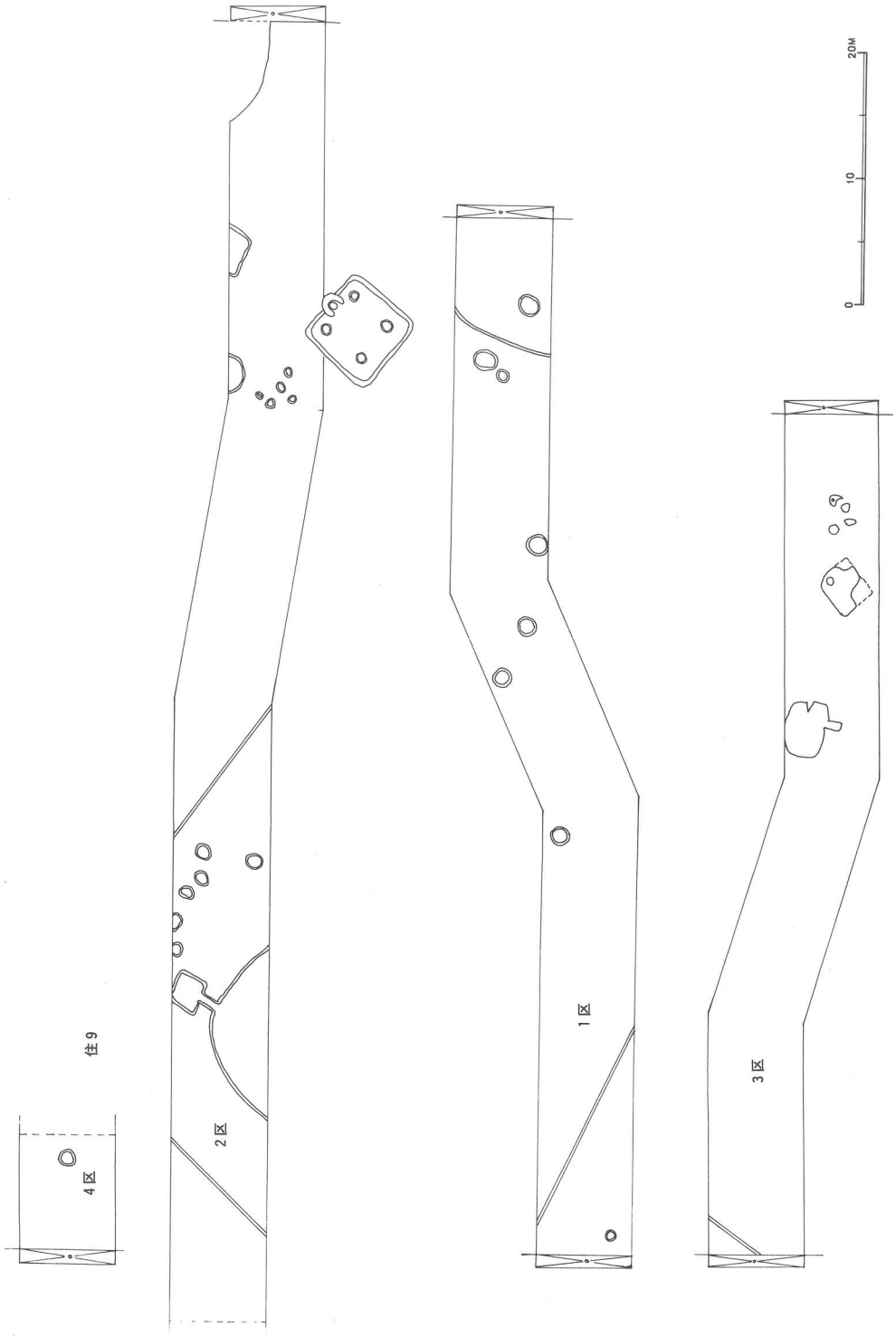
特に山王堂遺跡の正面の台地上にある倉持遺跡（明野町遺跡地名表No.12)は，昭和56年７月の予備調査から同58年３月にかけて２度に亘って明野町教育委員会による発掘調査が行なわれ，旧石器時代以降，歴史時代にかけて貴重な遺物が数多く発見されている。（第２図）



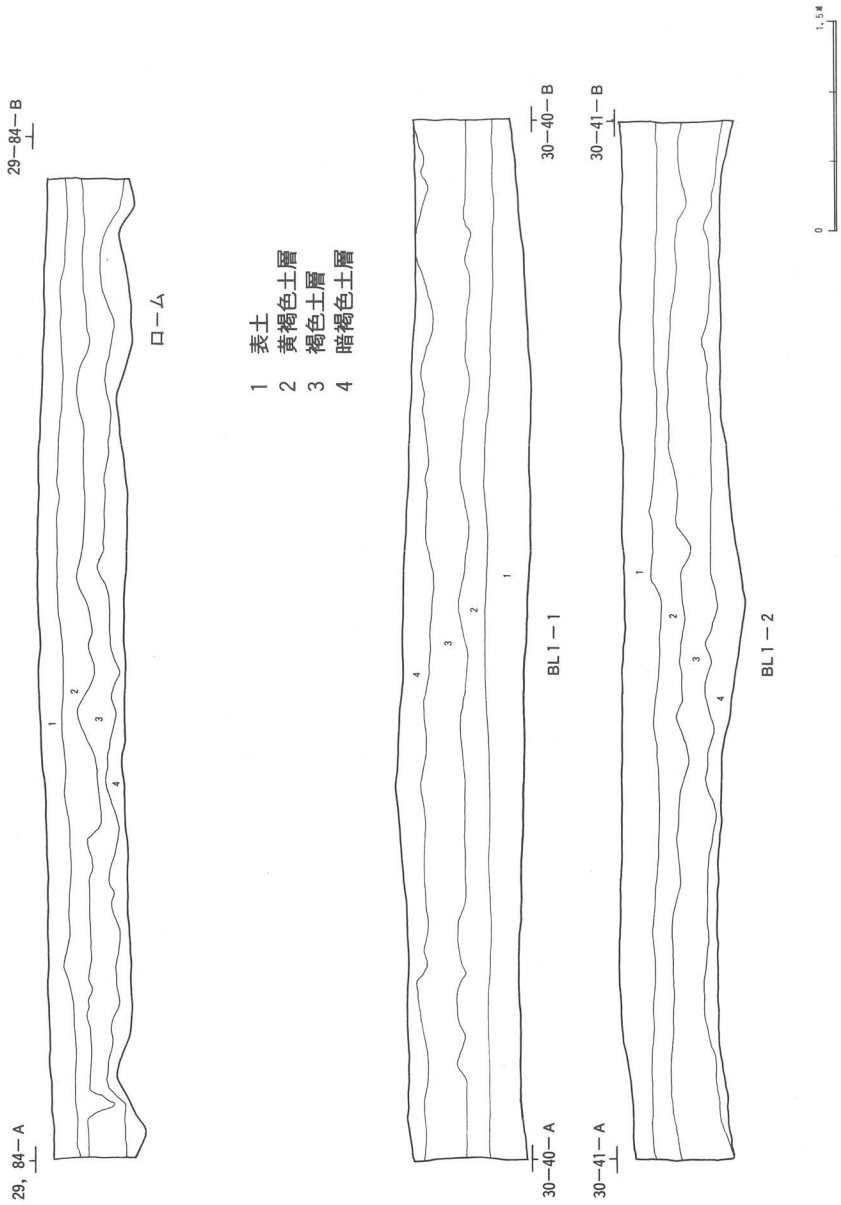
第１図　山王堂遺跡付近図



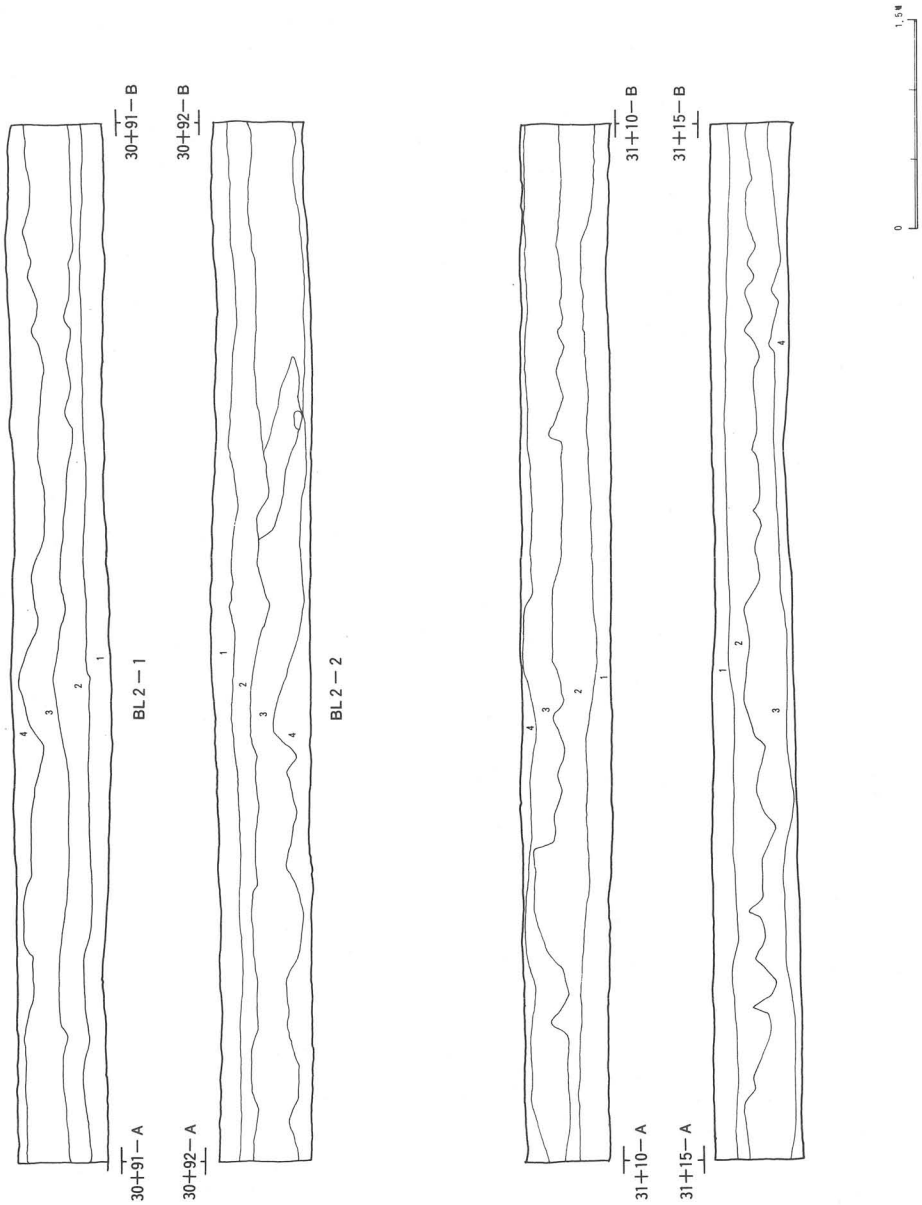
第３図　第一次発掘実測図



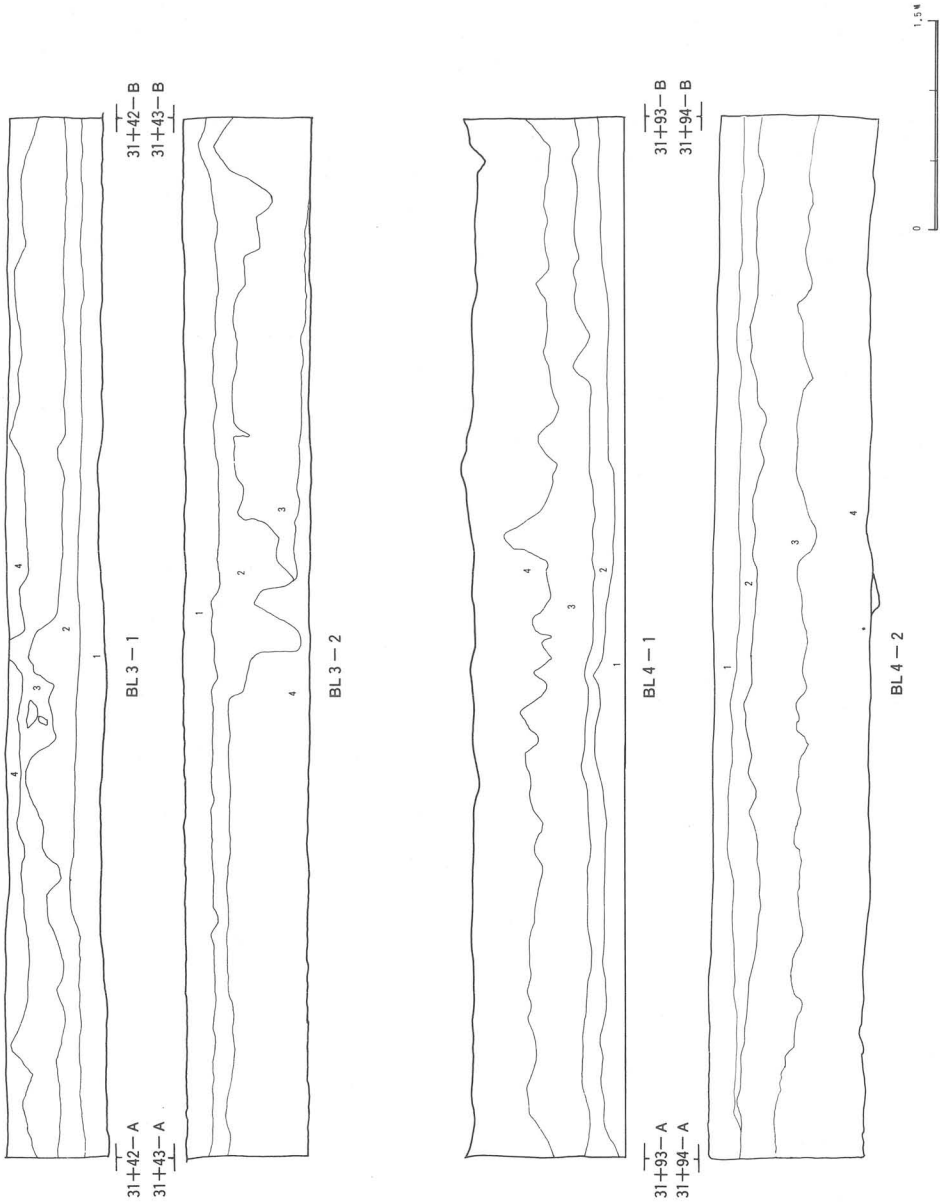
第4図　第二次発掘実測図


29−84−B
29, 84−A
ローム
1 表土
2 黄褐色土層
3 褐色土層
4 暗褐色土層
30−40−B
30−40−A
BL1−1
30−41−B
30−41−A
BL1−2
0
1.5M

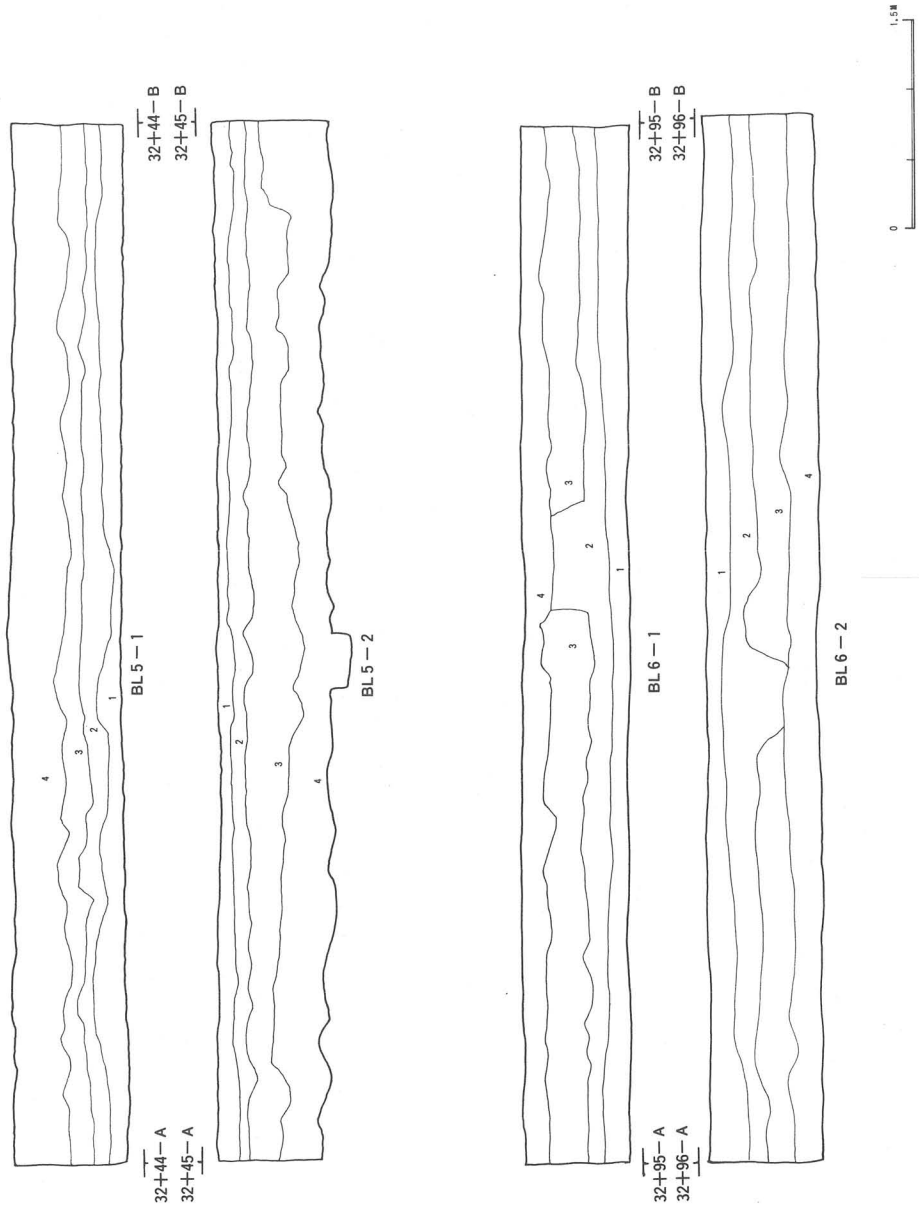
第５図　ベルト断面図－１


30+91－A
30+91－B
BL2－1
30+92－A
30+92－B
BL2－2
31+10－A
31+10－B
31+15－A
31+15－B
0
1.5M

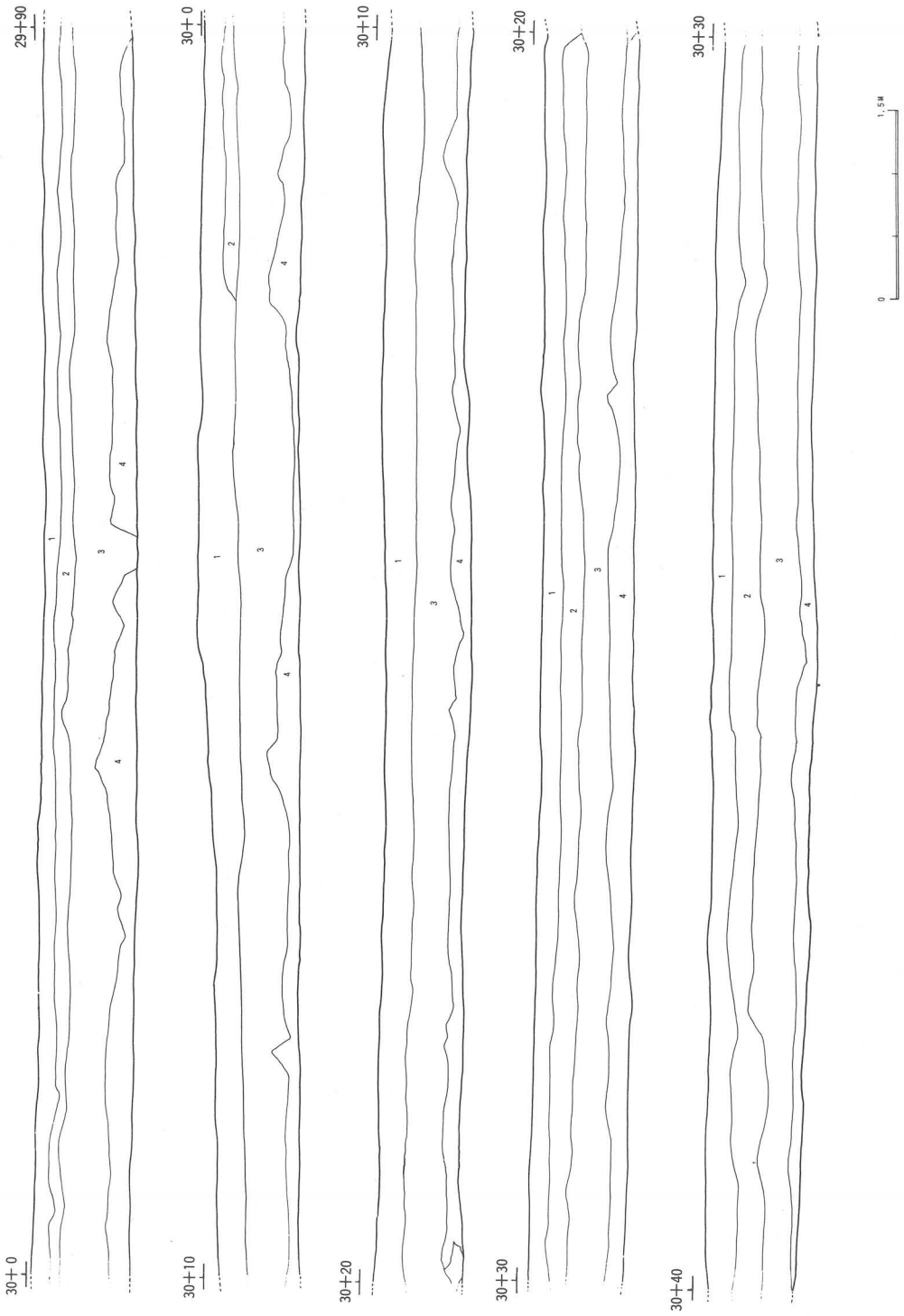
第6図　ベルト断面図－2


31+42－A
31+43－A
31+42－B
31+43－B
BL3－1
BL3－2
31+93－A
31+94－A
31+93－B
31+94－B
BL4－1
BL4－2
0
1.5M

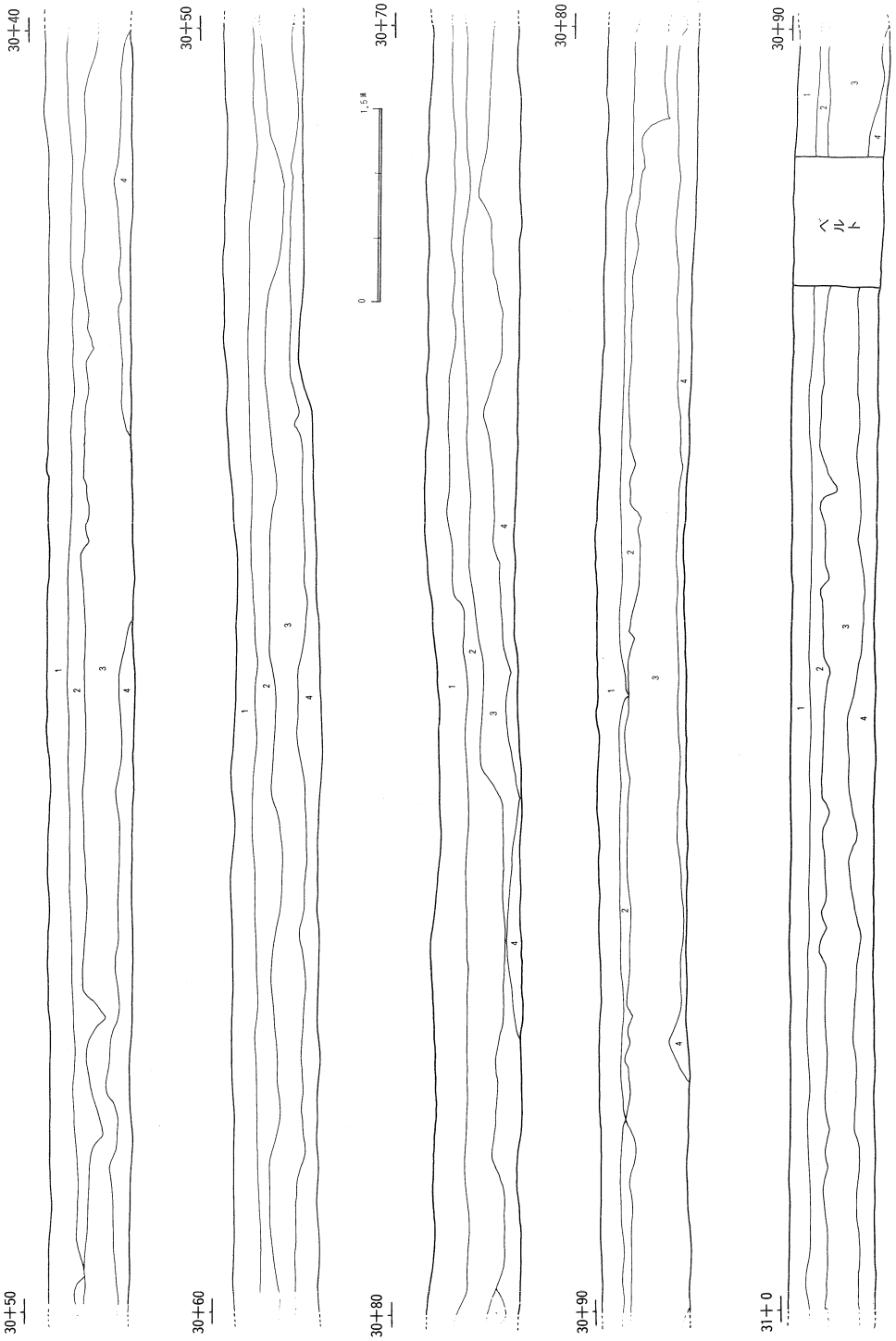
第７図　ベルト断面図－３


32+44－B
32+45－B
BL 5－1
BL 5－2
32+44－A
32+45－A
32+95－B
32+96－B
BL 6－1
BL 6－2
32+95－A
32+96－A
0
1.5M

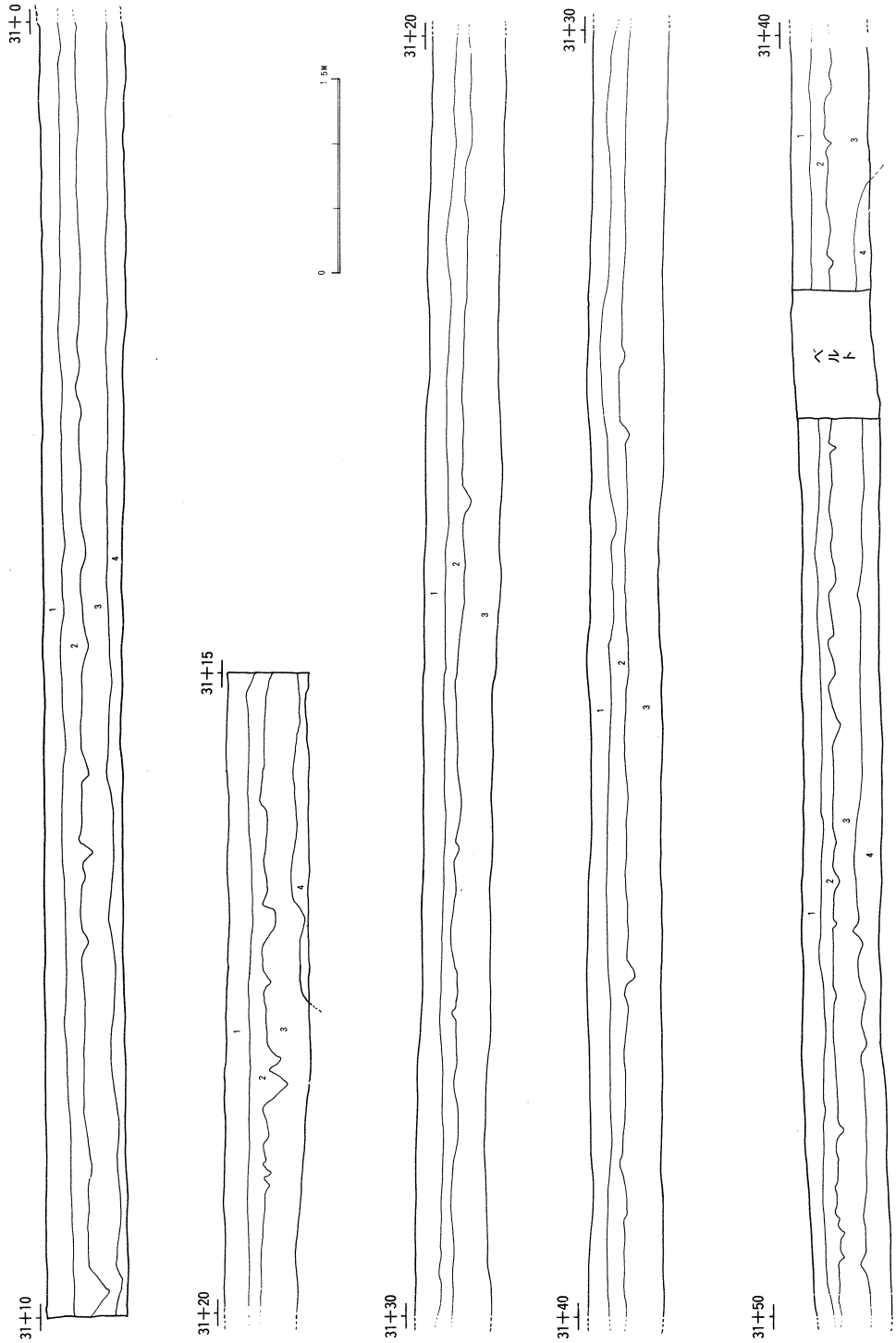
第８図　ベルト断面図－４



第９図　発掘側面図－１



第10図　発掘側面図－２


31+0
31+10
31+15
31+20
31+20
31+30
31+30
31+40
31+40
31+50
0
1.5M
ベルト
1
2
3
4

第11図　発掘側面図－3

第12図　発掘側面図－4

第２章　山王堂遺跡の調査

第一次発掘調査は県道下館・筑波線からほぼ直角に209.40メートル離れた地点から南西，大字倉持方向に328.7メートル，巾7.5メートルに，１メートル間隔にメッシュを組み，表土層上に散布する土器片の採集作業から開始した。

第１表は本遺跡から出土した主要出土品を示したものであるが，杭番（公団工事受注工事社設置の基準杭)No.30＋21～No.31＋70にいたる150メートルの範囲に集中して発見されており，この付近が山王堂遺跡の中央に付合することも考えられ，発掘調査もこのことを考え，表土層の除去作業を慎重に実施することとした。

特に遺物の集中する杭番No.30の60からNo.31の40までについては表土層のみの発掘にとどめ，トレンチ全域を中層まで発掘し，さらに確認のうえローム層までの除去を行なった。

その結果，杭番No.29の90から杭番No.30の40までに土師式住居跡５と土壙14，柱穴状遺構９基が発見された。また，杭番No.31の50からNo.33の17まででは，大溝を，杭番No.31の70から80までの間に，全域から柱穴状遺構17，土壙12が検出された。

また，この間の出土遺物として特筆されるものは石鏃，石斧，発火石，スリ石，石棒の他，杭番No.30の20～40に有孔土器円板２，同番の50で耳栓１，杭番No.31の60～80で有孔土器円板３，注口土器２と土器15が出土している。

表土層から第２層までの深さは0.14メートル，第２層から第３層までの深さは0.07メートル，第３層からロームまでは0.30メートルである。全体的にみて杭番No.31の80付近から急激に深くなり，表土からの深さは0.85メートル，レベルによる深さは0.9メートルである。

第１次調査により検出された遺構は柱穴状遺構，土壙及び住居跡と溝に別けられる。柱穴状遺構及び土壙と縄文式住居跡はほぼ中央部に集中的に発見されたが，土師式住居跡は遺跡の東・西両端近くに発見されている。形態の明らかな縄文式住居跡は２基，大型の土壙は68基で，柱穴状遺構の多くはその周辺に認められ，その外部を溝がめぐっている。

第１節　縄文時代の遺跡

１．縄文式住居跡

１は杭番No.31の20の南壁面にかかって発見されたものである。楕円形を呈する住居跡で,南北の径4.5メートル，東西の径は3.3メートルで，深さは0.2メートルである。柱穴及び炉跡は明らかでない。床面からは縄文土器の小破片が発見されている。土器は晩期の土器である。

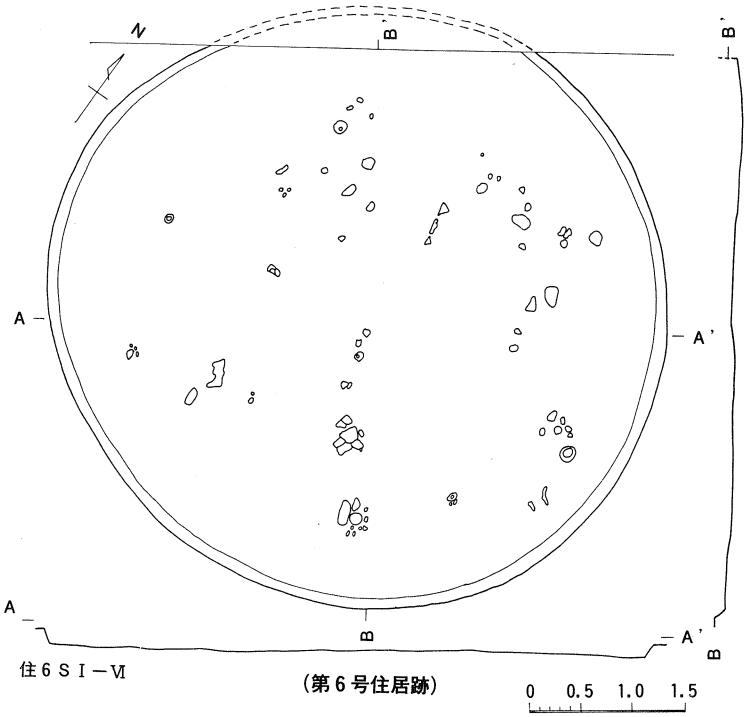
表1　主要出土品一覧表（第一次調査）

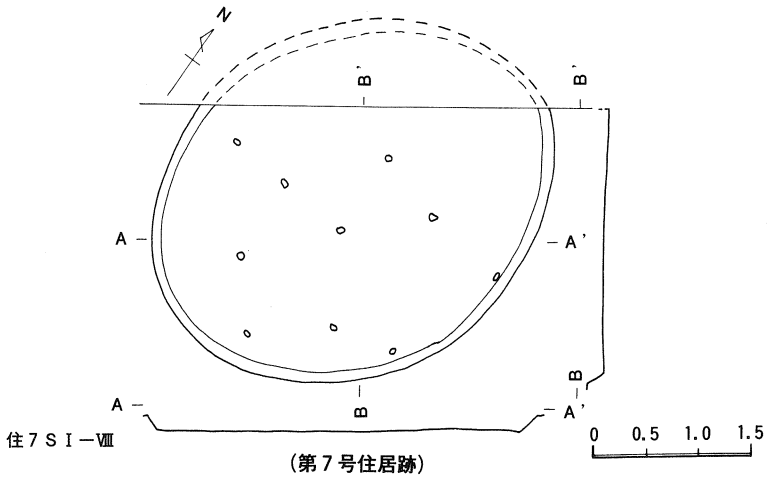
杭番	遺物名	石斧	石棒	スリ石	独鈷石	石錐	石鏃	発火石	石錘	支柱	ペンダント	有孔土器円板	耳栓	土器	土偶	注口土器及び破片	合計
29	84～ 90																
	91～100																
30	0～ 10													1			1
	11～ 20						1										1
	21～ 30	1								1		1		1			4
	31～ 40							1				1					2
	41～ 50												1	2			3
	51～ 60																
	61～ 70							1				1					2
	71～ 80								1					2	3	2	8
	81～ 90		3				1				2	2	1				9
	91～100		1					5	3			1		12	1	3	26
31	0～ 10	7	1			1	1	2	2	2		4		5		1	26
	11～ 20	1						1		1				2	6		11
	21～ 30		1												3		4
	31～ 40	1	1		1				1						1		5
	41～ 50													1			1
	51～ 60						3		1								4
	61～ 70	1										2		3		1	7
	71～ 80	1										1					2
	81～ 90						1									1	2
	91～100	1															1
32	0～ 10														1		1
	11～ 20																
	21～ 30																
	31～ 40																
	41～ 50						1										1
	51～ 60																
	61～ 70																
	71～ 80	1															1
	81～ 90																
	91～100		1	4				7									12
33	0～ 10	1	1					1						1			4
	11～ 20							1						3			4
	不　明		2				1	9			1			3		5	21
	合　計	15	11	4	1	1	9	28	8	4	3	13	2	36	15	13	163

（1991. 5. 31）

2は杭番30の5付近，この住居跡も一部が南側の壁にかかって発見されている。南北の径5.7メートル，東西の径は5.9メートル，ほぼ円形に近い住居跡で，深さは約15センチメートルと浅い。

周溝，炉，柱穴等は無く，この住居跡にも縄文土器片が30片近く床面に発見されている。



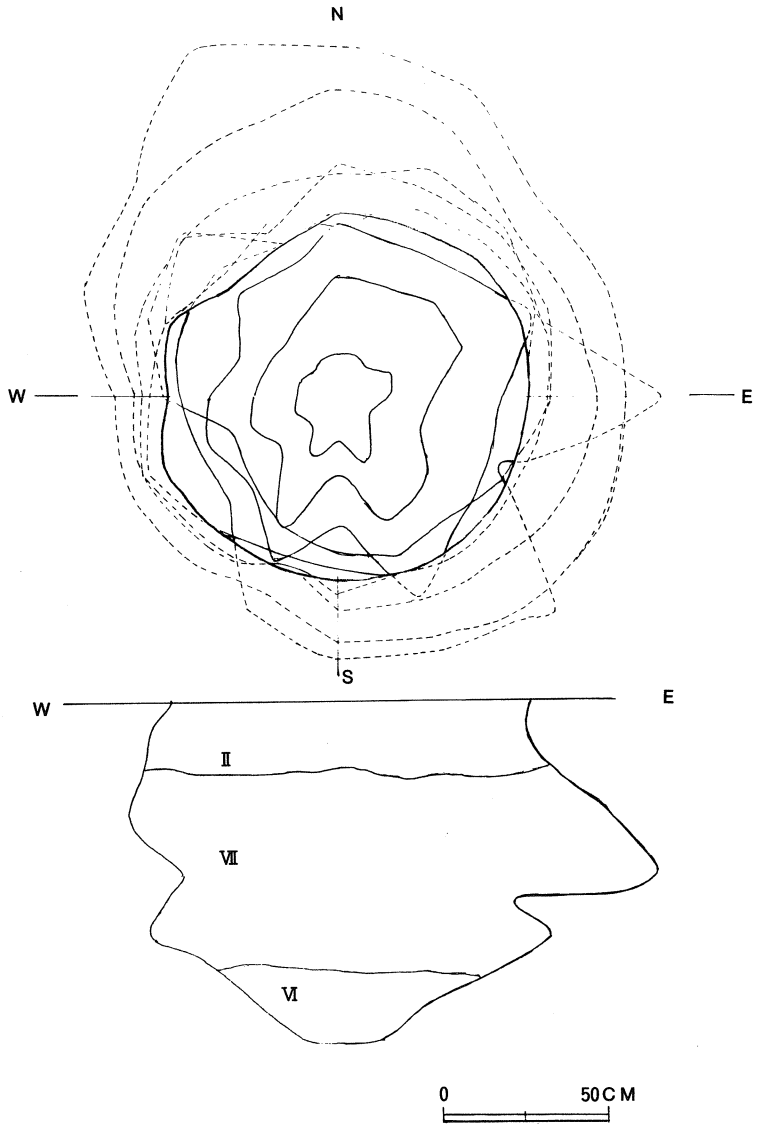


第13図　第6号住居跡及び第7号住居跡実測図

(1) 土　　壙

68基発見された。フラスコ状土壙は２例認められたが，その他は普遍的なものである。

直径は楕円形を呈するもので直径1.88メートル，短径0.98メートルのものであるが，平均して１メートル前後のものが多く，杭番No.31前後に集中している。深さは1.0メートル前後のものが多い。



第14図　第50号土壙実測図

表2　土壙一覧表

通し番号	杭番	杭番から距離	杭番から南への距離	直径	短経	深さ	通し番号	杭番	杭番から距離	杭番から南への距離	直径	短経	深さ
1	29＋90	8.50	2.50	3.25	1.40	0.20	38	31	0.50	1.32	1.03	0.82	
2	〃		1.75	0.76	0.63	0.60	39	〃	2.29	6.43	0.73	0.48	
3	30	3.25	4.50	0.68	0.38	0.45	40	〃	5.48	4.30	0.98	0.60	
4	〃	4.85	4.18	0.68	0.62	0.45	41	〃	7.72	6.34	0.62	0.49	
5	〃	9.50	4.80	0.80	0.80	0.48	42	〃	9.30	2.72	1.00	0.86	
6	＋10	1.10	3.61	1.72	1.28	0.30	43	31＋10	9.00	3.25	0.68	0.58	
7	〃	8.80	0	2.18	2.00	0.30	44	〃	9.28	2.40	0.54	0.40	
8	＋20	19.50	0	2.10	2.30	0.30	45	＋20	0	7.50	1.80	0.75	
9	〃	2.36	1.18	0.75	0.60	0.31	46	〃	2.50	5.05	0.66	0.54	
10	〃	3.10	1.85	0.76	0.74	0.25	47	〃	6.30	3.50	1.60	1.60	
11	〃	8.32	4.70	0.80	0.80	0.27	48	〃	7.93	2.48	1.35	0.93	
12	〃	8.75	6.08	0.85	0.72	0.23	49	〃	9.72	4.60	1.10	0.88	
13	＋30	6.22	6.24	1.61	0.80	1.49	50	＋30	3.00	6.50	1.88	0.98	
14	〃	5.88	2.70	1.00	0.74	0.95	51	〃	6.00	6.80	1.18	0.84	
15	〃	9.40	6.40	1.11	0.73	0.91	52	〃	7.28	0.70	1.90	1.02	
16	＋40	5.25	3.20	1.50	1.26	0.36	53	〃	8.32	4.95	0.35	0.35	
17	〃	5.05	4.65	0.89	0.80	0.36	54	〃	8.74	7.15	0.86	0.55	
18	〃	8.60	51.8	0.76	0.35	0.32	55	＋40	0.60	4.60	1.30	0.92	
19	＋70	4.71	4.50	0.53	0.53	0.53	56	〃	1.20	2.12	0.50	0.50	
20	＋80	12.23	2.75	0.86	0.80	0.43	57	＋50	0.60	5.10	0.78	5.10	
21	〃	4.04	2.12	0.94	0.60	0.41	58	〃	1.70	3.35	0.64	0.64	
22	〃	5.82	2.28	0.90	0.47	0.42	59	〃	2.40	4.30	1.00	0.78	0.35
23	〃	7.24	1.00	0.88	0.75	0.39	60	〃	2.52	5.52	0.86	0.74	0.35
24	〃	7.88	6.00	0.82	0.78	0.71	61	〃	4.70	5.60	1.03	0.96	0.40
25	〃	9.25	5.62	0.96	0.94	0.76	62	〃	7.74	1.12	2.20	1.42	0.35
26	〃	9.74	3.20	1.14	1.07	1.08	63	〃	8.98	5.10	1.44	0.94	0.57
27	〃	9.90	1.12	0.66	0.62	0.88	64	32＋20	1.36	5.97	2.00	0.86	1.05
28	＋90	1.08	7.00	0.52	0.12	0.36	65	〃	6.20	1.14	1.36	0.88	0.85
29	〃	2.82	1.12	0.62	0.54		66	＋50	8.50	1.90	1.82	1.70	0.40
30	〃	4.00	3.68	0.58	0.50		67	〃	9.26	5.00	1.80	1.63	0.30
31	〃	4.72	2.70	0.62	0.54		68	＋80	3.00	3.25	2.12	0.86	0.93
32	〃	5.40	5.22	0.70	0.64								
33	〃	5.60	4.28	0.77	0.58								
34	〃	6.30	5.40	0.56	0.56								
35	〃	7.00	1.22	1.01	0.70								
36	〃	8.98	2.00	0.91	0.76								
37	31	0.20	3.60	0.60	0.48								

(2) 柱穴状遺構

37例発見された。この遺構も杭番No.30の70付近から杭番No.31の60付近までに集中し，土壙に隣接して発見されているものが多い。平均的直径は30センチメートル，深さもほぼ35センチメートル前後で，杭番No.31付近の遺構の中には注口土器を納めていたものが3基あった。第3表は遺構の規模を集計したものである。

(3) 溝

3ケ所に見られる。杭番30の55付近のものは1条で，ほぼ南東方向から北西方向に向いている。上部の巾2.3メートル，下部の巾1.1メートル，深さ0.6メートルを示す。

その2は杭番No.31の35付近から杭番31の付近，杭番31の15のベルト中間から南東方向に延びる約10メートルの溝である。トレンチの北側から延びる溝は9メートルの付近で南にほぼ直角にまがって南壁に連なっており，この溝は杭番No.31の30から西，杭番No.30の80付近の遺構を囲繞している可

表3　柱穴状遺構一覧表

通し番号	杭番	杭番からの距離	杭番から南への距離	長径	短径	深さ
1	29	7.60	6.20	0.26	0.22	0.60
2	30	4.90	3.10	0.36	0.32	0.40
3	+10	6.68	5.65	0.44	0.44	0.33
4	〃	7.10	5.35	0.30	0.30	0.37
5	〃	7.32	5.00	0.38	0.30	0.57
6	〃	8.88	5.20	0.42	0.42	0.31
7	+20	3.80	4.15	0.22	0.20	0.50
8	〃	6.40	1.88	0.24	0.20	0.27
9	〃	4.38	3.16	0.31	0.28	0.24
10	+40	7.25	3.96	0.38	0.27	0.50
11	〃	7.70	1.08	0.34	0.26	0.36
12	〃	9.50	2.20	0.42	0.32	0.54
13	+70	3.20	0.62	0.23	0.23	0.40
14	〃	7.10	0.52	0.48	0.43	0.32
15	〃	7.22	5.86	0.37	0.35	0.50
16	+80	0.37	2.00	0.55	0.50	0.42
17	〃	5.38	5.00	0.58	0.52	0.62
18	〃	5.84	5.88	0.58	0.44	0.39
19	〃	5.88	1.15	0.30	0.30	0.36
20	〃	8.05	0	0.45	0.35	0.58
21	31+30	0.42	5.24	0.38	0.33	0.44
22	〃	0.74	4.24	0.43	0.32	0.45
23	〃	1.56	3.20	0.52	0.50	0.35
24	32+60	7.30	6.60	0.30	0.30	0.47
25	〃	7.70	1.56	0.30	0.30	0.36
26	〃	9.44	1.88	0.30	0.30	0.35
27	〃	9.50	3.10	0.42	0.32	0.42
28	〃	9.77	0.60	0.30	0.30	0.28
29	〃	9.72	2.26	0.34	0.30	0.33
30	+70	0.18	0.70	0.30	0.30	0.25
31	+90	1.88	6.88	0.32	0.32	
32	〃	3.42	4.90	0.30	0.30	
33	〃	3.72	3.00	0.30	0.30	
34	〃	3.90	5.12	0.30	0.30	
35	〃	5.80	3.52	0.32	0.30	
36	〃	7.89	3.12	0.32	0.30	
37	〃	7.04	2.02	0.32	0.30	

能性があると考えられる。

第３の溝は杭番No.31の70付近に見られる。東側の溝は巾2.3メートル，下部の巾1.1メートル深さは0.6メートルで，杭番30の55付近に見られた１の溝と類似している。方向は南東－北西を向く。この溝のすぐ西側に約0.8メートル距てて南々西－北々東を向く上巾0.5メートルの溝が発見されている。この溝については不明である。

第２節　縄文時代以外の遺構

縄文時代以外の遺構として，古墳時代以降の土師式住居跡が発見されている。

完形の遺構１基１，不完全のもの５基がある。

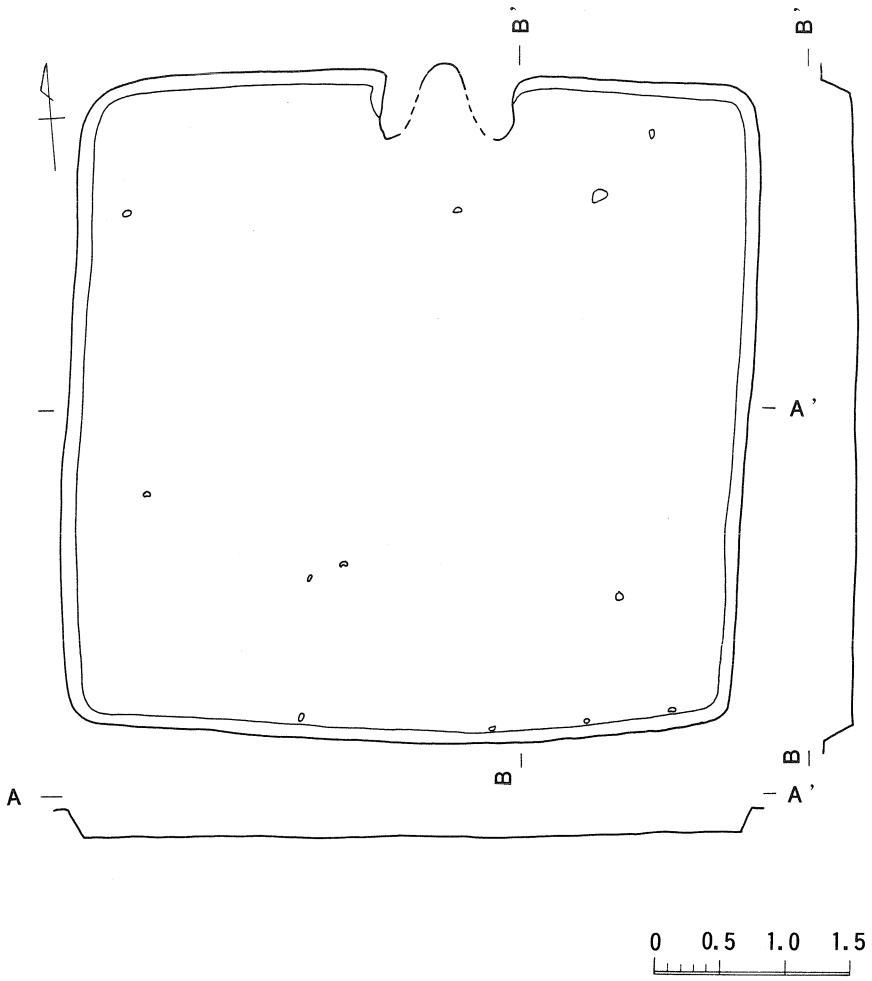
１．土師式住居跡

表４　土師式住居跡の概要

番　号	杭　番	長　径	短　径	深　さ	備　考
1	29＋90	3.70	3.20	0.15	
2	30	5.80	4.50	0.20	
③	30	3.80	3.80	0.10	
④	30＋10	3.40	3.40	0.20	
⑤	30＋20	5.00	4.50	0.22	
6	31	6.00	6.00	0.15	縄文
7	31＋20	3.50	3.50	0.15	縄文
8	31＋30	5.00	3.00	0.16	

(1)　第５号住居跡

杭番No.30の10から20の間に発見された。南北の長さ5.0メートル，東西の長さ5.2メートル，ほぼ方形のプランを有する住居跡で，北壁の中央にカマドをもつ。深さは一様でないが，最も深いところで0.22メートルである。隅丸方形を呈する。柱穴と思われる小穴がある他，南側壁下に西側隅からほぼ等間隔に４個の小穴が認められる。小穴の間隔は　メートルであるから，一辺に　個の小穴があけられてあったと考えられ，この住居跡は棰によって支えられた住居跡であったと考えられよう。住居跡内から遺物は発見されていない。



第15図　土師式第５号住居跡実測図

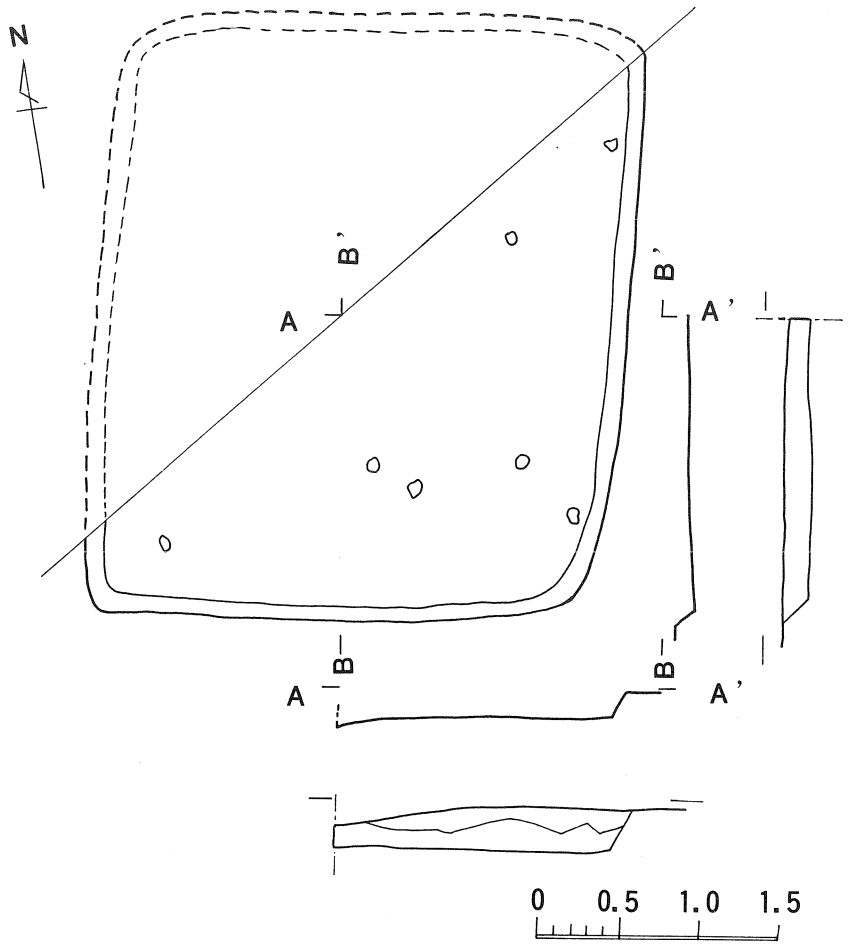
(2)　第１号住居跡

杭番No.29の90付近，南側壁ぞいに発見されたもので，北東隅から西南隅を側壁にして発見されている。東側の一辺の長さ3.7メートル，南側の一辺の長さは3.7メートル，深さは0.15メートルである。

この住居跡も東壁ぞいに２個の小穴が南北両隅近くに発見されているが，柱穴と見られるものは発見されていない。

(3)　第２号住居跡

杭番No.30の８付近に，第１号住居跡の西側に隣接して発見された。東西の長さ5.8メートル，



第16図　土師式第１号住居跡実測図

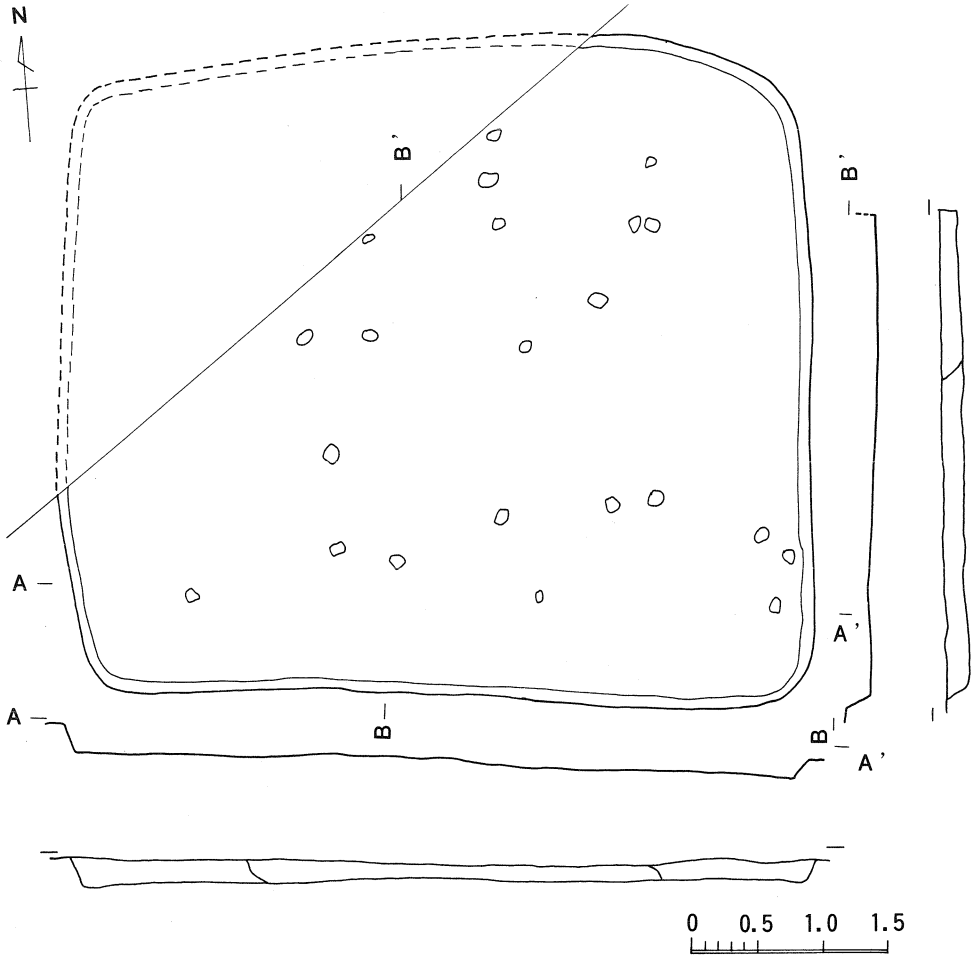
南北の長さ4.5メートル，深さは0.2メートルである。北側が南壁によって切られている。向きは南東－北西でカマドは発見されていない。

(4)　第３号住居跡

第２号住居跡に接して発見された。南東－北西の長さ3.3メートル，北東－南西の長さ2.5メートル，東西に長い小型の住居跡であるが北東隅がトレンチの南側壁にかかっている。北側の中央にカマドをもっている。深さは0.1メートルと浅い。

(5)　第４号住居跡

杭番No.30の５，北壁にかかって発見され，北西隅がかけている。南北の長さ3.25メートル,東

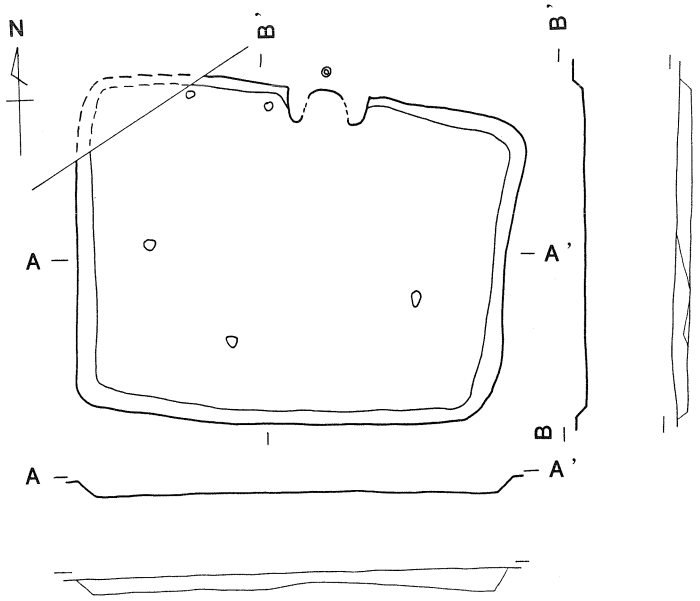


第17図　土師式第２号住居跡実測図

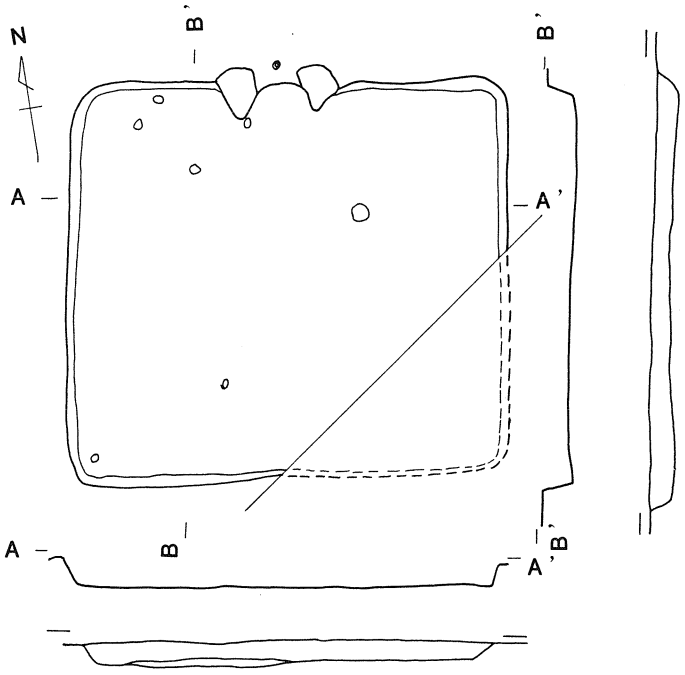
西側の長さは3.0メートルである。深さは0.2メートルである。北壁中央にカマドをもっている。土器が１個発見されている。

(6)　第８号住居跡

杭番No.31の26付近，トレンチ中央北寄りに発見された小形の住居跡で，東西の長さ3.3メートル，南北の長さ2.5メートル，深さ0.16メートルである。長方形を呈し，柱穴はなく,住居跡とはしたか不明である。



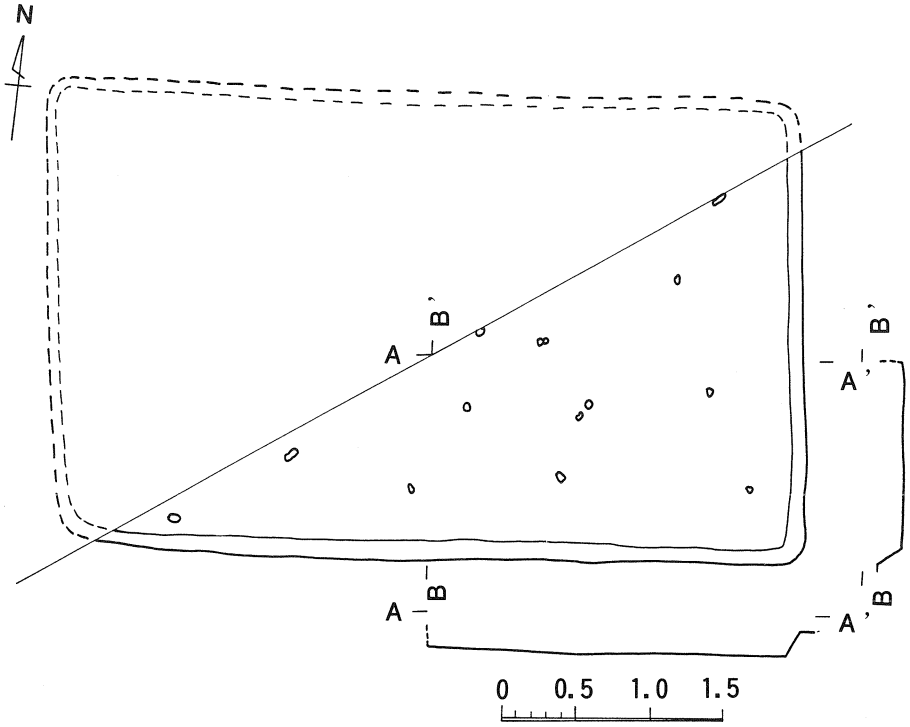
第３号住居跡



第４号住居跡

0　0.5　1.0　1.5

第18図　土師式第３・４号住居跡実測図



第19図　土師式第８号住居跡実測図

第３節　用 具 類

１　石　　器

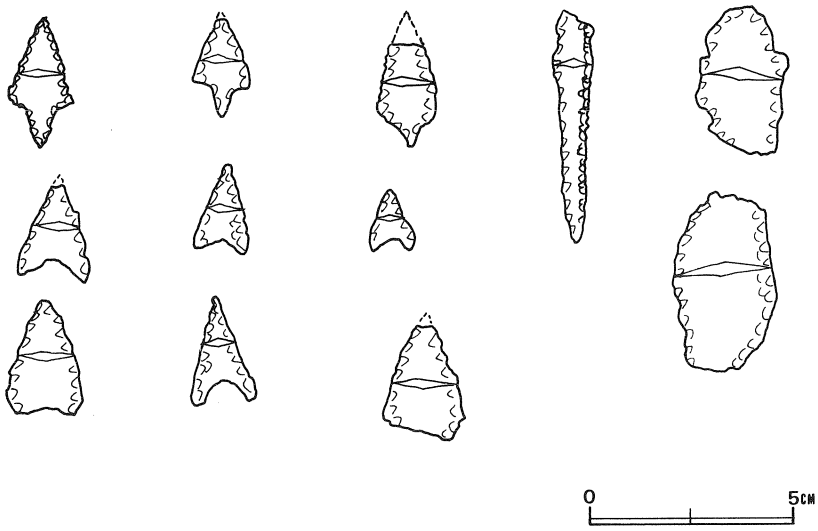
日常用具として石鏃，石錐，石錘，石斧，石棒，土錘等が発見されている。

(1) 石　　鏃

有柄式のもの３，無柄で「えぐり」をもつものが発見されている。材質は黒曜石，粘板岩，サヌカイト等が用いられている。９個発見されている。大きさは全長3.1センチメートル,柄の長さ0.9センチメートル，厚さは0.3センチメートルである。

(2) 石　　錐

１個発見されている。長さ3.5センチメートル，柄部の幅は0.5センチメートル，サヌカイト制である。



第20図　石鏃・石錐実測図

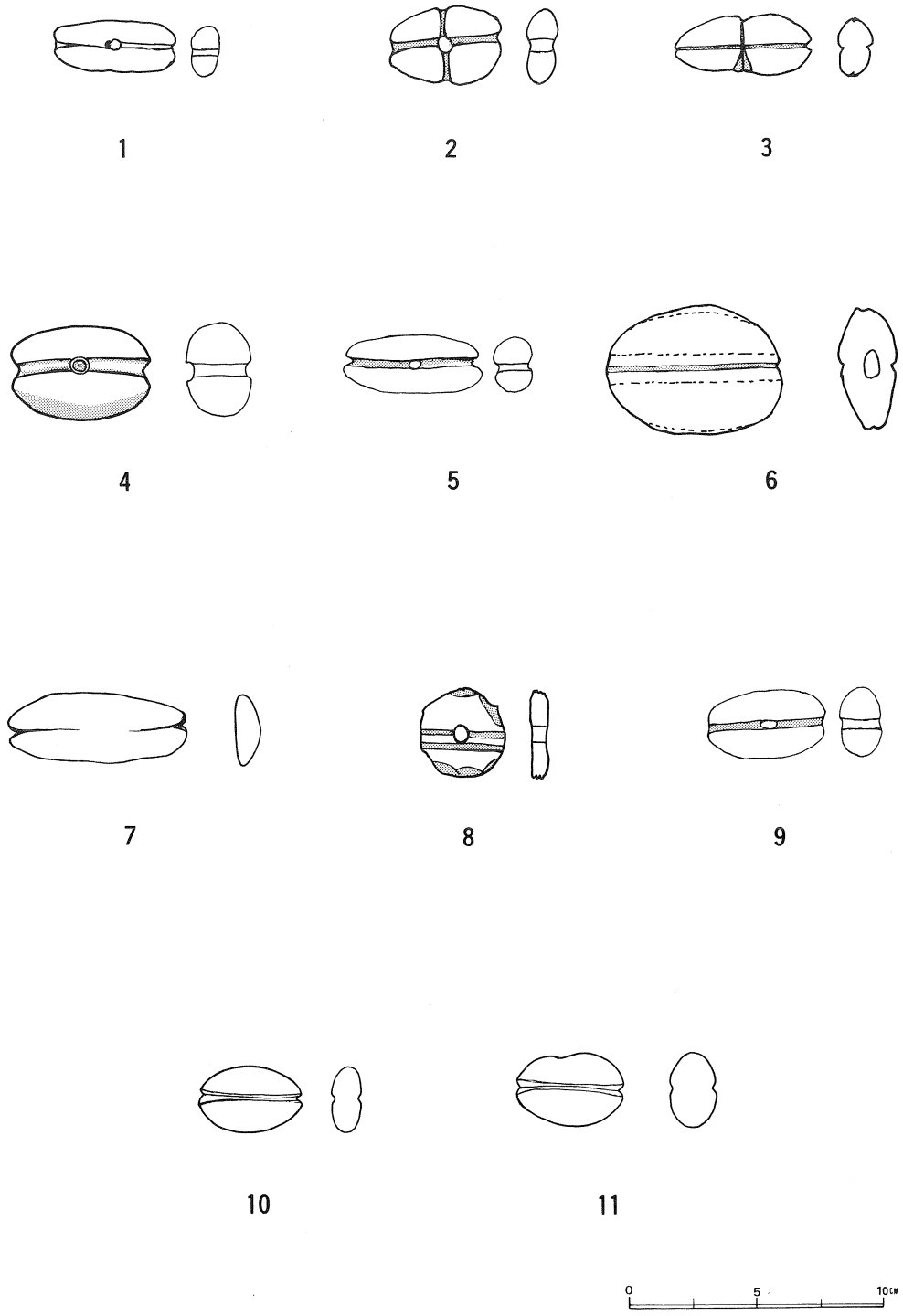
(3) 石　　錘

楕円形で比較的扁平な砂岩質の自然石を加工して，孔あけ，溝を掘って錘として利用している。発見された遺物から数種の利用法があったと考えられている。

その１は最も手のこんだもので，楕円形状で扁平な自然石を利用するか加工を加え，その表裏面に十文字の溝を擦込み,中央部に直径0.2センチメートルの小孔を穿ったものである。石錘の大きさは長径4.5センチメートル，短形は3.0センチメートル,厚さ0.8センチメートルである。中央の小孔の直径は0.6センチメートルである。

その２は自然石を扁平で楕円型状（小判型）に加工し，石の中央の表裏に十文字に擦込みを入れている。小孔はない。長径5.3センチメートル，短形2.0センチメートルである。砂岩製である。厚さは0.3センチメートルである。

その３は楕円形状で扁平な石の長い方の中央に擦込みを入れたもので，このタイプには中央に小孔を穿つもの４，無孔のもの２，扁平石の長い方に両方から中央付近まで擦込みを入れたもの，扁平な自然石を加工し，長い方に縦に小孔を穿っているものなど12個が出土したが，特殊なものとして,紡錘車状の直径3.3センチメートル，厚さ0.5センチメートルの中央に径0.5センチメートルの小孔を穿つ他，円板の中央に二条の擦込みを入れたものも発見されている。



第21図　石錘実測図

(4) 石　斧

殆ど打製の分銅型石斧とよばれるものが多く，局部磨製のもの，磨製石斧，小型の定角式石斧も１個発見されている。

分銅型石斧は８個発見されている。大きいもので長さ13.4センチメートル,幅5.0センチメートル，厚さ2.1センチメートル，最も小さいもので長さ6.5センチメートル，幅2.9センチメートル，厚さ1.3センチメートルで,平均的には長さ10.8センチメートル，幅4.7センチメートル，厚さ1.7センチメートル前後のものが多い。中央部を両方から「えぐり」，四周から打撃を加えて刃をたてている。表裏両面の中央付近には，自然石の平滑な面を残しているものもある。

磨製石斧は長さ11.0センチメートル，中央部で幅3.3センチメートル,先端を研磨して刃をつけてある。蛤刃である。刃部の長さは3.8センチメートルである。破片５がある。

定角石斧も２個出土している。石爪と呼ばれる類であろうか。長さ4.5センチメートル,刃部の長さ1.9センチメートル，厚さ0.3センチメートルである。他の１個は破片である。

(5) 石　棒

破片を含め12個発見されている。

無頭のもの，単頭のものがあるが，同一単頭の見当らないところから，両頭のものは出土していない。

断面が扁平なものが多いが，刃を付けたものもある。

復元できたものは長さ54.6センチメートル,断面の最大幅は3.0センチメートルで，粘板岩製と思われる。表面はよく磨かれている。

また，素材と思われるものも２個出土している。断面は楕円形を呈し，長さ27.0センチメートル，直径は最大1.8センチメートルである。

単頭の頭部の部分の破片も２個発見されている。断面は扁平である。頭部の長さ9.0センチメートル，厚さ2.8センチメートル,頭部の平面は楕円形を呈する。頚部から刀部にかけてはゆるいカーブを描いて連なっている。残存部の長さ19.2センチメートルである。他の１個もほぼ同様の破片である。長さ16.0センチメートル，頭部の長さ7.0センチメートル，幅は4.2センチメートルである。よく磨かれている。頭部を区画し，相対三角文を付している。

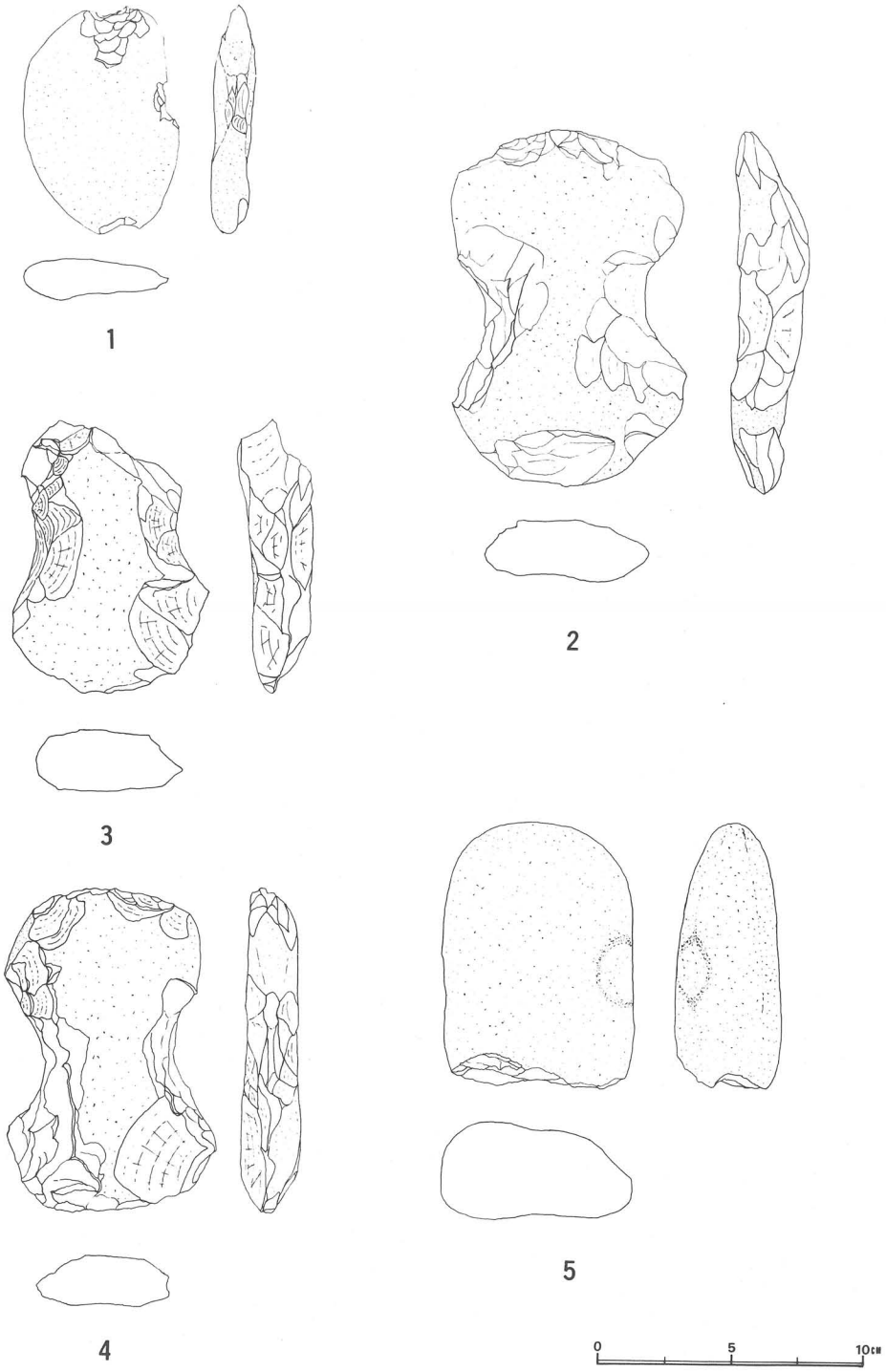
(6) 独 鈷 石

中央に２個の節状隆起をもち，両端が角状に突起している。長さ18.4センチメートル，最大断面5.2センチメートルで黒色を呈し，よく磨かれている。片方を欠く。

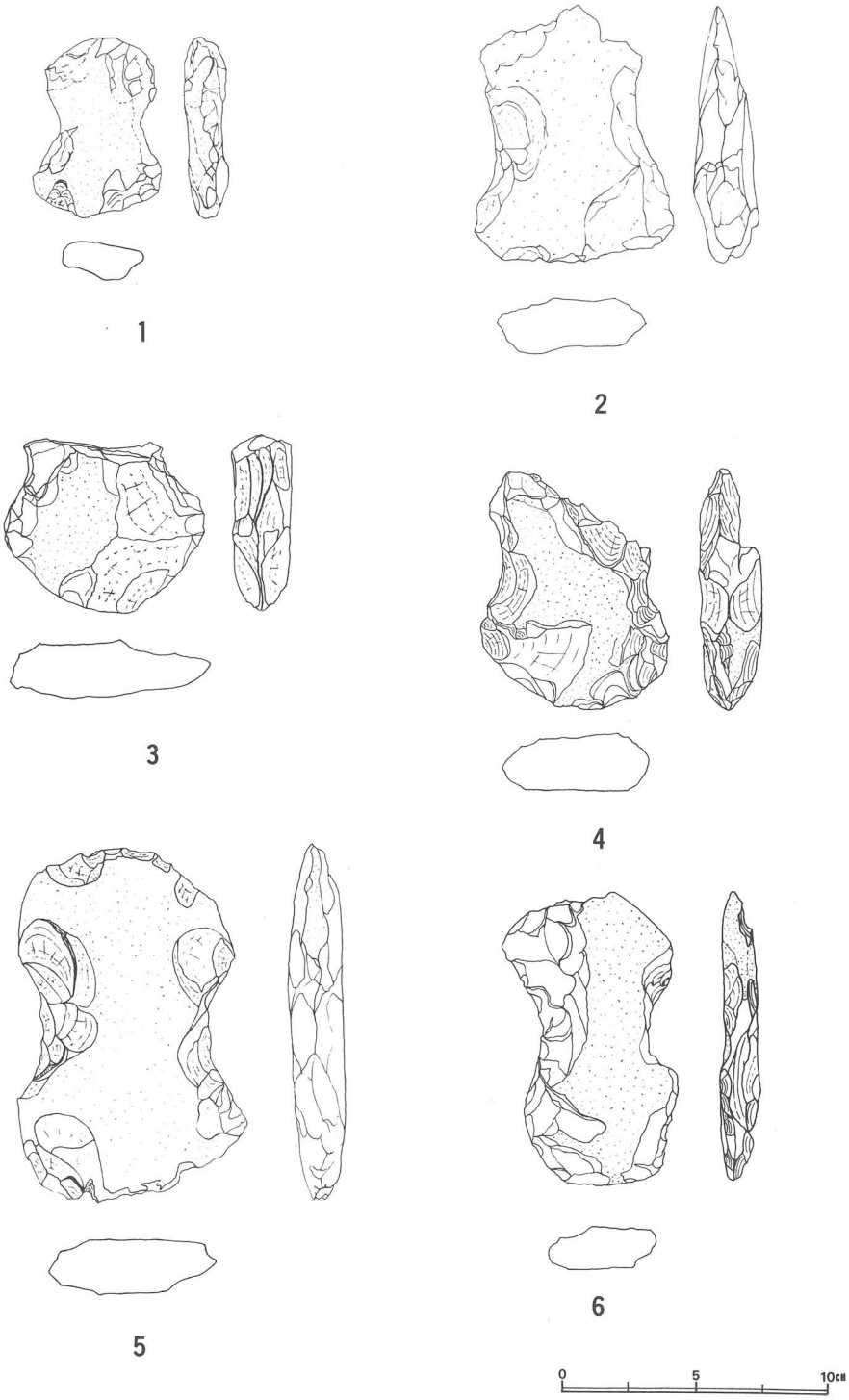
(7) ペンダント

２個発見されている。

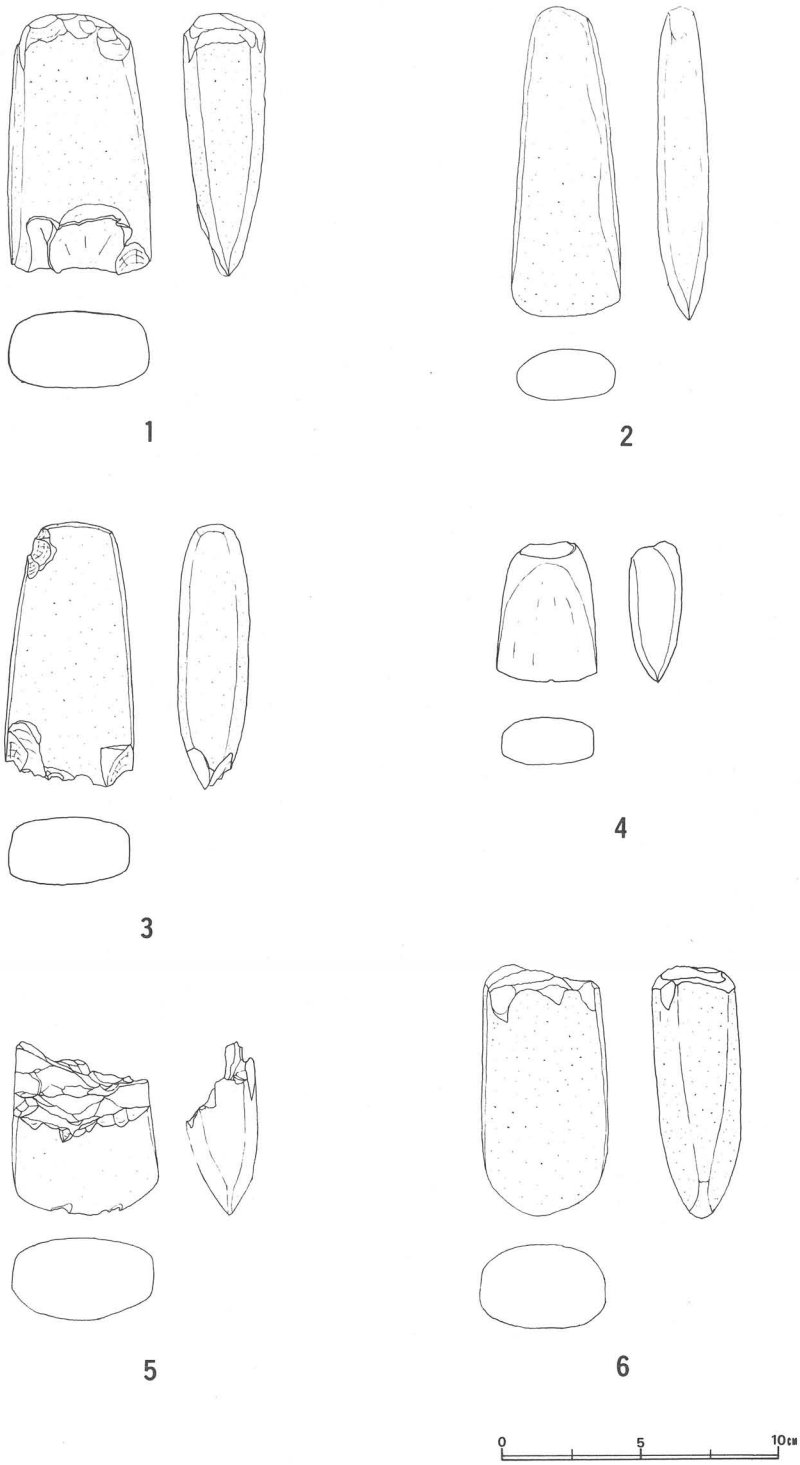
玉製の扁平な石を擦切って二等辺三角形状につくり，底部側の中央に直径３ミリメートルの小



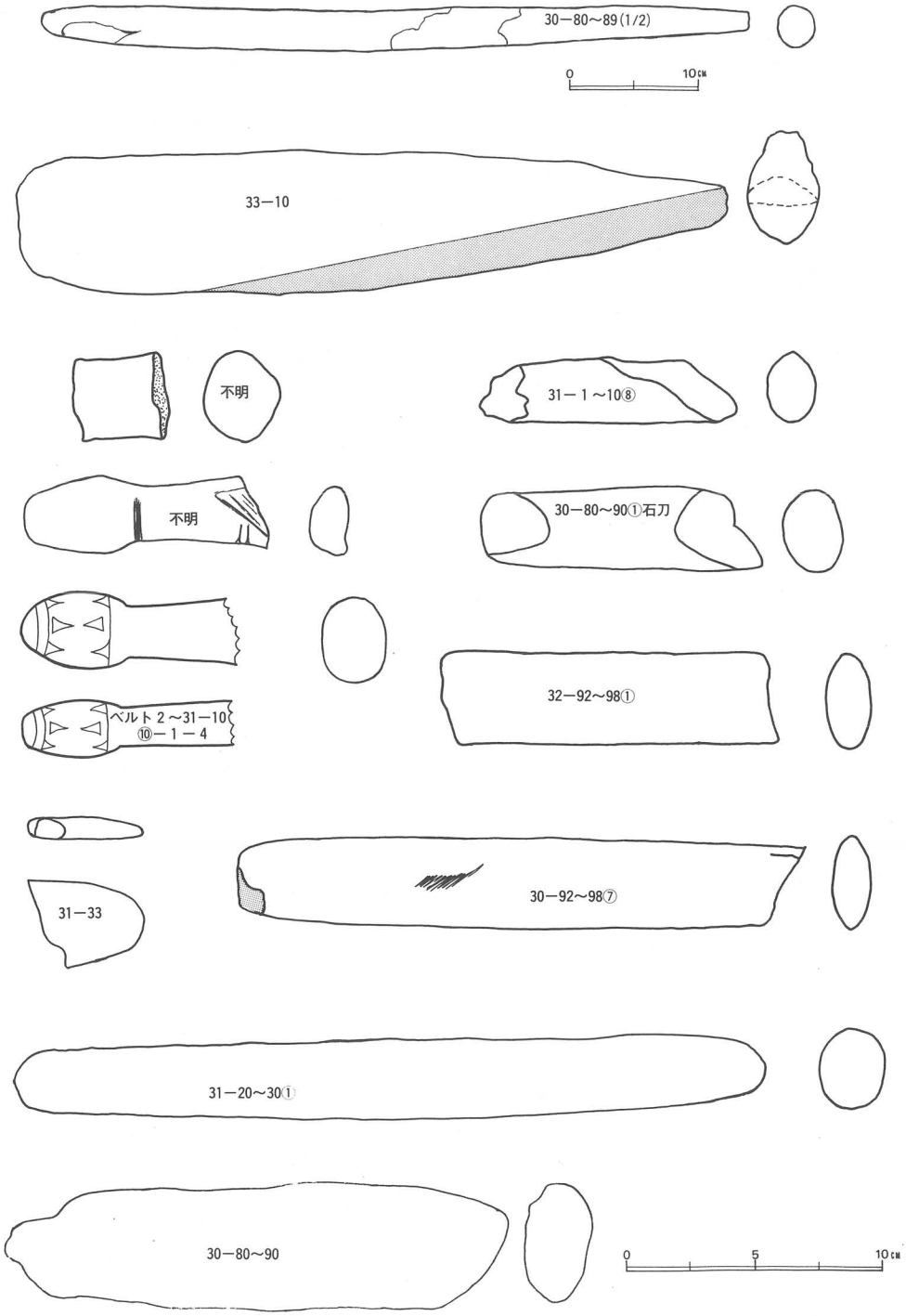
第22図　石斧実測図－1



第23図　石斧実測図－2

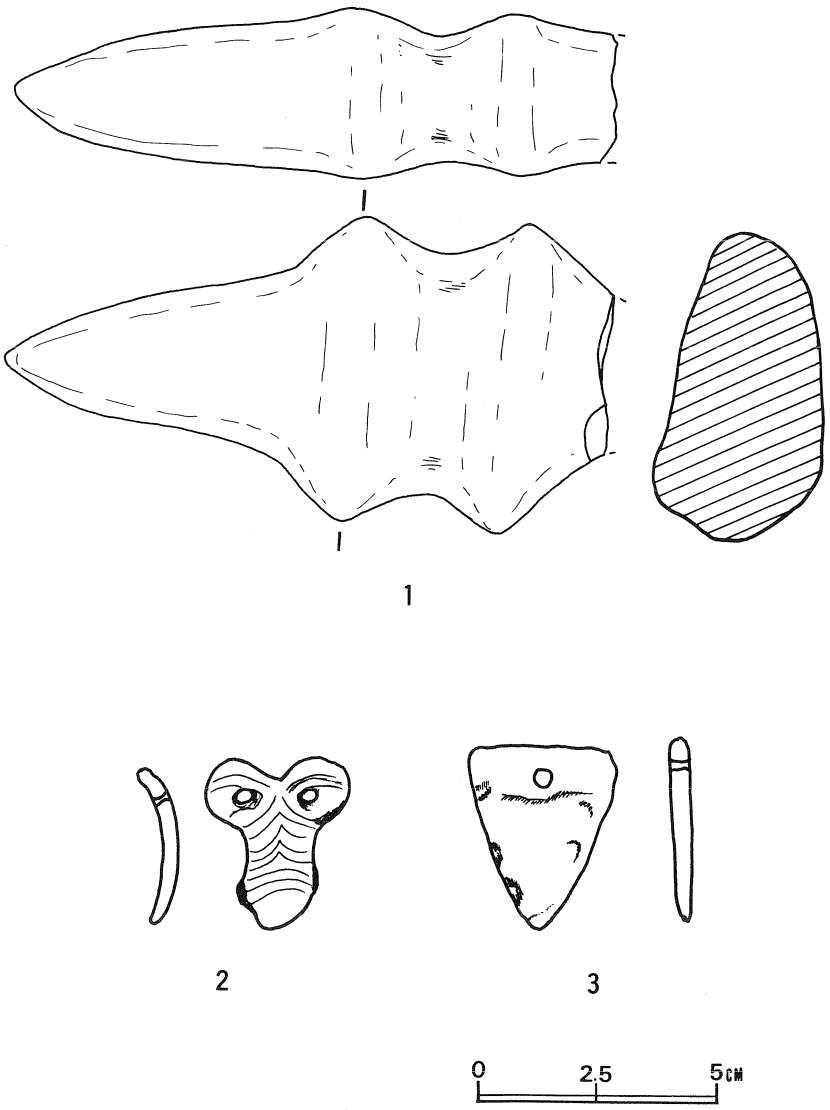


第24図　磨製石斧実測図

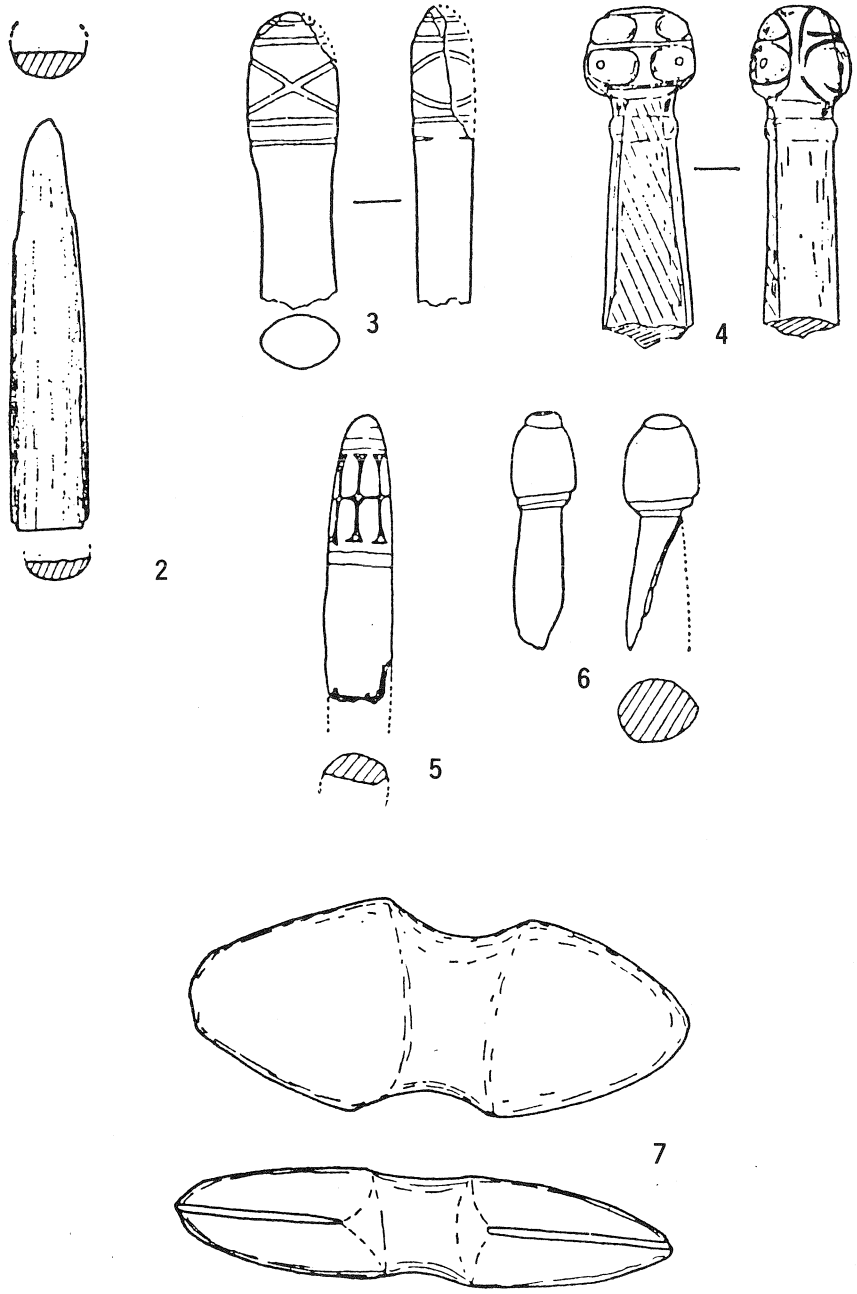

30−80〜89(1/2)
0
10cm
33−10
不明
31−1〜10⑧
不明
30−80〜90①石刀
32−92〜98①
ベルト2〜31−10
⑩−1−4
31−33
30−92〜98⑦
31−20〜30①
30−80〜90
0
5
10cm

第25図　石棒実測図

孔をあけている。乳白色を呈し,所々に玉状の塊が見られる。小孔側の長さ3.0センチメートル,高さ3.9センチメートルである。他の1個は同心円状をしたY字状の形に合せて,同心円を中心に沈線を配した長さ　センチメートル，最大幅2.7センチメートル，厚さ0.3センチメートルで,断面は「くの字」状を呈する。赤褐色を呈する美しいペンダントである。



第26図　独鈷石及びペンダント実測図



第27図　山王堂遺跡出土石棒，独鈷石実測図（明野町史所収）

2　石　　器

本遺跡から発見された土器は極めてバラエティに富んでおり，時代も縄文中期から晩期に及び南関東系の土器のみでなく東北系の土器も豊富に発見されている。破砕された土器片とはいっても僅かに幅7.5メートル，長さ600メートル,深さ1.2メートル前後の個所に20数万点が出土した訳であるから，バラエティに富むのも当然であろう。

(1)　縄文式土器

縄文時代中期と思われるものは極めて少なく，全出土量に占める数もごく僅かにすぎない。文様等から阿玉台式土器，勝坂式土器が見られる他，加曽利Ｅ式土器が発見されている。

次に後期土器であるが，後期土器も中期土器同様，南関東系のものが多く東北系のものはない。土器様式としては称名寺式，堀ノ内式，安行Ⅰ式，Ⅱ式，加曽利Ｂ式土器が出土している。安行系土器の中には粗製土器も含まれている。

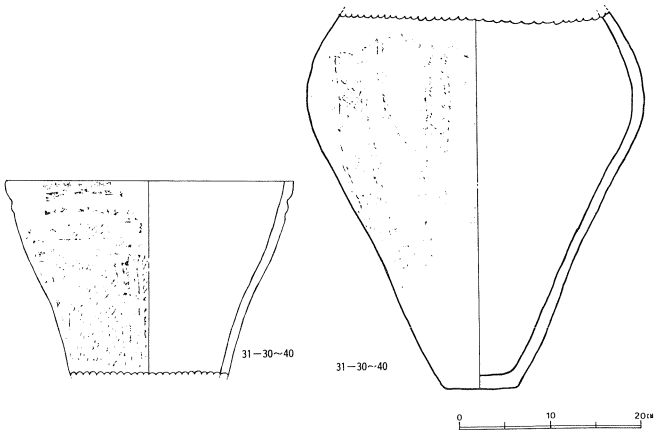
晩期土器には南関東系の安行Ⅲａ，Ⅲｂ，Ⅲｃ土器，前浦式土器と思われるものの他，東北系の大洞Ｂｃ，Ｃ，ａ式等の土器が発見されている。

また，これらの土器の用いられた所産とみられるものに，注口土器，土偶，有孔土器円板，小型手づくね土器がある。

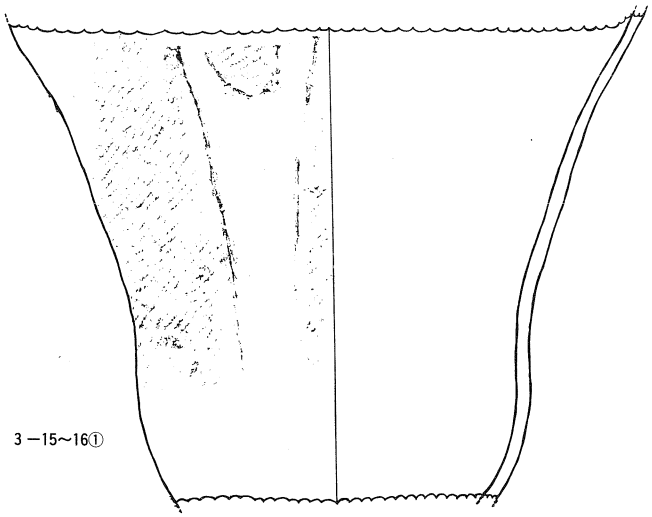
縄文以外の時期の土器類

縄文以外の土器としては，縄文時代に続く弥生時代の弥生式土器，古墳時代・歴史時代の土師器・須恵器・中世土器等があるが，弥生式土器については，晩期末の前浦式土器が大洞Ａ等が発見されているにも関わらず一片も発見されていない。今後更に詳細に検討する必要があろう。両方の倉持遺跡からは弥生式土器が報告されている。

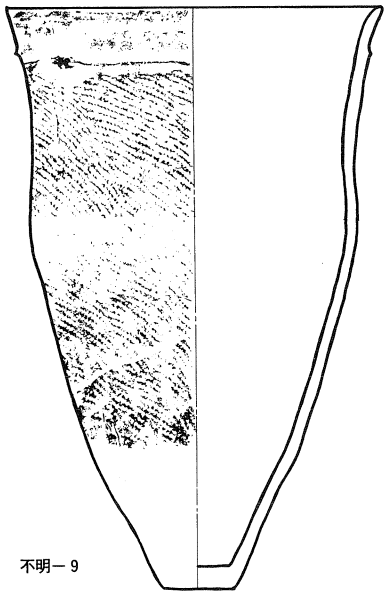
古墳時代以降の土器については次のようである。



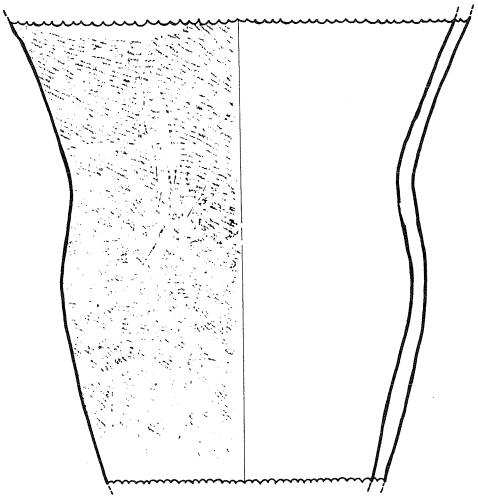
第28図　縄文式土器実測図－１



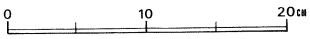
1



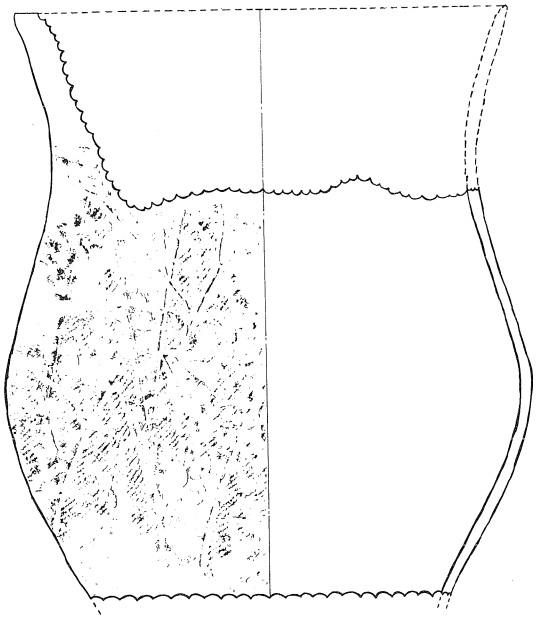
2



3

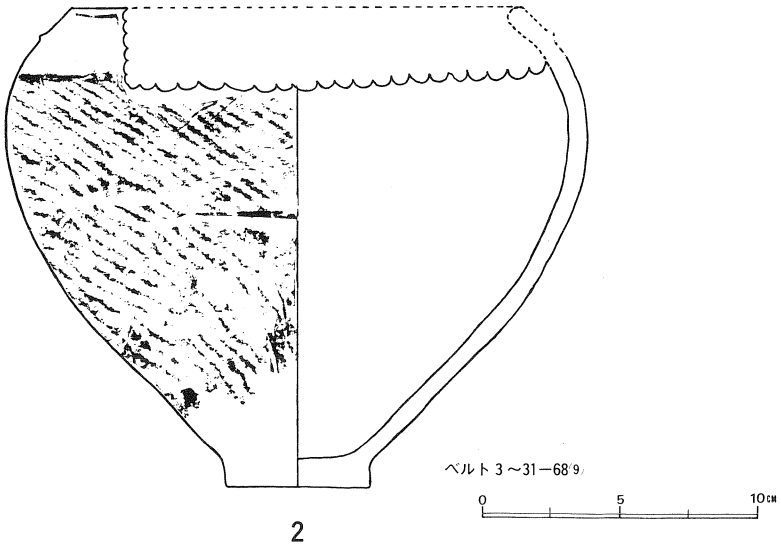


第29図　縄文式土器実測図－2



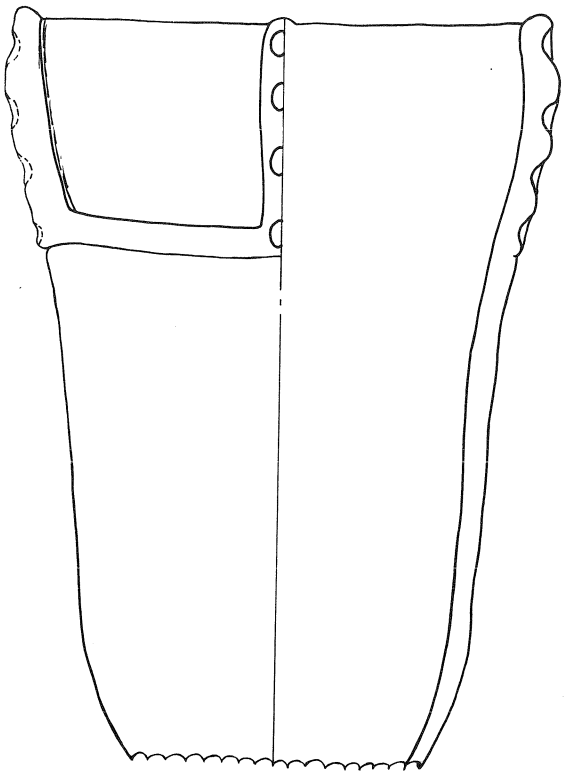
30－20～30⑬

1



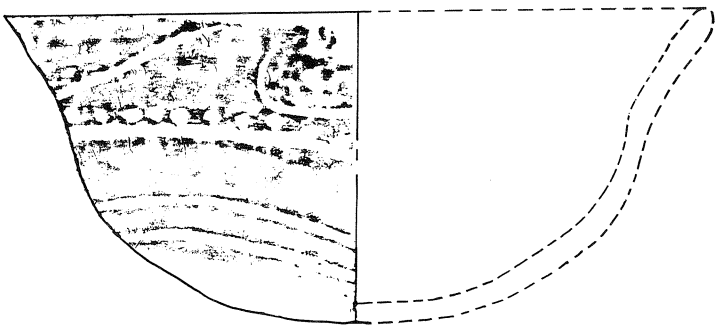
2

第30図　縄文式土器実測図－３



31－55

1

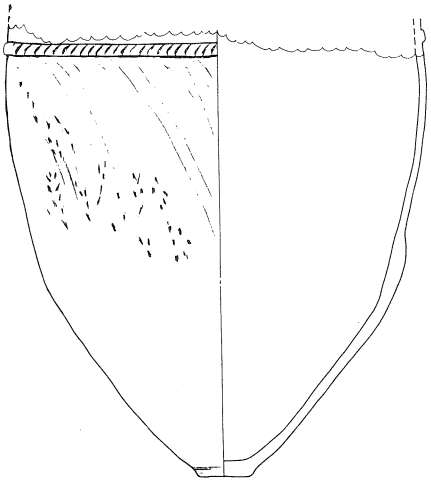


30－92～98

2

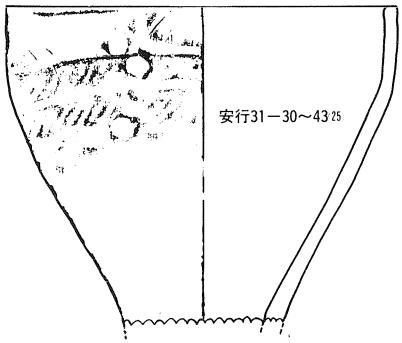
0　5　10cm

第31図　縄文式土器実測図－4

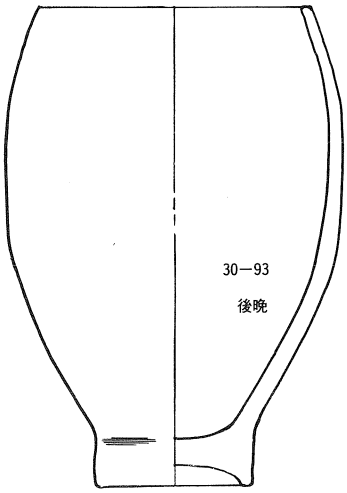


31－10① (1/2)

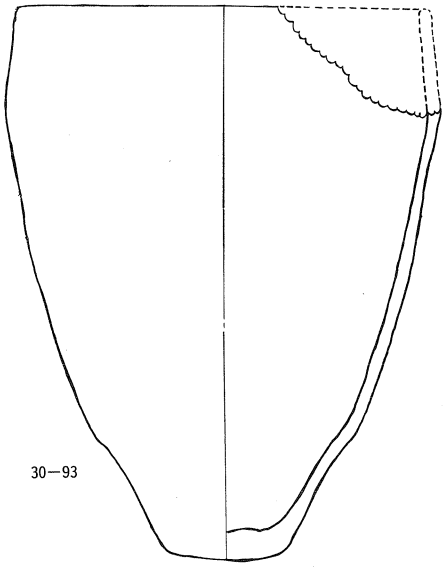
1



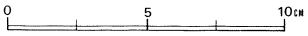
2



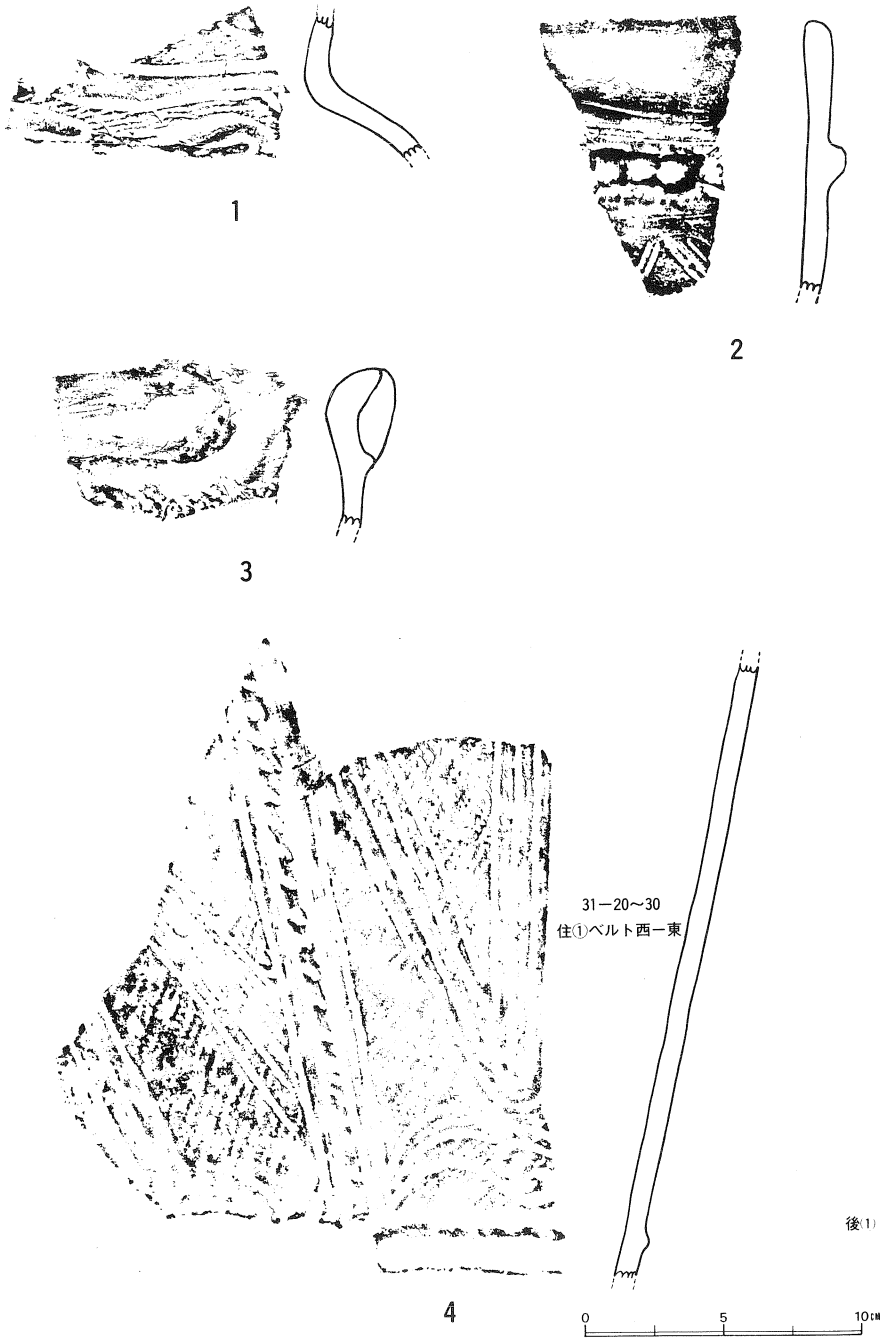
3



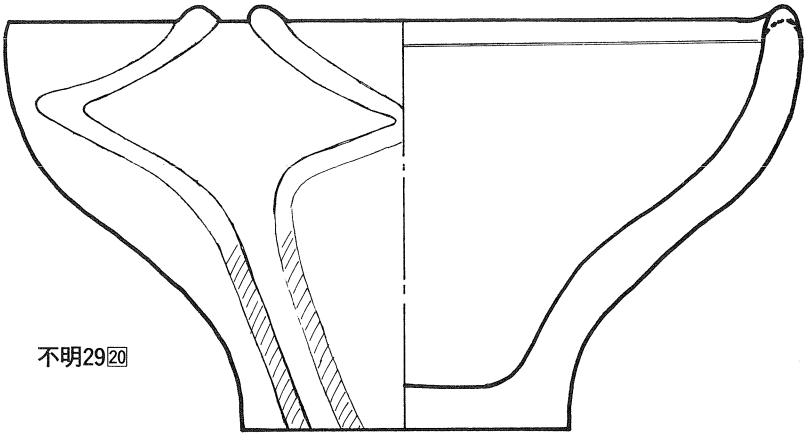
4



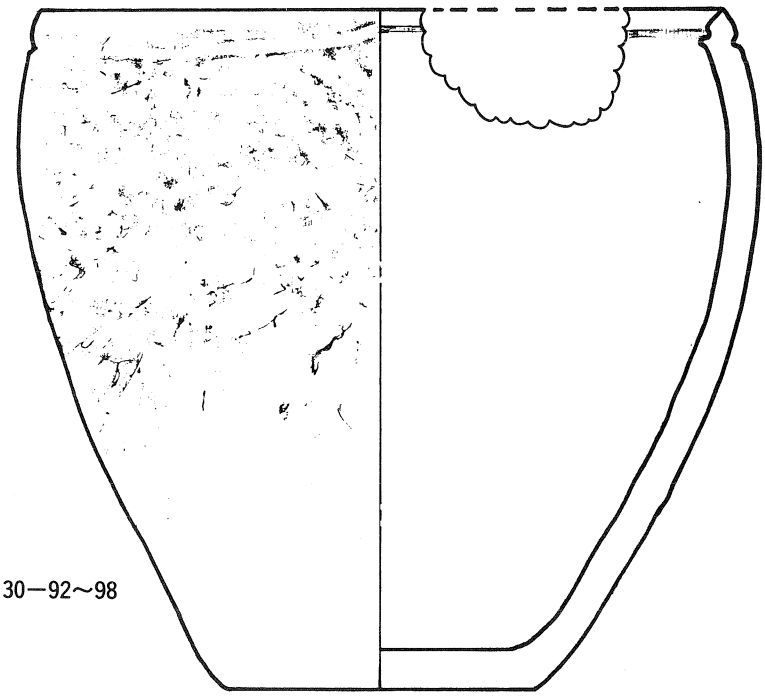
第32図　縄文式土器実測図－5



第33図　縄文式土器拓影－1



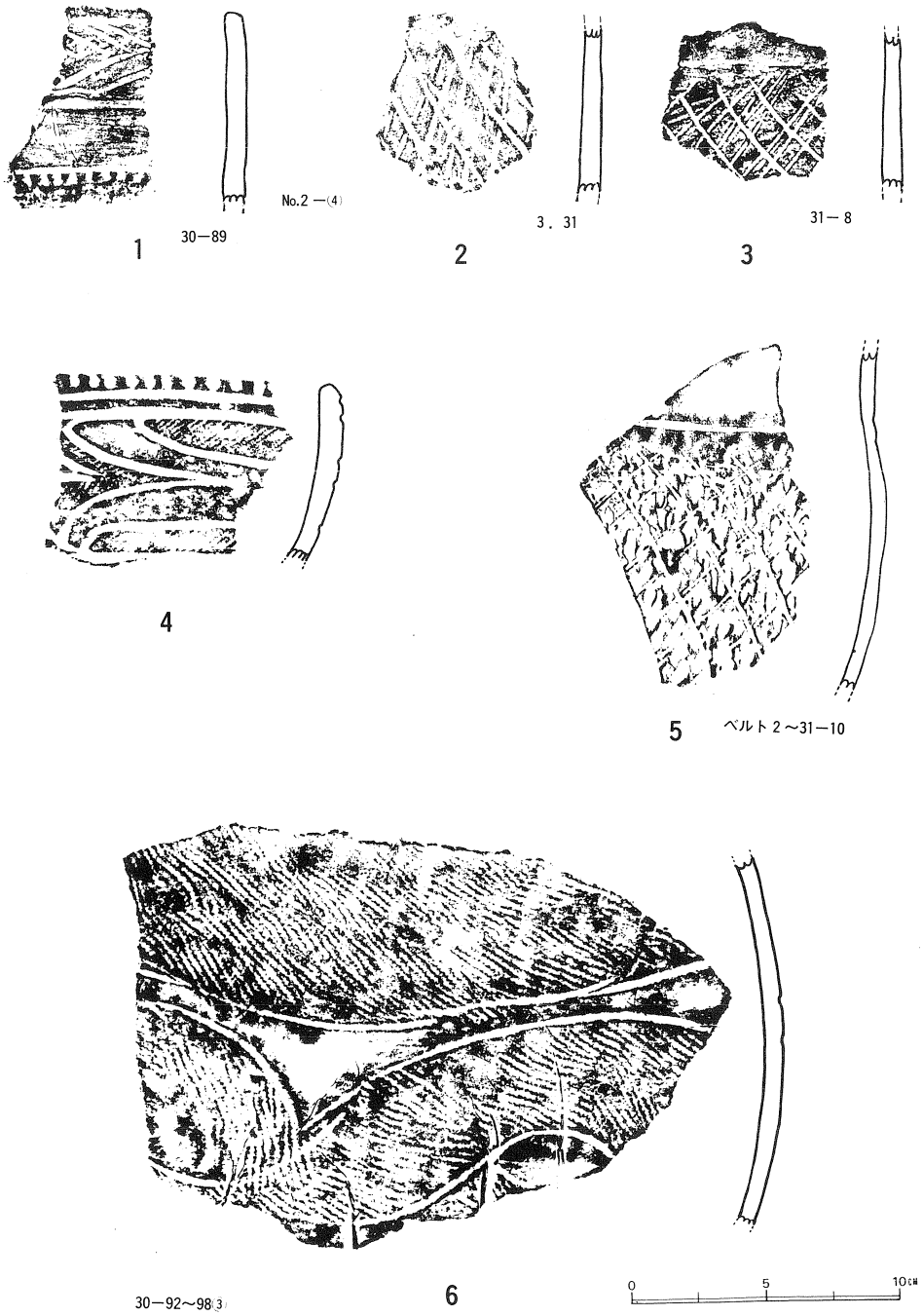
1



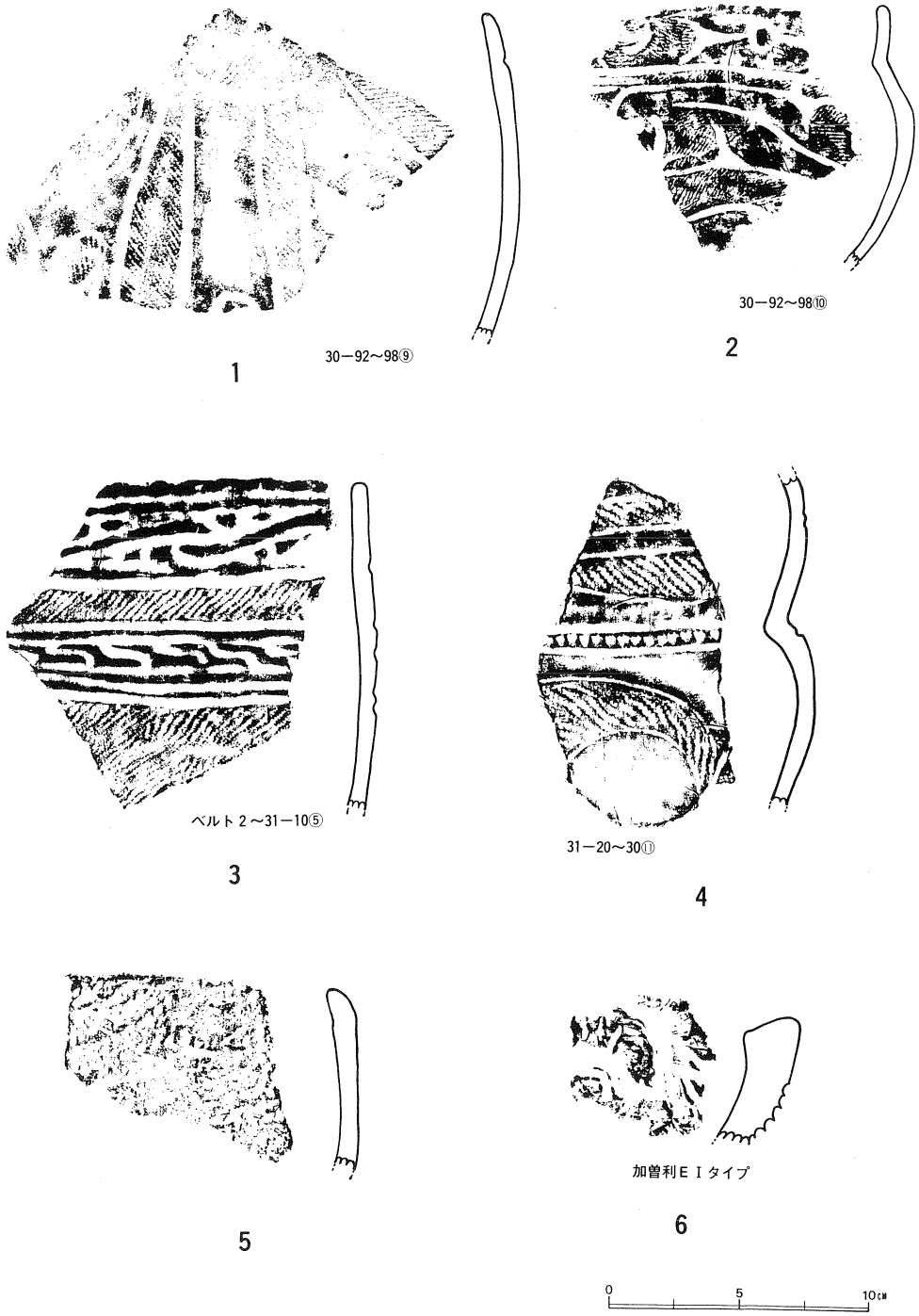
2

0　5　10cm

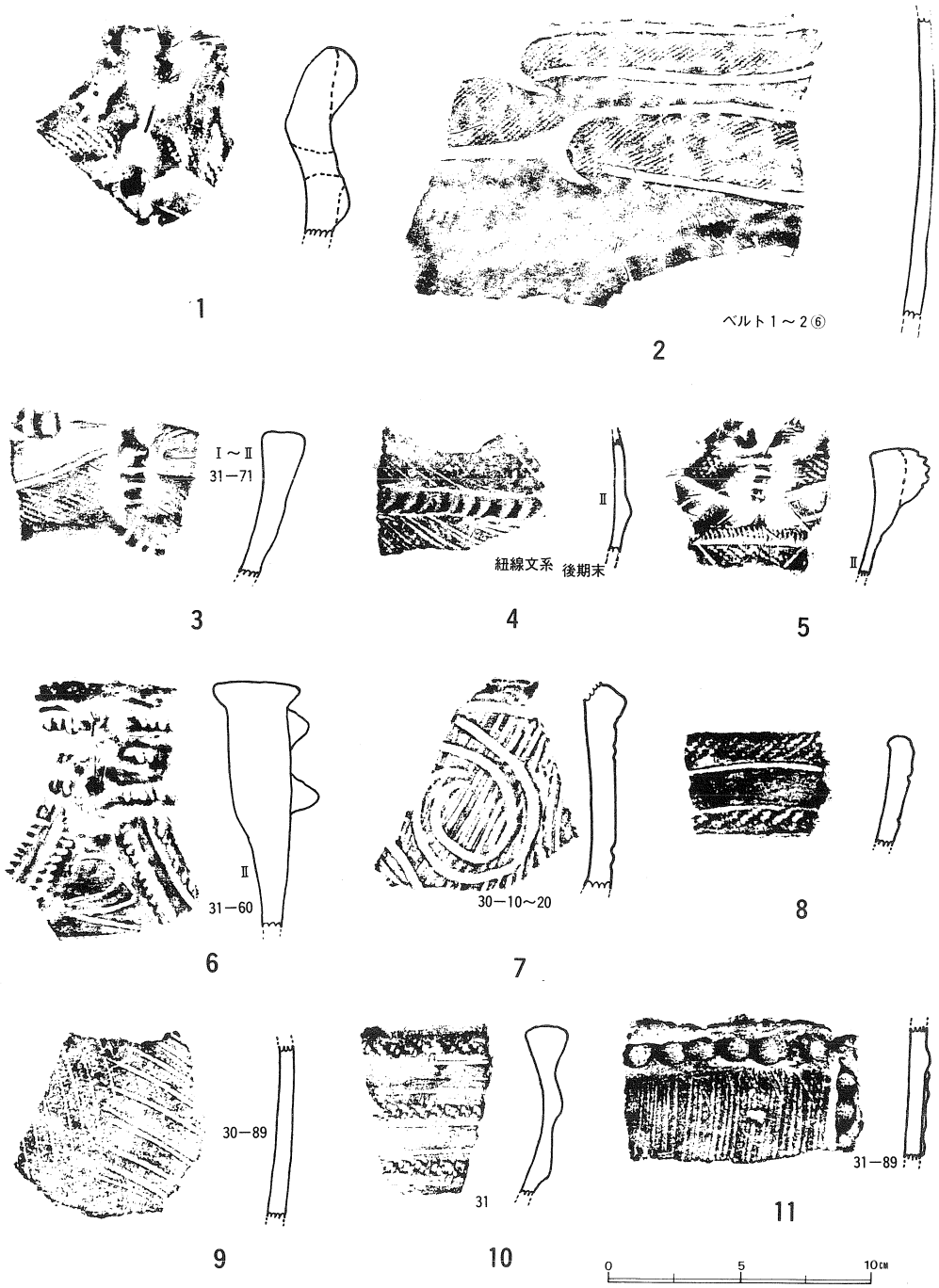
第34図　縄文式土器実測図－6



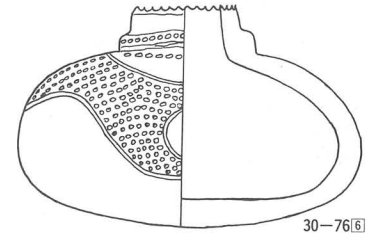
第35図　縄文式土器拓影－2

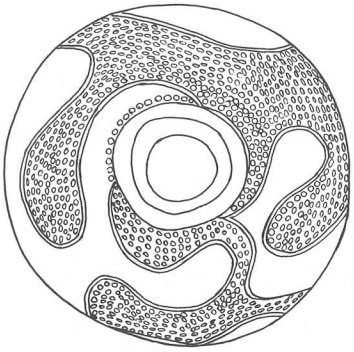


第36図　縄文式土器拓影－３



第37図　縄文式土器拓影－4

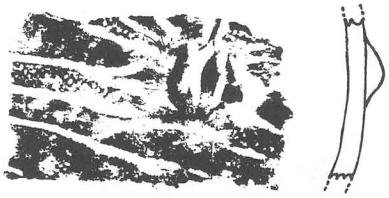




1

2

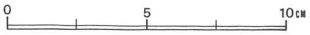
3



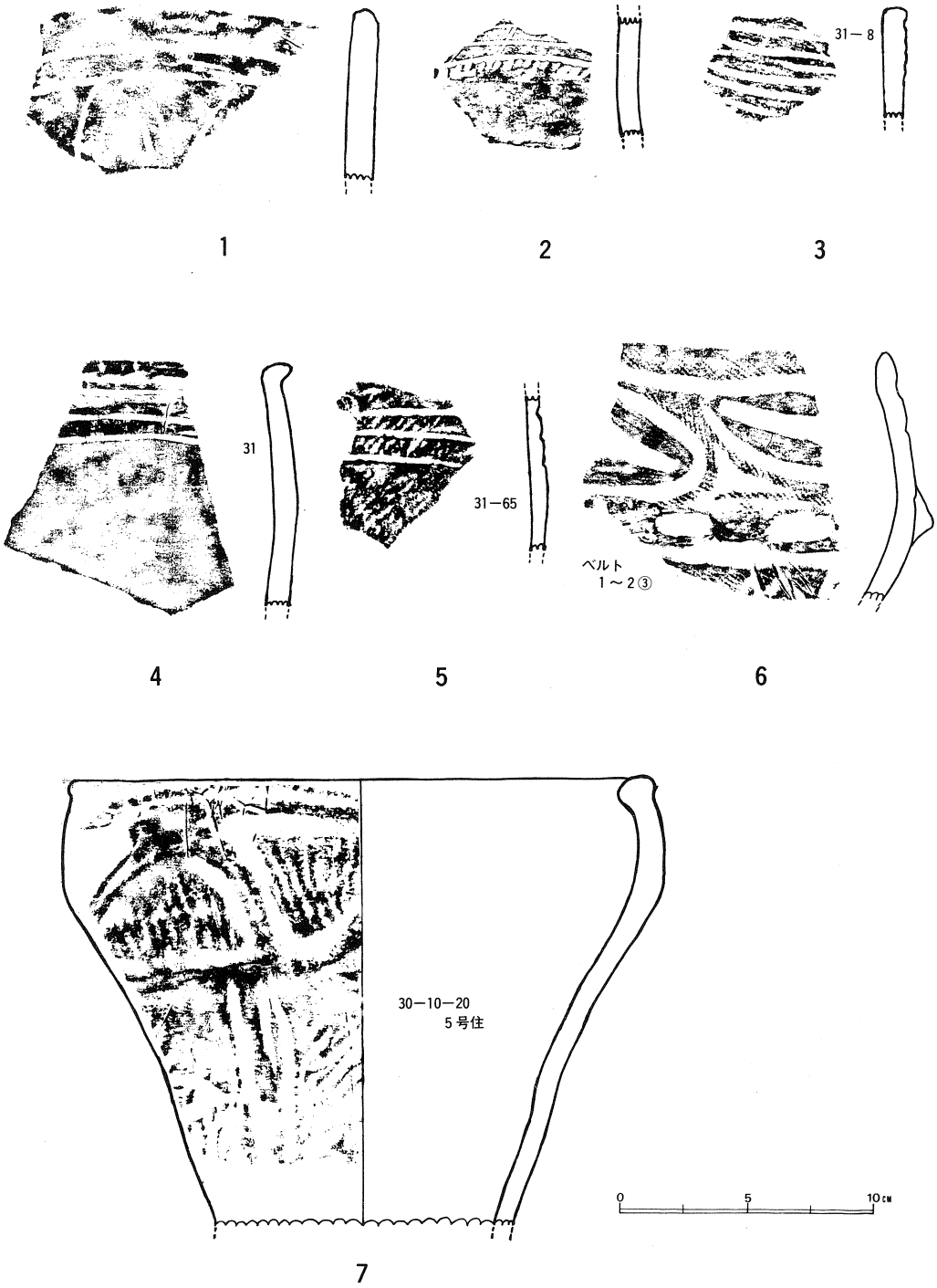
4

5

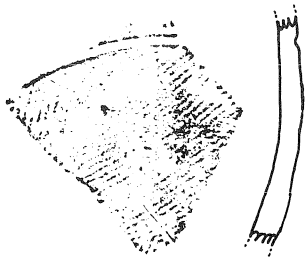
6



第38図　縄文式土器実測図及び拓影－５



第39図　縄文式土器拓影－6



30－89

1

31－30～40

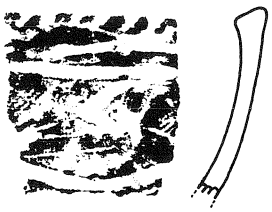
2

31－65

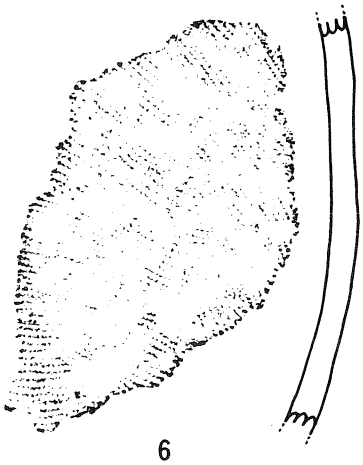
3

31－65

4



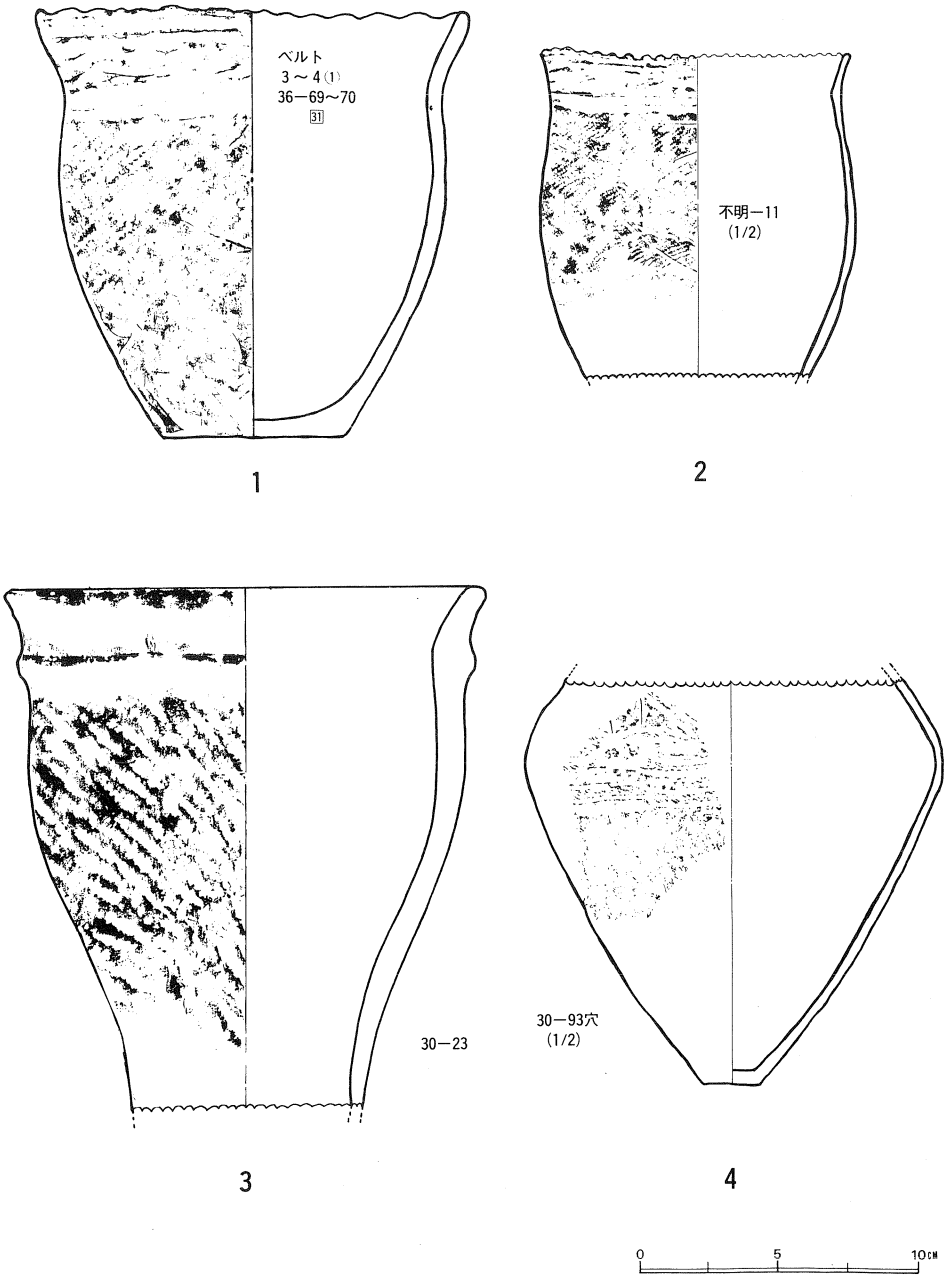
5



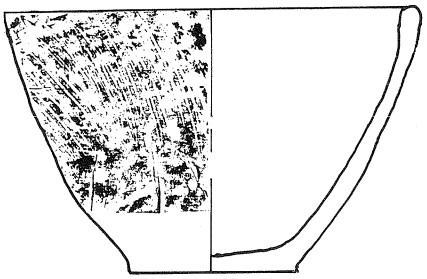
6

0　5　10cm

第40図　縄文式土器拓影－7

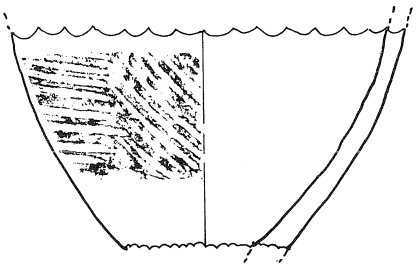


第41図　縄文式土器実測図－7



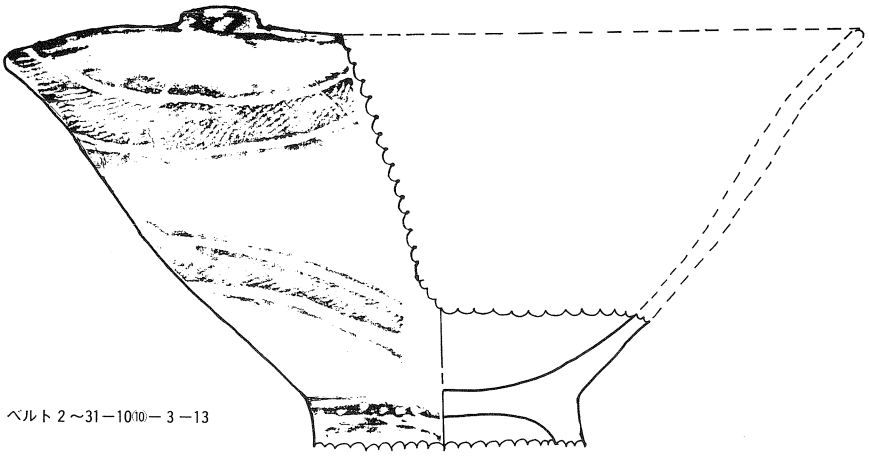
ベルト２～31－10⑩－２－８

1



ベルト３～31－68①

2



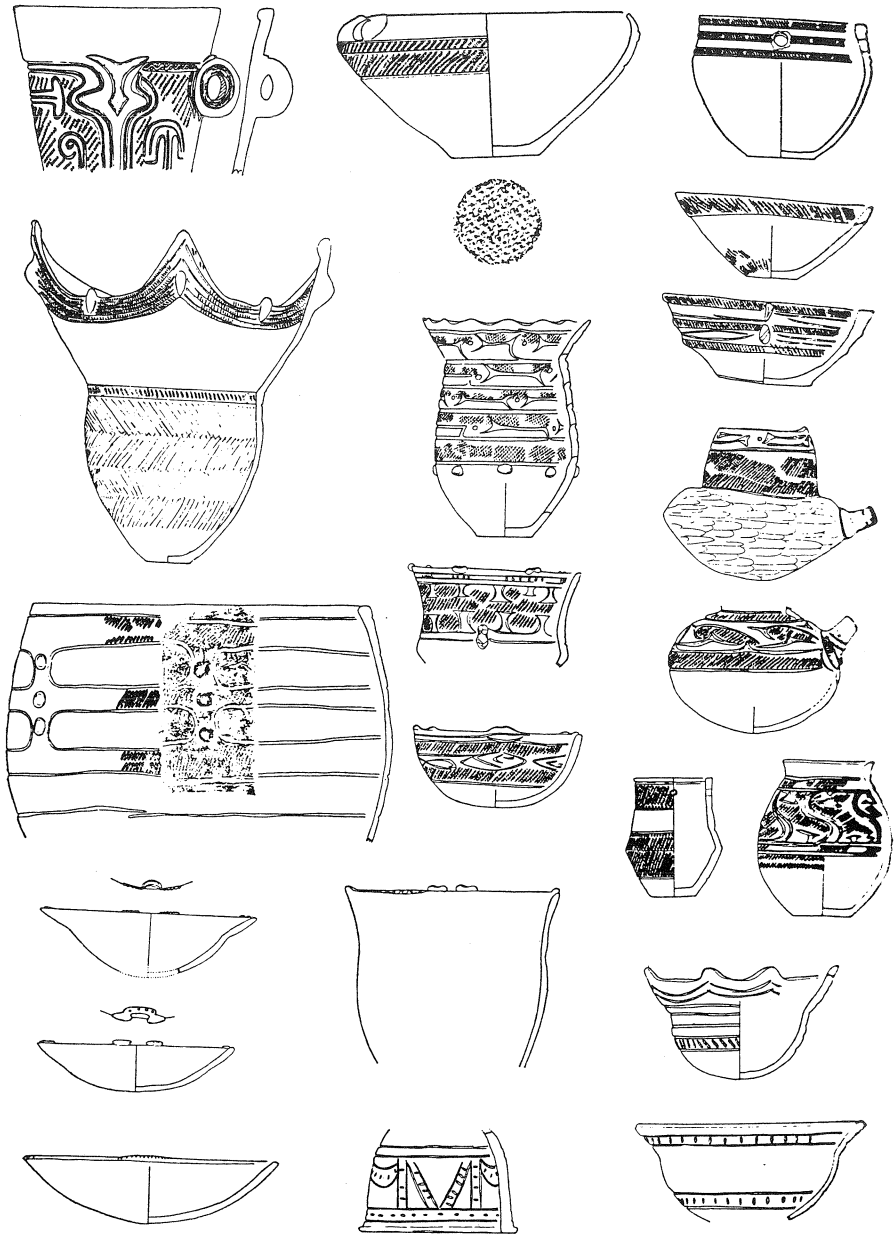
ベルト２～31－10⑩－３－13

ベルト２～31－10⑩－３－13

0 5 10CM

3

第42図　縄文式土器実測図－８



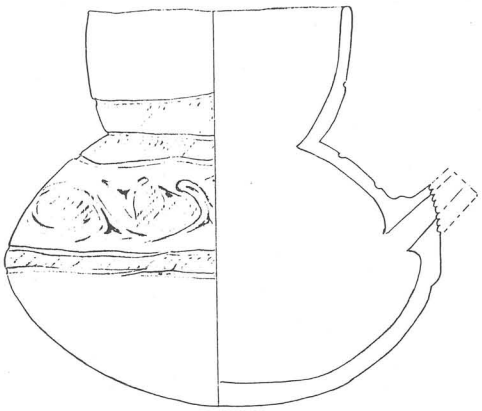
後・晩期縄文式土器（山王堂遺跡）縮尺不同

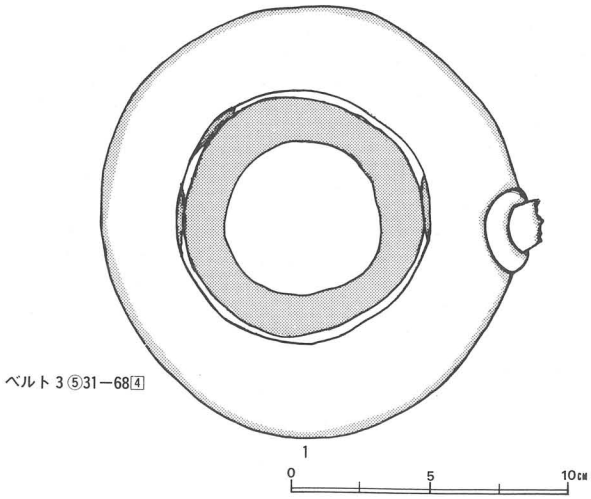
第43図　山王堂遺跡出土土器実測図（明野町史所収）

a　注口土器

いずれも杭番No.30の71から杭番No.31の61から90にかけてほぼ表土面から0.4メートル,中層から発見されている。

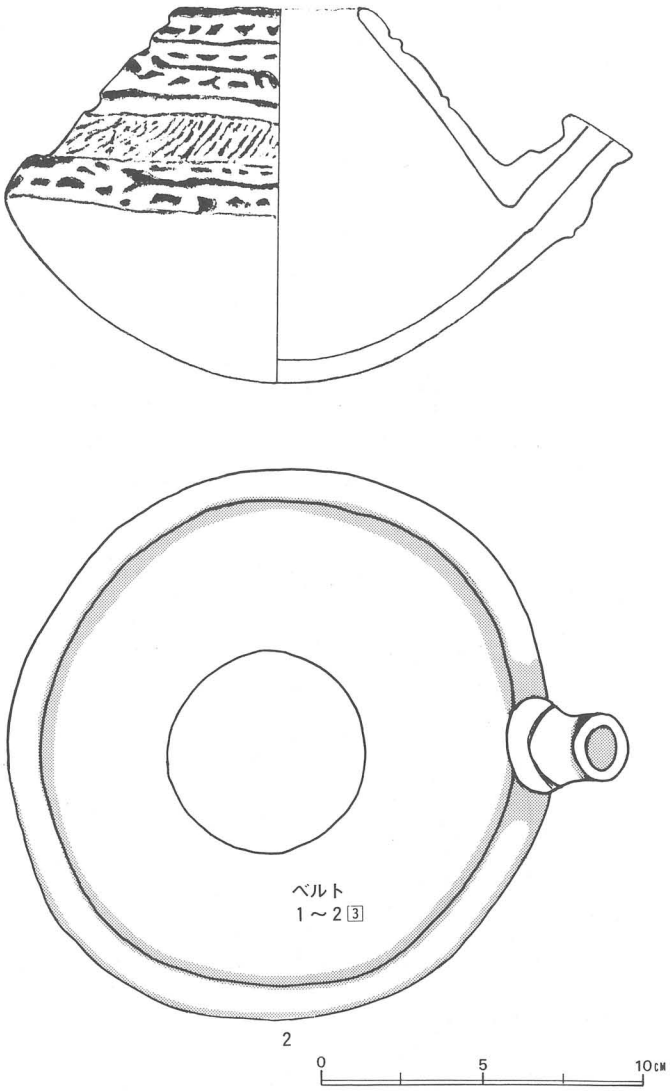
1は口縁部の径9.4センチメートル，高さ14センチメートル，口縁部から4.5センチメートルの付近でくびれ，胴部に連なっている。胴部の最大径15.5センチメートルで，底部は丸底である。注口部は胴部の最大径の上に付けられている。口縁部と胴部の接する直上に沈線を入れ，また胴部の最大径のところに2本の沈線を描き，その間に渦巻様の文様と地文に単斜行縄文を付している。口縁部の厚さは0.4センチメートルである。土器表面は篦修正の跡が見られる。暗褐色を呈する土器で焼きは良好である。注口の先端を欠いている。





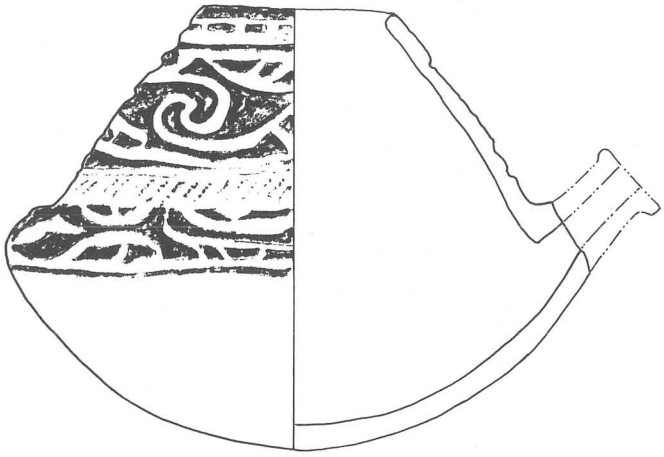
第44図　縄文式土器実測図−9

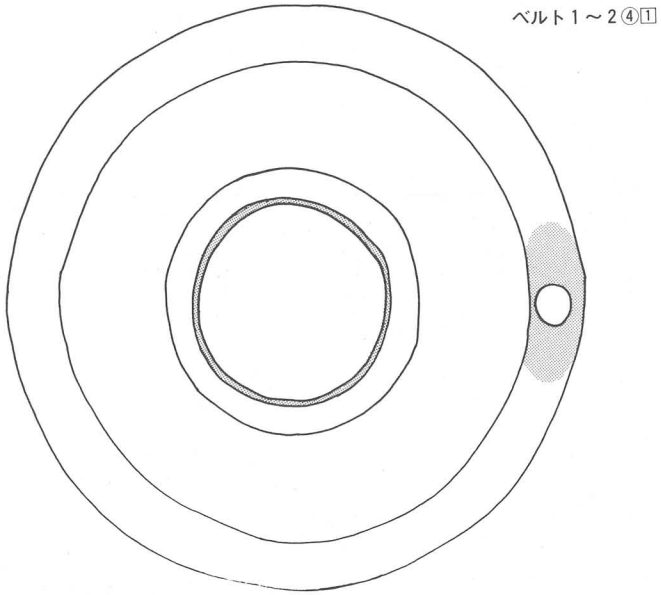
2は口縁部の径6センチメートル，胴部の最大径16.5センチメートルで，この付近は丸味を帯びて厚く，あたかも肉厚の碗の上に一まわり小さい碗をかぶせて整形したような作り方をしている。底は丸底である。口縁部から胴部にかけて全面に雲形文を付している。注口部は厚い。完形である。



第45図　縄文式土器実測図－10

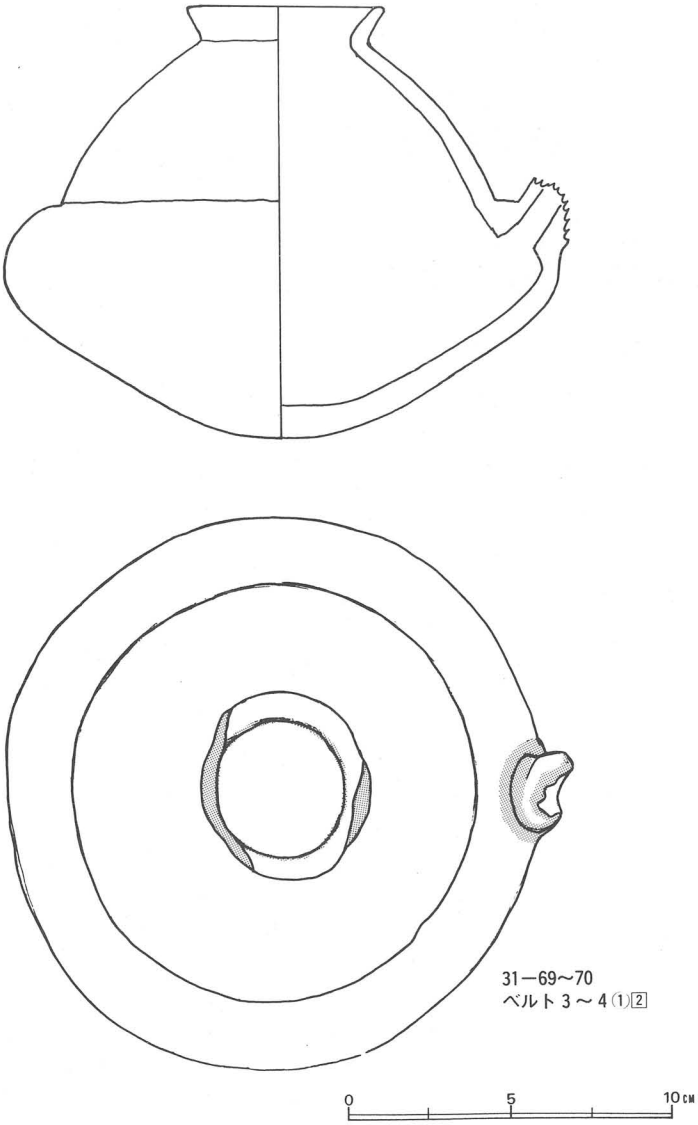
その３も２と同様の土器である。口縁部の径６センチメートル，高さ13.5センチメートル，胴部の最大径が18センチメートル，注口部の付け方は前者と同じであるが，注口部の口唇部は0.7センチメートルと肉厚である。丸底で完形である。文様は口縁部より胴部全面に渦巻文と縄文を配しているが，胴部から底部にかけては無文である。黒褐色を呈する焼のしまった土器である。前者に近く注穴状遺構内から出土している。





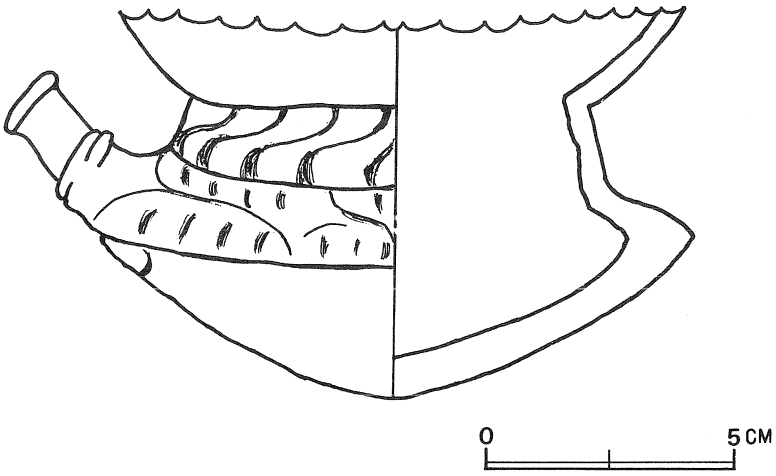
第46図　縄文式土器実測図－11

その4は無文の灰白色を呈する土器である。口縁部の直径6センチメートル，高さ13.2センチメートル，胴部の最大径17.0センチメートルである。この土器が前2個と異なる点は口縁部が外反していることである。生地は前二者と比べてあまい。注口の先端を欠く。



第47図　縄文式土器実測図－12

その5，口唇部を欠く注口土器である。残存部の径11.4センチメートル,高さ7.4センチメートル，口縁部から胴部にかけてつぼまり，再び胴部中腹まで徐々に広がり，胴部中央で拡がり最大径12センチメートルを示す。中央部から底部にかけてはかるく弧を描いて底につづいている。丸底ではなく，底の中心部は少し尖っていて安定は悪い。胴部上半に流水状の連続文を付している。

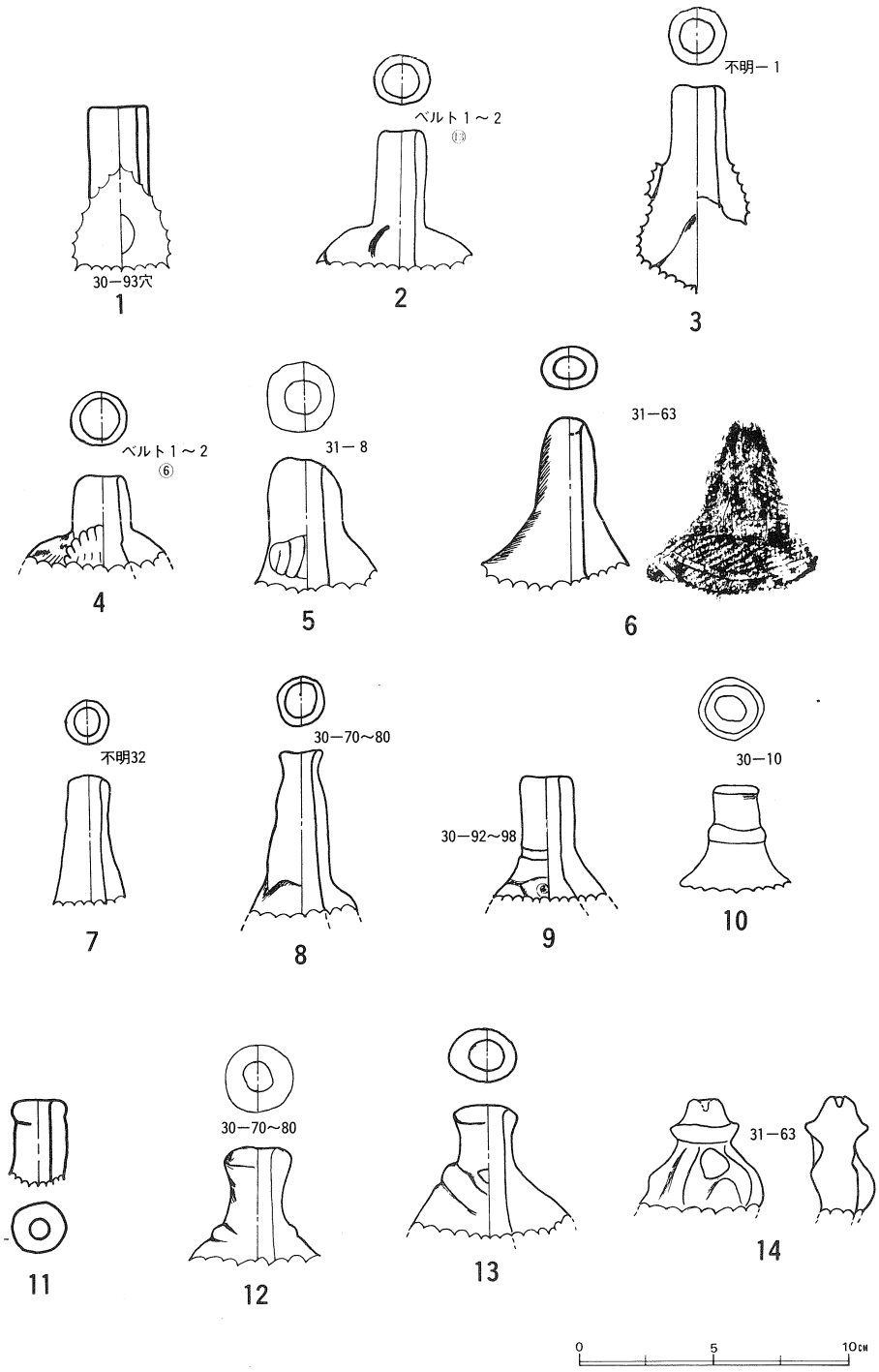


第48図　縄文式土器実測図－13

注口部の破片

以上の他，注口土器の注口部の破片のみが　個発見されている。

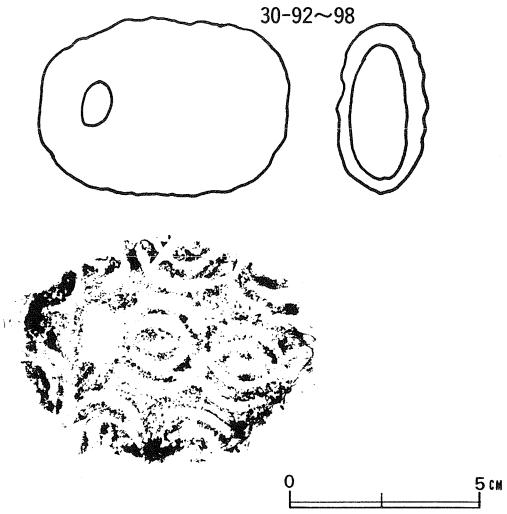
注口部の先端が平滑で円筒状を呈するもの（1，2，3，4），先端が若干細くなり丸味を帯びるもの（5，6），根元から先端にかけて長く細まっているもの（7，8），先端が平滑で根元に凹帯を付すもの（9），先端が複合状となり根本に凸帯をもつもの（10），先端付近にくびれをもつもの（11），先端にくびれを入れ根本に凸帯をまわすもの（12，13），注口先端に縦に割目を入れ，男根状を呈するもの（14）等，バラエティに富む注口部の破片である。



第49図　注口土器注口部実測図

b　異型土器（水差し状土器）

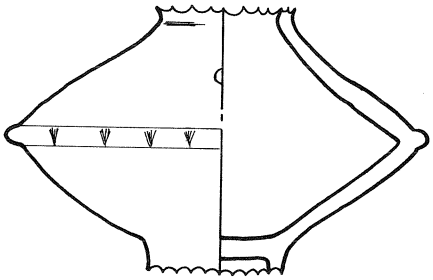
長径6.5センチメートル,平面が小判状を呈する土器で，最大幅4.5センチメートル,断面は楕円状をなし,中央部の厚さ2.2センチメートル，中空の土器で，先端から中央にかけて1.1センチメートルの地点に幅0.8センチメートル,長さ1.2センチメートルの楕円形の孔をあけている。土器の表面に長径2.5センチメートル，短径2.0センチメートル，幅0.3センチメートルの彫刻刀様刃物で，楕円形の二重の円を連続的に彫っている。水さしであろうか。暗鼠色を呈し，胎土に長石を混えている。唯一の出土品で他に発見例はない。



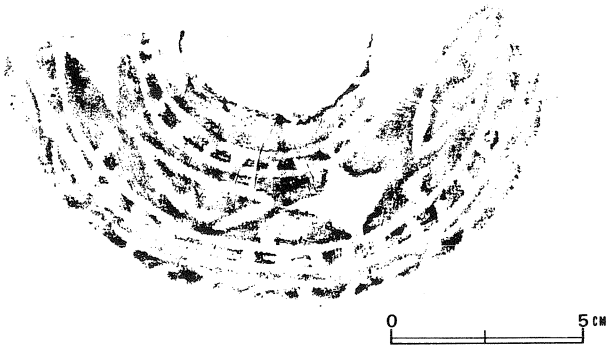
第50図　縄文式土器実測図－14

c　香炉状土器

香炉型土器としなかったのは，土器表面に香炉特有の煙出しの孔がないことと，合せ蓋でなく，全く単体構造であるからである。土器表面には雲形状文様が刻まれており，外見上からは香炉型土器そのものの形態をなしている。口縁部及び台部を欠損している。残存部の口径3.8センチメートル,高さ7.0センチートル，胴部の最大径11.2センチメートル，中央部に半円状の凸帯をめぐらしている。高台を付していたらしく,台部に0.4センチメートルの脚の残存部を残している。また,中央部の凸帯に1.1センチメートル間隔に二等辺三角形状の楔状の文様を付している。



ベルト２～31－10



第51図　縄文式土器－15

d　土　　偶

形状のわかるもの４例，胴部，手，足等の破片を含め15個発見されている。顔面のある頭部のあるものも１個出土しているが，その他は殆ど省略されているものが多い。形態的には山形土偶，みみずく形土偶，遮光形土偶などが見られる。形状のわかる土偶の胴部は殆ど中空（空胴）である。水戸市立博物館主催の昭和60年度特別展目録土偶にも明野町山王堂出土として３点が報告されているが，その１（目録No.183）は明らかに「みみずく型」土偶で，この型の土偶のあることを示している。

全身を沈線による渦文状文様と刺突文でうづめたもの，胸部を１本の沈線で二分し上下に楕円状の文様を５個連続に配したもの，胴部を２本の沈線で区画し，その内部に×印を付したものなどが認められる。頭部の破片は頭上に半円状の冠帽をかぶり，その冠帽の表面に沈線と連続刺突文を描いて装飾している。

東北系の影響がみられるが，殆ど南関東系のものと考えられ，後期の加曽利Ｂ式，晩期の安行ⅢＣ併行が見られ，また，大洞系のものもあるが数は少ない。

e　有孔土器円板

破片を含めて12個発見されている。完形品２，ほぼ完形に近いもの１がある。

１は直径8.2センチメートル，中央部の厚さ2.4センチメートル，中央に直径2.0センチメートルの孔をもつ他，孔の両側に直径２～３センチメートルの小孔を２個，計４個を穿っている。

その２は直径7.4センチメートルで，中央部に直径1.1センチメートルの孔を穿っている。また孔の両側に直径３～４センチメートルの小孔を各２個あけている。厚さは1.1センチメートルである。

その３は直径9.9センチメートル，中央部の孔の径2.2センチメートルであるが，小孔はない。厚さは2.5センチメートル，円板の先端は厚さ1.0センチメートルと薄くなっているが，その１もまた同様である。

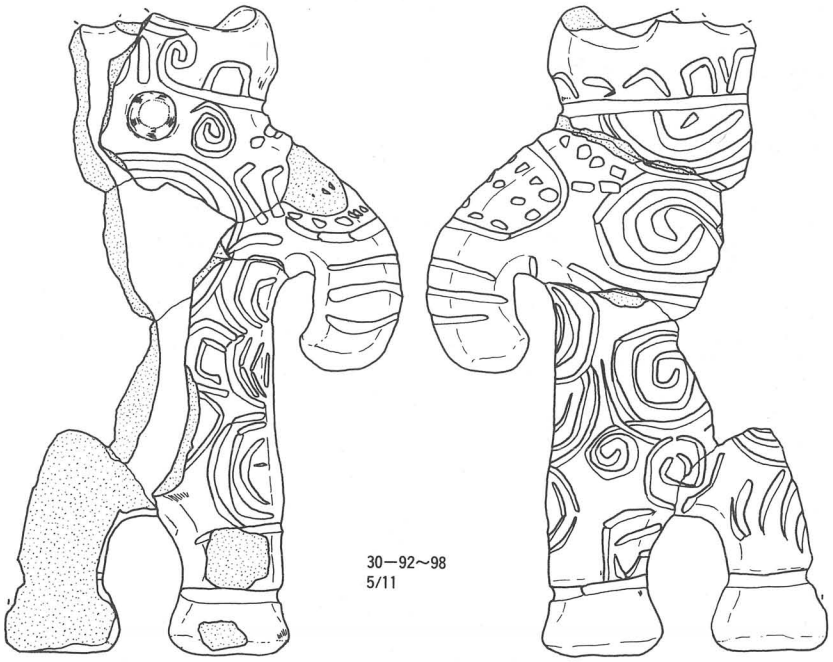
その他残片があるが，円板に小孔を有するものと無孔のものがある他，厚さも均一のものと先端が薄く，中央部が厚いものとが見られる。用途は明らかでない。

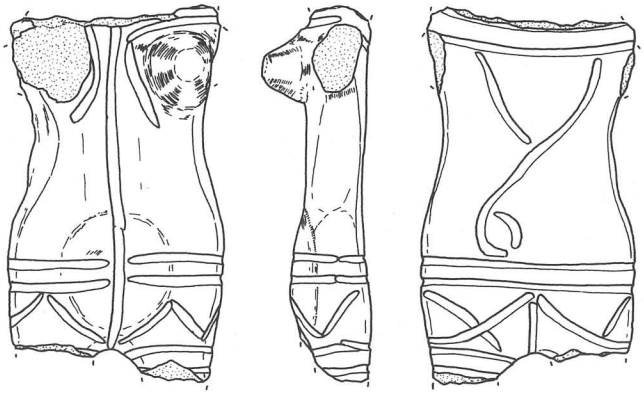
f　小型手づくね土器

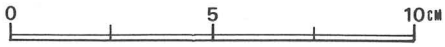
実用に用いられたと思われる小型の土器から祭器にでも供したと見られる土器等が発掘地域全域から発見されている。

１　実用に用いたと思われる小型土器

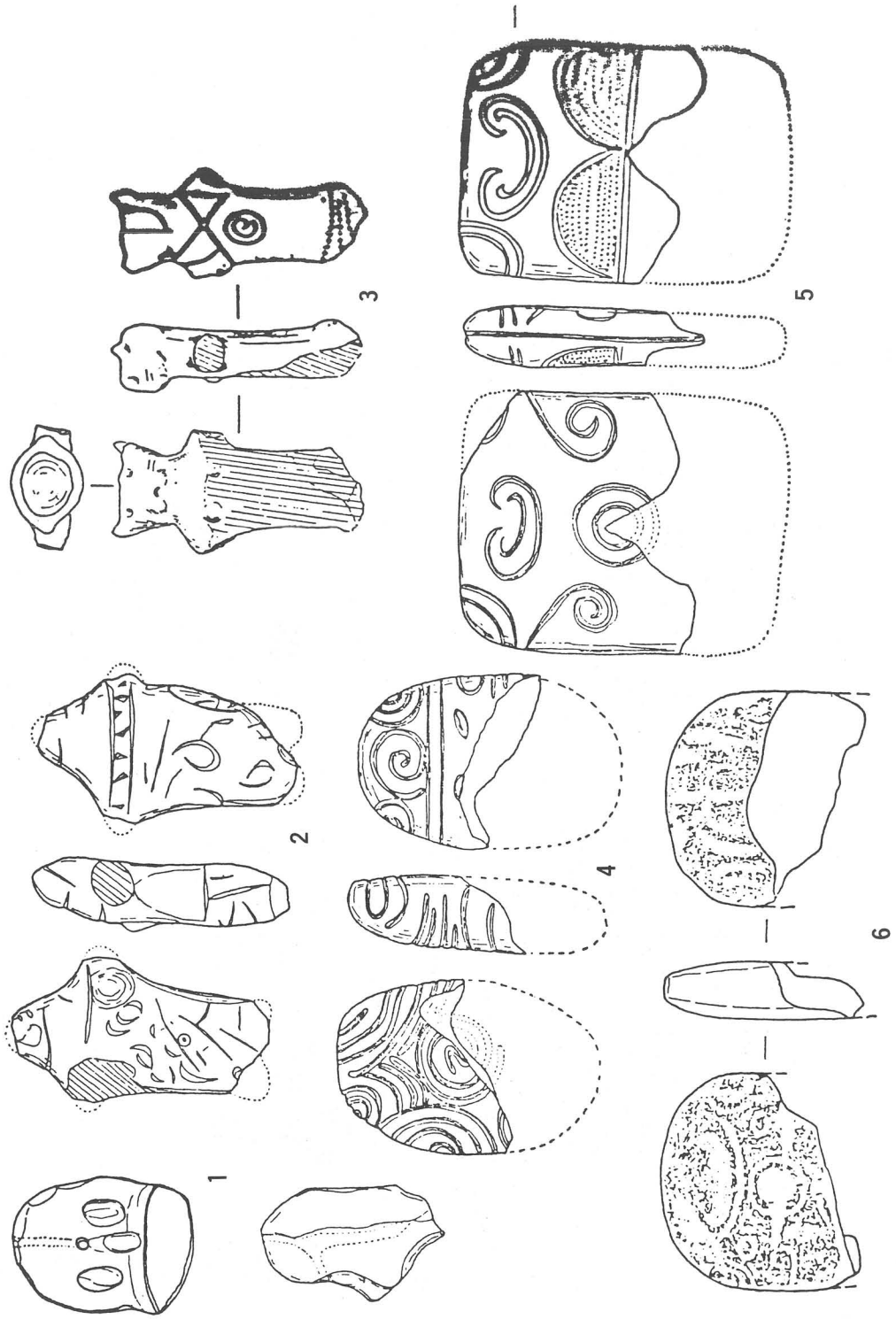
小型の壺形土器である。約半分が欠損しているが復元による口径は3.0センチメートル，高さ9.0センチメートル，頚部から口唇部にかけてやや外反する口縁部をもち，底部は上げ底である。赤褐色を呈する。底の径は3.2センチメートルで，粉末状の調味料や薬味を入れたもの



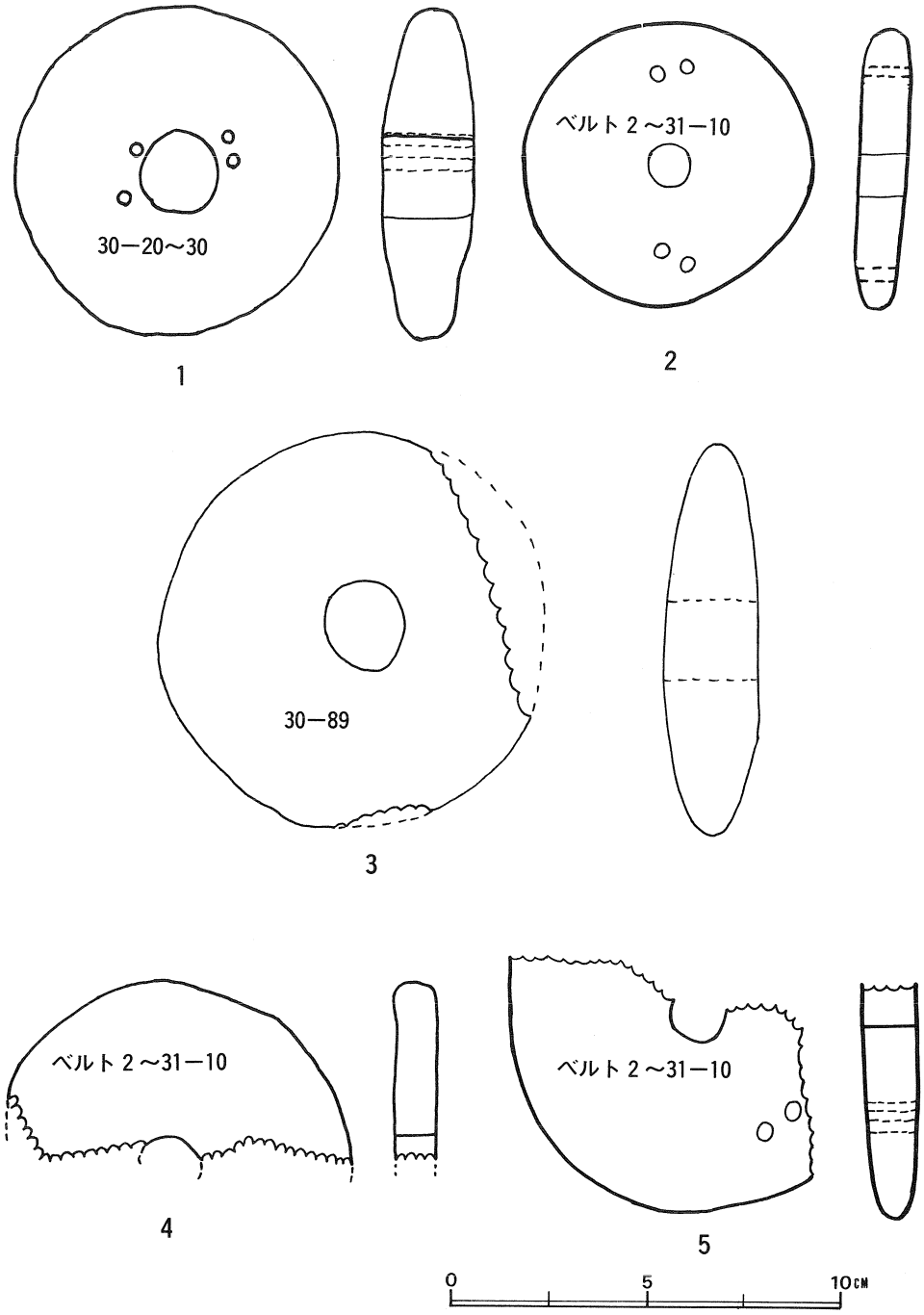




第52図　土偶実測図



第53図　土王堂遺跡出土土偶・土版実測図（明野町史所収）



第54図　有孔土器円板実測図

であろうか。

2　壺

1と同様の上器である。口唇部を欠いているが，残存部の径4.8センチメートル，高さ8.1センチメートル，底部の径2.2センチメートルで頚部から口縁部にかけて外反している。底は平底である。赤褐色を呈している。

3　小型注口土器

縦に半分を残している。口径3.4センチメートル，高さ5.2センチメートル，残された土器全面に単斜行縄文が施されている。口縁部の厚さは0.5センチメートルで,底は丸底である。暗褐色を呈する。

4　壺

口縁部の径4.8センチメートル，高さも4.8センチメートルで，下ぶくれの胴をもち，底は平底に近い丸底である。口唇部の一部を欠いている。口縁部の厚さは0.35センチメートル，頚部から口唇部にかけて外反している。幅着型を呈する暗褐色の土器である。

5　壺

口縁部の径5センチメートル，高さ5.3センチメートル,キャリバー型の土器で頚部から口唇部にかけて内湾している。頚部の最大径は5.8センチメートルである。色は暗褐色である。

6　台付坏

口径6センチメートル，高さ2.8センチメートル,底は高台を付するが外見は平底に見え，台は平底化した底部の外側にあり，底部と高台の間にはU字形の溝が掘られて区別されている。胴部は台を含めて3段の波状をなしている。

7　壺(5)

口縁部の径4.4センチメートル，高さ3.5センチメートル,底部の径3.8センチメートルの広口の坪である。赤褐色を呈する。

8　鉢(6)

口縁部の径3.6センチメートル，高さ3.2センチメートル，平底に近い丸底で，口縁部から口唇部にかけて内湾している。最大径6センチメートルで，口縁部から口唇部にかけて，相対して直径0.3センチメートルの小孔各2個ずつ穿ってある。紐でつるしたものだろうか。また，口縁部から口唇部にかけて，爪形連続文を半円状に菱形に配している。赤褐色を呈する。

9　鉢(7)

口縁部の径7.5センチメートル，高さ5.0センチメートル，平底で,底の径3.2センチメートル，最大径10.4センチメートルの付近で口唇部にかけて内湾している。最大径の外側は凸帯状をなし，粒状の突起を付している。口唇に相対して粒状の突起が認められる。

10　鉢(8)

口縁部の径3.4センチメートル，高さ２センチメートル，口縁部の厚さ0.3センチメートル黒褐色を呈する無文の土器で，丸底である。

11　鉢(9)

口縁部径3.8センチメートル，高さ2.3センチメートル,口縁部の厚さ0.4センチメートル，無文の土器で，色は黒褐色を呈する。

12　台 付 鉢(10)

口径5.4センチメートル，鉢の高さ2.1センチメートル,口縁部の厚さ0.5センチメートルで高台を付している。台の残存部の高さ0.4センチメートルである。色は褐色を呈している。

13　スタンプ状土器(11)

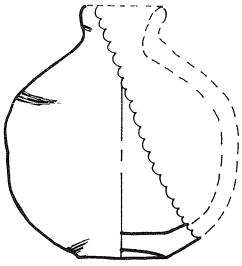
直径7.8センチメートル，厚さ0.9センチメートルの平板上に幅1.8センチメートル，厚さ1.0センチメートルの橋状把手を付している。はくしゅの高さは3.0センチメートルで,拍手と平板との間にアーチ状の孔をもっている。孔の高さ2.0センチメートル，底部の幅1.1センチメートル，アーチの最大幅は，1.2センチメートルである。明るい黄褐色の土器である。

14　蓋(12)

直径10センチメートル，蓋の厚さ0.8センチメートル，内側の深さ0.8センチメートルで，蓋の中央部に直径1.0センチメートルの紐状の把手を付している。把手と蓋の間に楕円状の孔があいている。孔の径1.8センチメートル，高さ1.0センチメートルである。

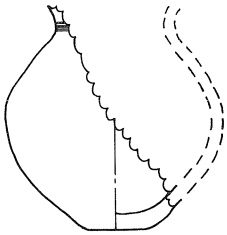
15　スプーン状土器(13)

スプーン直径7.0センチメートル，スプーンの最大幅5.0センチメートル,深さ2.1センチメートルの楕円状の器に長さ3.9センチメートル，直径1.2センチメートルの把手を付け，把手の先端から0.7センチメートルのところに直径0.2センチメートルの小孔を横にあけている。スプーンの厚さ0.35センチメートルである。明るい黄褐色を呈する土器である。



ベルト２～31－10⑩－１－６

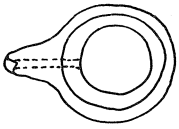
1



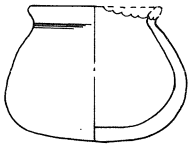
ベルト２～31－10⑩－２－３

2

31－20～30

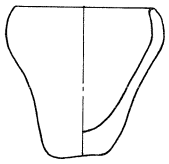


3



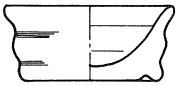
ベルト２～31－10⑩－２－４

中－72

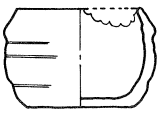


ベルト２～31－10⑩－２－４

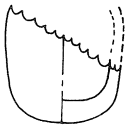
4



31－41～３22

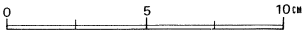


31－15～3027

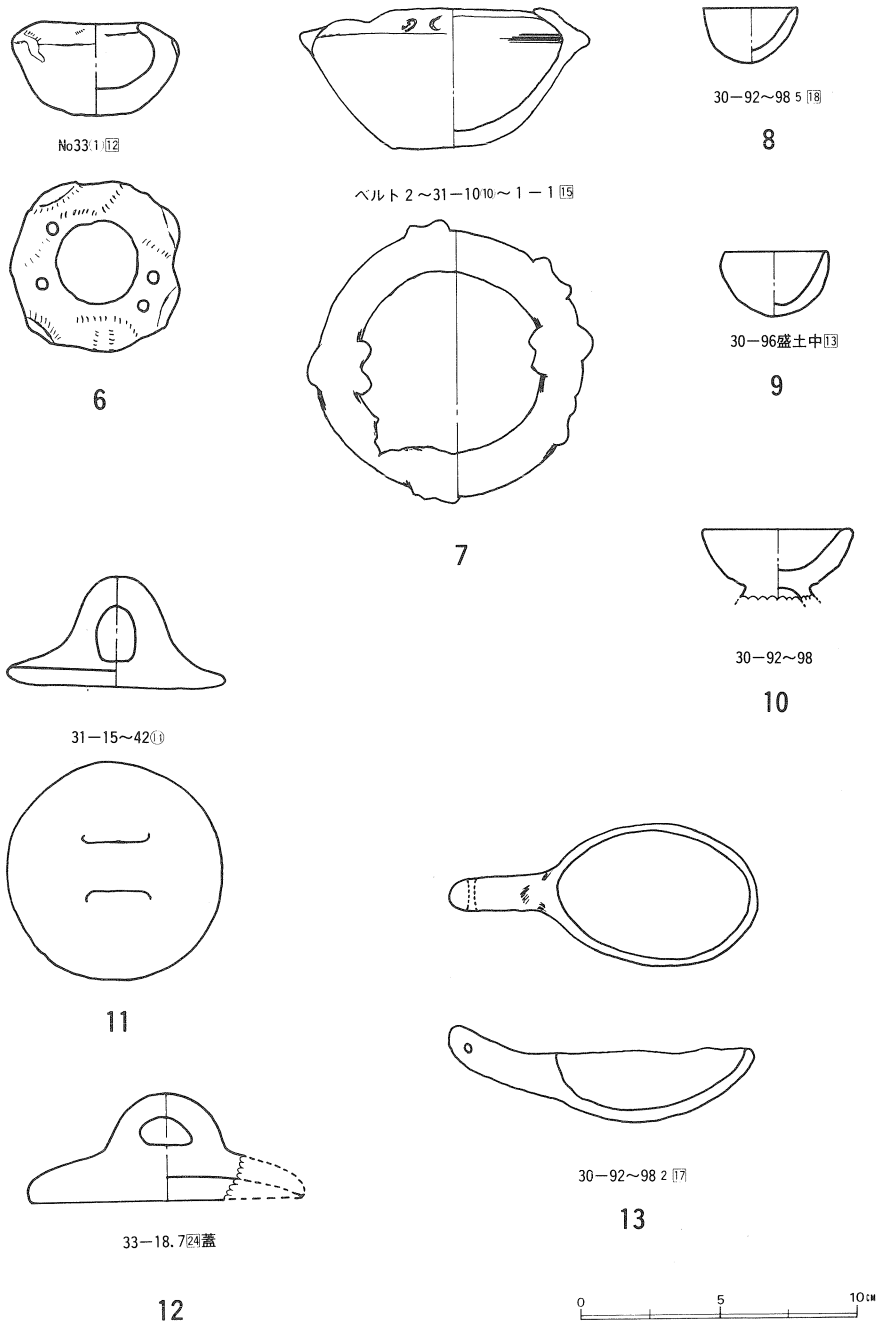


ベルト２～31－10⑩－１－６

5



第55図　小型手づくね土器実測図－１



第56図　小型手づくね土器実測図－2

(1) 縄文以外の時期の土器類

縄文以外の土器としては，縄文時代に続く弥生時代の弥生式土器，古墳時代・歴史時代の土器器，須恵器，中世土器等があるが，弥生式土器については，晩期末の前浦式土器，大洞A等が発見されているにも拘らず一片も発見されていない。今後更に詳細に検討する必要があるだろう。西方の倉持遺跡からは弥生式土器が報告されている。

古墳時代以降の土器については次のようである。

a 土 師 器

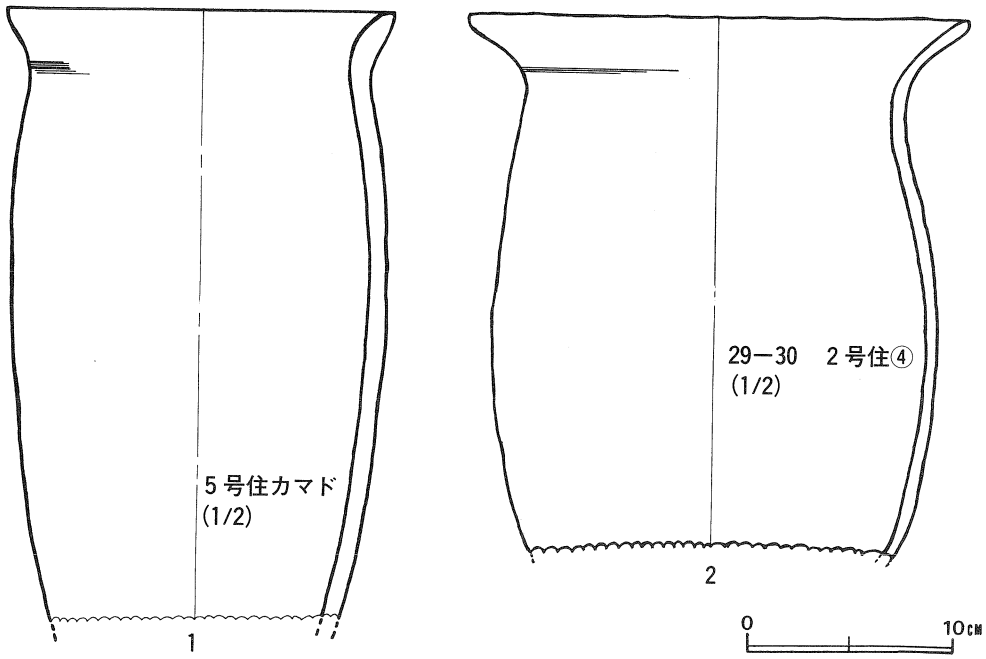
甕，壺，高坏，坏，皿，碗等が発見されたが，復元可能なものは高坏を除いてない。発掘した遺構の東・西両端に発見され，中央部分からは出土していない。

甕

完全なものはない。底部を欠損している。

その1，口縁径18.8センチメートル，高さ29.6センチメートル，口唇部で外反している。口縁部の厚さ1.0センチメートル，無文である。明るい赤褐色を呈する土器である。第5号住居跡，竈付近から出土したものである。

その2は口縁径24.2センチメートル，高さ25.2センチメートル，胴部下部から呈部を欠く。口縁部の厚さ0.6センチメートルである。



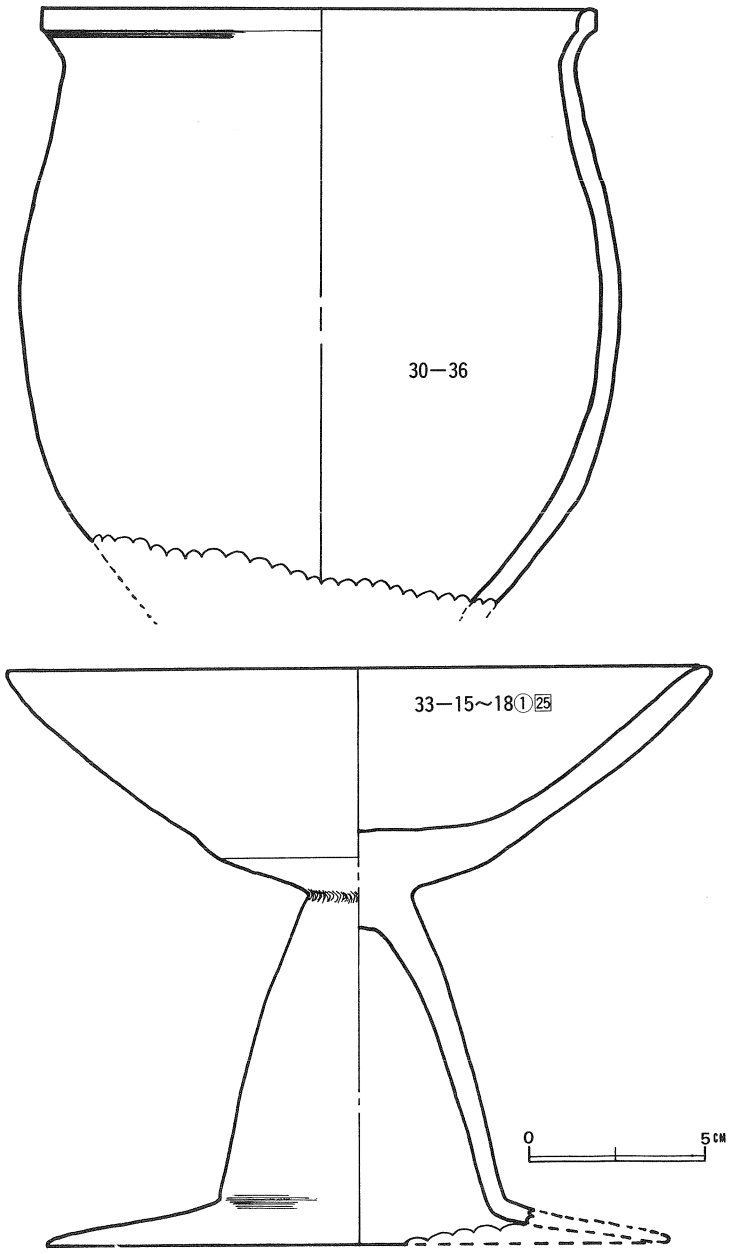
第57図 土師器実測図−1

壺型土器

口縁部の径15.8センチメートル，残存部の高さ16.8センチメートル，口唇部は垂直に立上っている。口縁部の厚さは0.5センチメートル,胴部の厚さ0.6センチメートル，胴部の最大径は17.0センチメートルである。明るい赤褐色の土器である。

高　坏

トレンチ最西端から発見されたものである。口縁部径20センチメートル,口縁部の厚さ0.9センチメートル，全高16.2センチメートル，台径17.6センチメートルである。和泉期に相当するものと思われる。また脚部の破片も付近から出土している。高さ9センチメートル，皿部付近で径3.1センチメートル，底部付根で5.1センチメートルである。



第58図　土師器実測図－2

なお坏・碗類は小破片であるので省略した。高坏を除いて他は殆ど計測できない。

b　須恵器

復元出来た須恵器は坏2，蓋坏2，台付坏2の計6個である。

坏

その１は口径13.6センチメートル，高さ4.4センチメートル，底部の径7.6センチメートル，口縁部の厚さ0.45センチメートルで，壁面に轆轤底をもつ。胎土に長石を含む焼きしまった土器である。

その２は口径14.0センチメートル，高さ5.1センチメートル，底の径8.6センチメートル，口縁部の厚さ0.48センチメートルで壁面に轆轤痕をもつ。鼠色（ネズミ）を呈する。焼は良い。

蓋　坏

その１は口径14センチメートル，高さ2.3センチメートル，口縁部の厚さ0.45センチメートル。鈕はない。形状は皿と変りはない。

その２は口縁径17.4センチメートル，高さ4.1センチメートル，中央部に宝珠形の鈕をつけている。鈕の最大径1.4センチメートル，高さ1.3センチメートルで明るい鼠色を呈している。

台付坏

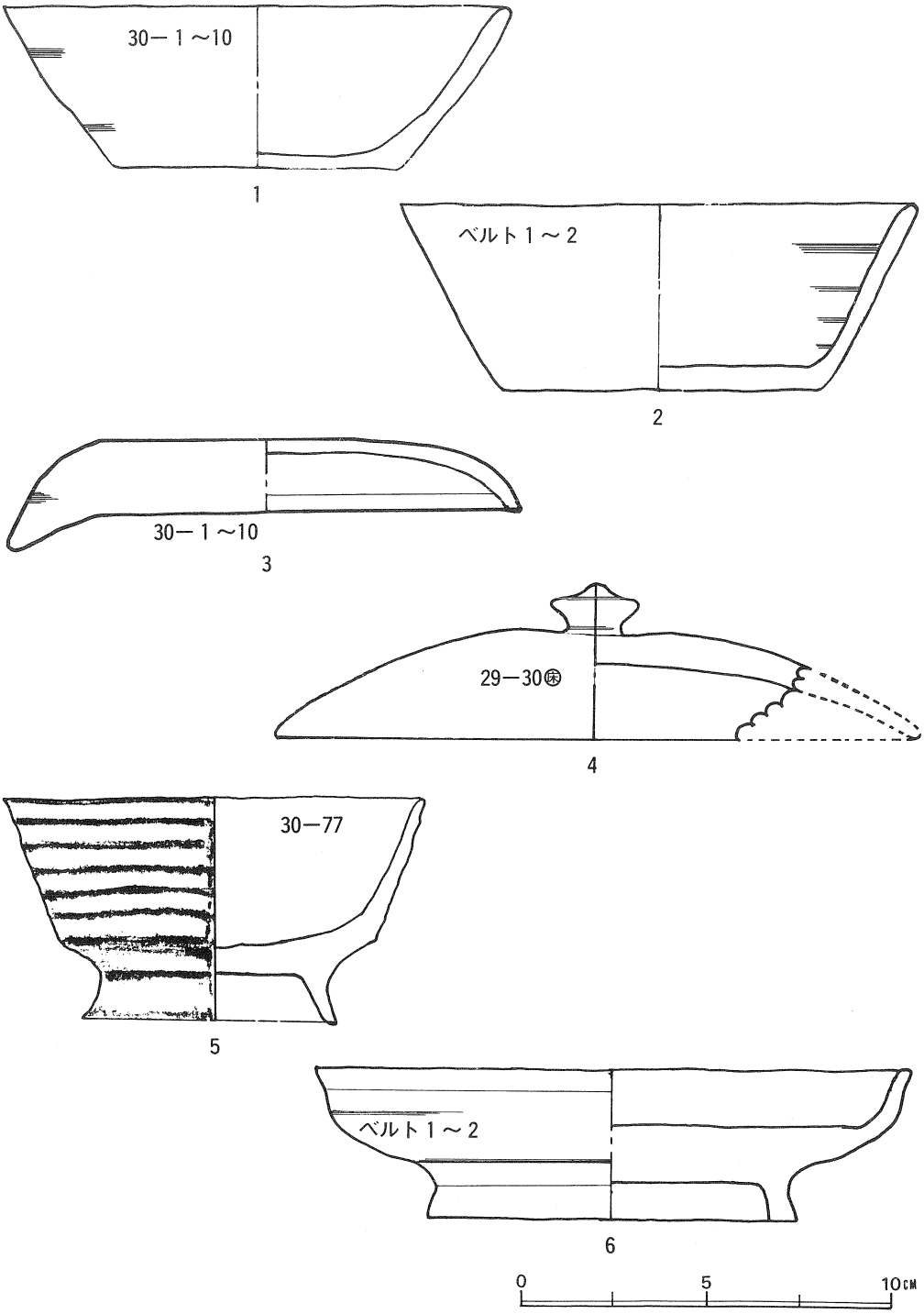
その１は口縁部の径11.4センチメートル，高さ5.9センチメートル，高台の高さ1.3センチメートルで，表面に５段の轆轤痕がみとめられる。焼きの良い濃い鼠色を呈している。

その２は皿形に台を付した土器で，口縁部の径16.0センチメートル，高さ4.0センチメートル，台の高さ0.8センチメートル，焼きの良い台付坏である。明るい鼠色を呈する。

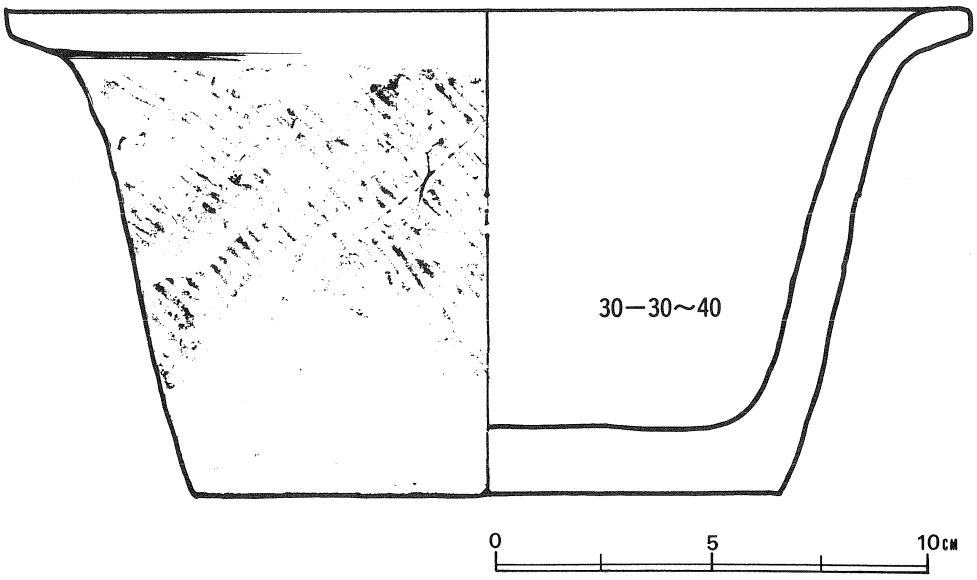
(3)　中世土器

復元出来た中世土器は１個で，全遺跡唯一の出土物である。

口縁部の径22センチメートル，鼠色を呈する土器で，口縁部は胴部付近から外反している。高さ11.5センチメートル，底部の径14センチメートルで，胴部表面に左上方から左下方へかけ単斜行のたたき文を付している。土器しとては小型の土器である。



第59図　須恵器等実測図



第60図　中世土器実測図

第３章　第二次調査

第一次調査中，県道筑波・下館線寄りに土器の散布すること，県道の東側，水田までの間にも土器が発見されるという作業協力員や地主の話もあって，調査の合間に踏査した結果，その事実を確認した。

即ち，従来山王堂遺跡の指定外と考えていた区域も同遺跡の一部であることがわかったのである。

このようなことから急拠会議を持ち，検討してもらった結果，引続き調査を実施することになった。

第二次調査の範囲は，第一次調査の東端，公団の基準杭No.29＋84から東側,県道を越えて水田までの区間，幅8.0～10.0メートル，長さ261.5メートルである。総面積2,177平方メートルである。

この区間は，従来山王堂遺跡の範囲外ということで，既に工事中であったが，工事も始めたばかりで，表土層を剝いだ段階であったため，工事を一時中断していただき，発掘調査したものである。

発掘は県道の東側は66.5メートル，県道の西側，第一次調査の起点と間195メートルである。

工事のため既に表土層が削られていたため，中層から地山までを発掘した。

第１節　発掘調査

調査は全地域を４区に別けて実施した。

調査区域は，県道より東側から水田までの区間を第３区として，長さ66.5メートル，面積にして604.00平方メートル。

県道から西側を３区に分け，県道に隣接する区を第１区とし，長さ83メートル，面積710.11平方メートル。

第２区は第１区の西側で，長さ102.9メートル，面積792.2平方メートル。

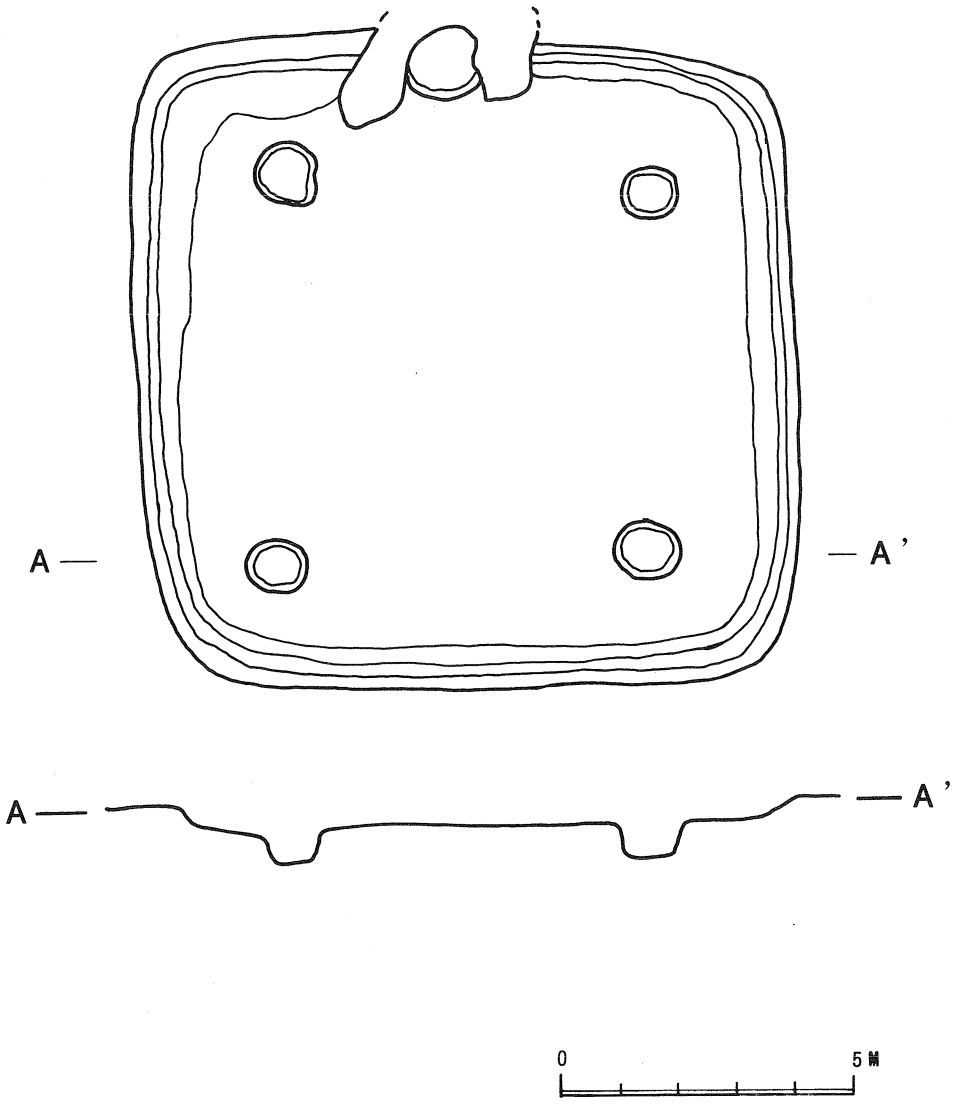
第４区は第２区の西側で，第一次調査区との間，9.1メートル,面積にして70.8平方メートルである。第３区，即ち県道の東側は，県道の両側に基点をおいて，この基点をもとに東へ40.1メートルの地点から第３区が始まっている。全長261.5メートル，総面積2.177平方メートルである。

第二次調査の平面図（挿図第４図）をみれば，発見された遺溝は溝が４，住居跡が４，土壙が13，柱穴状遺溝が10である。

ここでは第９号住居跡だけを取上げておきたい。

1　第９号住居跡

この住居跡は東南－北西を向く，一辺が6.3メートルの正方形に近い住居跡で，調査区域内には，西北－東南を向く住居跡で，東南隅の一部をトレンチ内に小部分が発見され，大半は区域外にある。溝は３箇所あり，この他，第２区内より溝２，住居跡が３基ある。



第61図　第９号住居跡実測図

2　溝

第一トレンチの西南近くにある溝をはじめ計４期あるが特筆すべき遺溝が1つある。深さは0.6メートルである。

第2区に見られる溝について，第一次調査の起点から17メートル東寄りに発見された。幅1.0メートルの溝が八の字状に42メートルの地点にまわり，その内部に4.5メートル（起点から21.5メートルから6.5メートルの地点に延びているこの内側の溝のカーブの部分に4.5メートル平方の遺溝と土壙６が見られる。遺物は特に発見されていない。）

第二字調査区域内における遺物は縄文式土器より土師式土器が多く発見されているが，特筆すべきものはなかった。

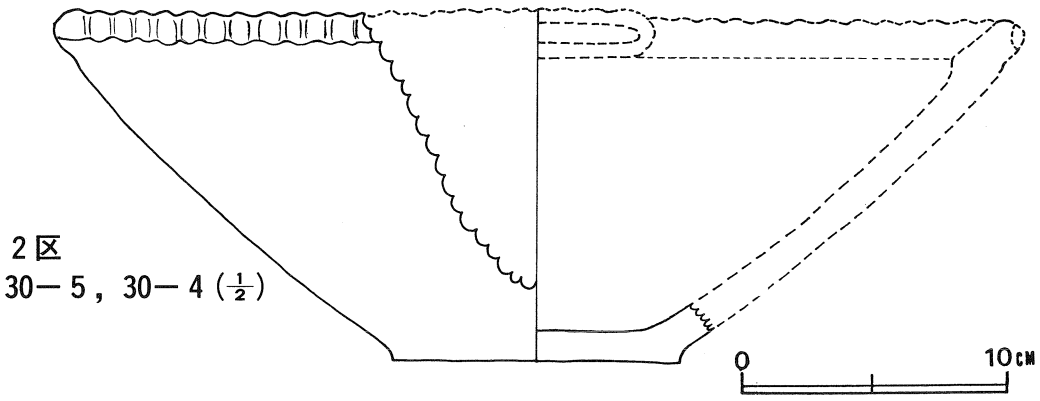
第２節　出土遺物

第二次調査では縄文式土器よりは土師器及び須恵器類が多く発見されていることは前に述べたとおりである。形のわかるものをあげると，縄文式土器では浅鉢型の土器がある。

1　縄文式土器

縄文後期の土器と思われる。

口縁部の径36.8センチメートル，高さ13.2センチメートル，底部の径10.8センチメートル，口縁部の厚さ1.2センチメートルで，口唇部に0.6センチメートルの連続刻み目丈を付し，中間に8.8センチメートル，幅1.8センチメートルの楕円状の丈を付している。暗褐色を呈する土器である。



第62図　縄文式土器実測図

2　土 師 器

壺3がある。いづれも胴部から下を欠いている。1は口縁部の径20.4センチメートル，高さ19.2センチメートル，頚部から口縁部にかけて外反し，口唇部で立上り更に外反する。口縁部の厚さは0.6センチメートルである。赤褐色を呈する土器である。高さ25センチメートルの土器であろう。

2は口縁部の径16.4センチメートル，高さ24センチメートルを残し，1と同様胴部から底部にかけて欠損しているが，推定される高さは32.5センチメートル前後と思われる。細型の壺である。明るい黄褐色を呈する土器である。口縁部の厚さは0.6センチメートル,頚部から口縁部にかけて外反している。

3は2と同様の器型の土器である。口縁部の径16.6センチメートル，残存部の高さ11.8センチメートル，胴部以下を欠いているが，この土器も2と同様高さ33センチメートル前後の土器であろうと思われる。

3　須 恵 器

坏

1は約3分の2を残している。復元口径14センチメートル，高さ3.8センチメートル,平底の径8.2センチメートル，口縁部の厚さ0.4センチメートルである。焼きの良い坏である。鼠色を呈する。

2はほぼ半分が残っている。復元口径13.2センチメートル，高さ3.5センチメートル,平底の径8.0センチメートルで口縁部の厚さを0.35センチメートル，底部の厚さ0.6センチメートルである。

3は口径13.8センチメートル，高さ3.4センチメートル，平底の径9.8センチメートル，胴部から口縁部にかけて外反している。口縁部の厚さ0.4センチメートル，底部の厚さ0.6センチメートルである。明るい灰鼠色を呈するが焼きはあまい。

4は口縁部を欠くため，大きさは詳かでないが上記の坏から推定するとき，口縁部の径14.4センチメートル，平底の径8.6センチメートル，残存部の高さ4.4センチメートルである。

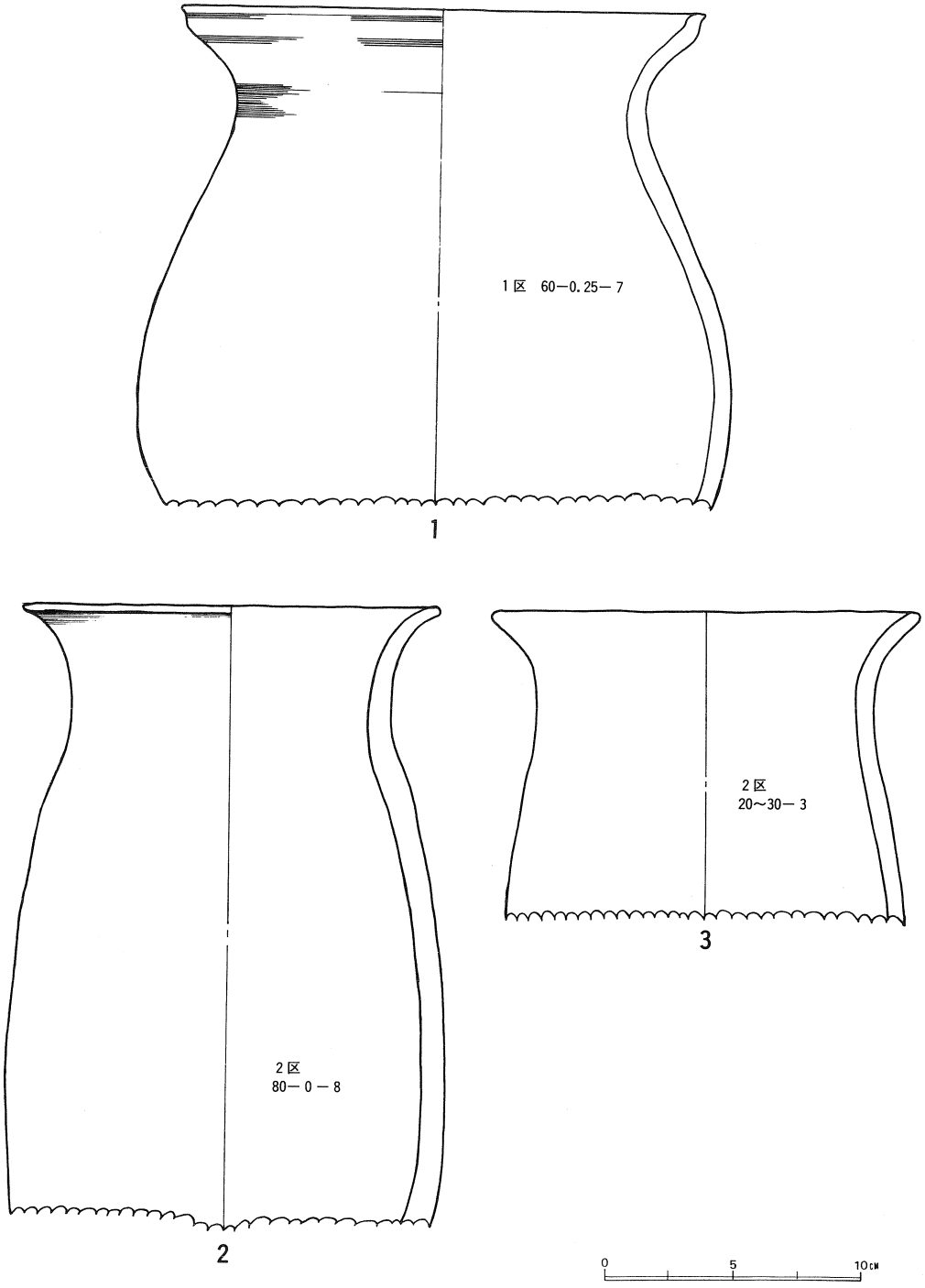
いづれも胎土に長石を含み，轆轤痕を残している。

蓋　坏

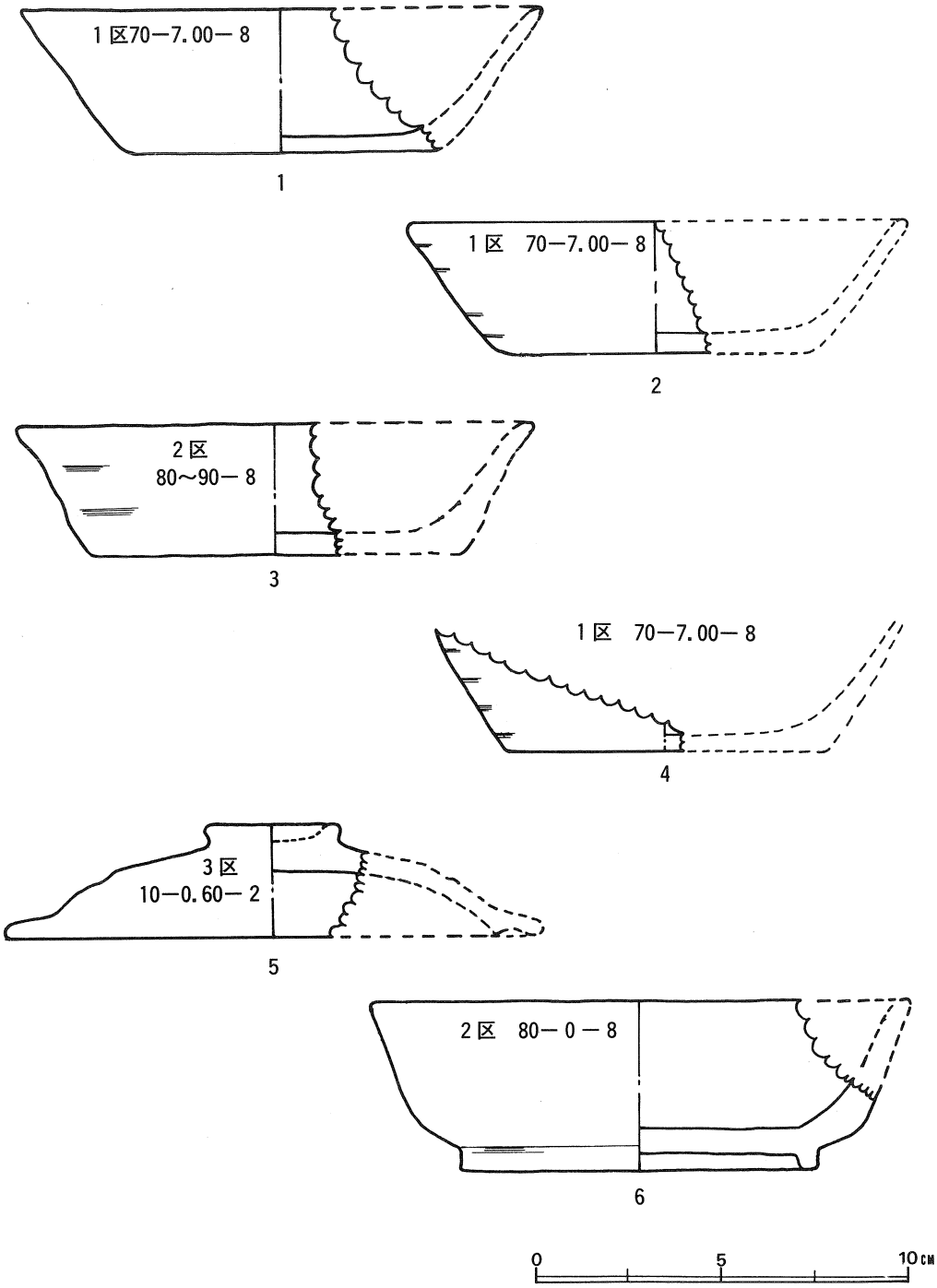
口径14.6センチメートル，高さ3.0センチメートル，口縁部の厚さ0.5センチメートルで平たい鈕をつけている。

台 付 坏

口縁部の一部を欠損している。口径14.4センチメートル，高さ4.5センチメートル，台部の径9.6センチメートル，高さ0.6センチメートルである。口縁部の厚み0.6センチメートルで鼠色を呈する。



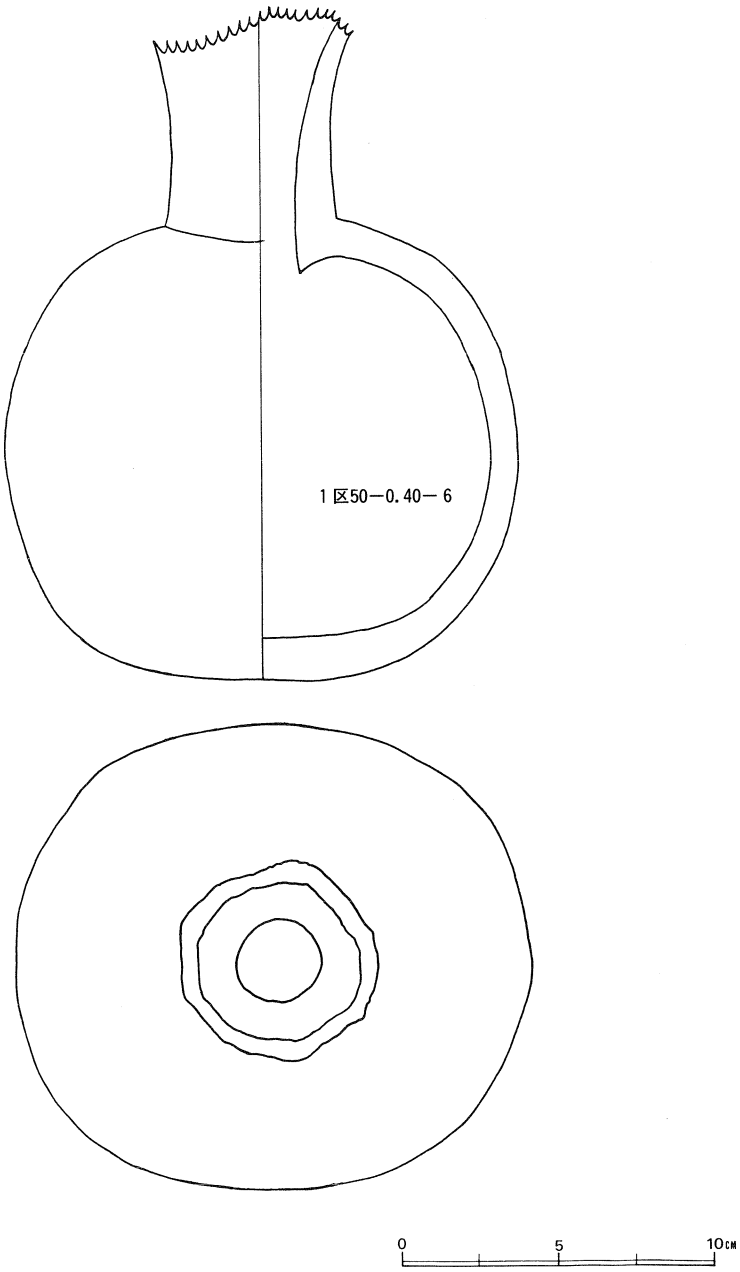
第63図　土師器実測図



第64図　須恵器実測図−1

横　瓶

1個発見されている。口縁部を欠くため高さは詳かでないが，残存部の高さ21センチメートル横瓶の径12センチメートル，中央部に向ってややふくらみ，中央で14.7センチメートル，胴の長さは16.4センチメートル，頚部の径5.3センチメートルで，横瓶としては小型のものである。



第65図　須恵器実測図－2

第4章　結　　語

平成3年の1月，厳寒の季節に調査をはじめ，7月中旬まで実に7ケ月に亘る発掘調査であったが，この山王堂遺跡については既に概報でも述べたように，文化財保護上からも，学術的にも極めて重要な遺跡であることを改めて感じた。

特に出土土器が極めて豊富で,発掘総面積4,619平方メートルに対して発見した土器の総数は23万個に及んだことと，発見した遺物から縄文時代中期から平安時代までの祖先の生活を追想させてくれる。この地が筑波山の西麓下にあって南関東系と東北系の文化の交流が晩期の時期を中心に進行したことがよくわかるのである。後期には東北系の土器が見られないのに対して晩期には急速な変化が見られるといってよい。

今後，発掘した土器をさらに研究して結論づけを行ないたい。

最後に種々ご面倒をかけ通しであった明野町教育委員会教育長をはじめ担当された方々，町文化財審議会会員の方々，水資源開発公団の方々，茨城県立歴史館の高根信和氏，瓦吹堅氏，茨城県教育庁文化財係長，茨城県県西教育事務所の担当者，地元作業協力者の方々に対し心からお礼を申し上げたい。

写　真　図　版

図版第一　発掘全景（右第一次・左第二次調査地域）

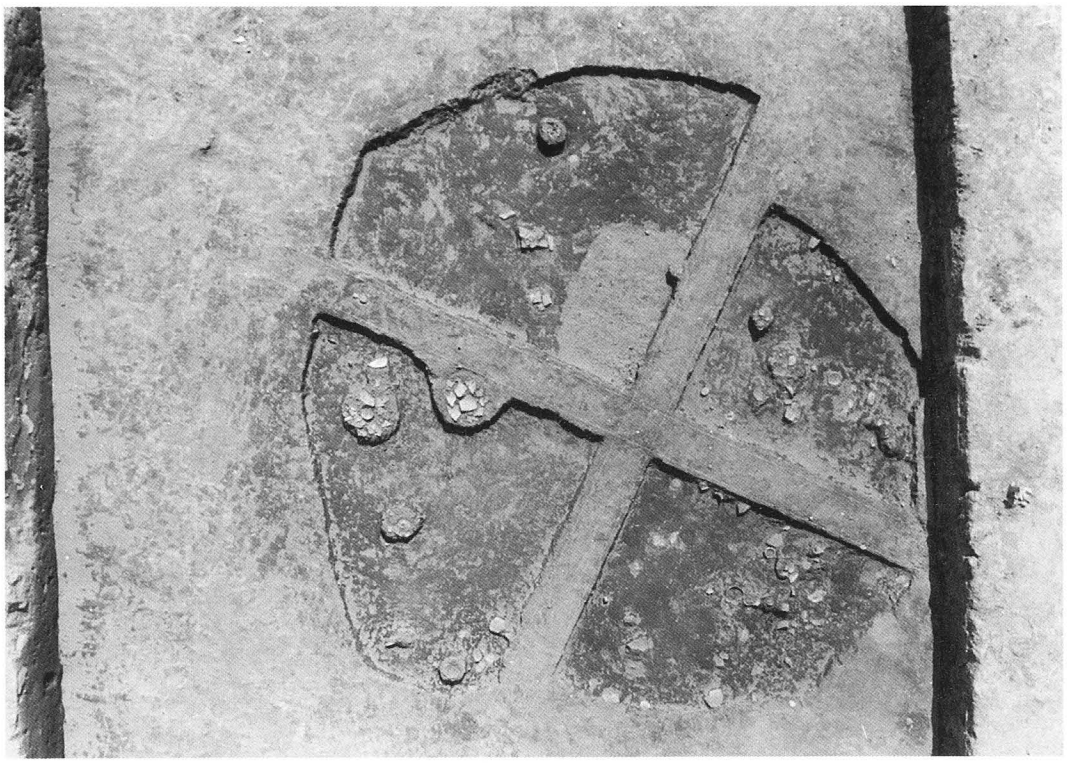
図版第二　発掘状況—一

図版第三　発掘状況―二

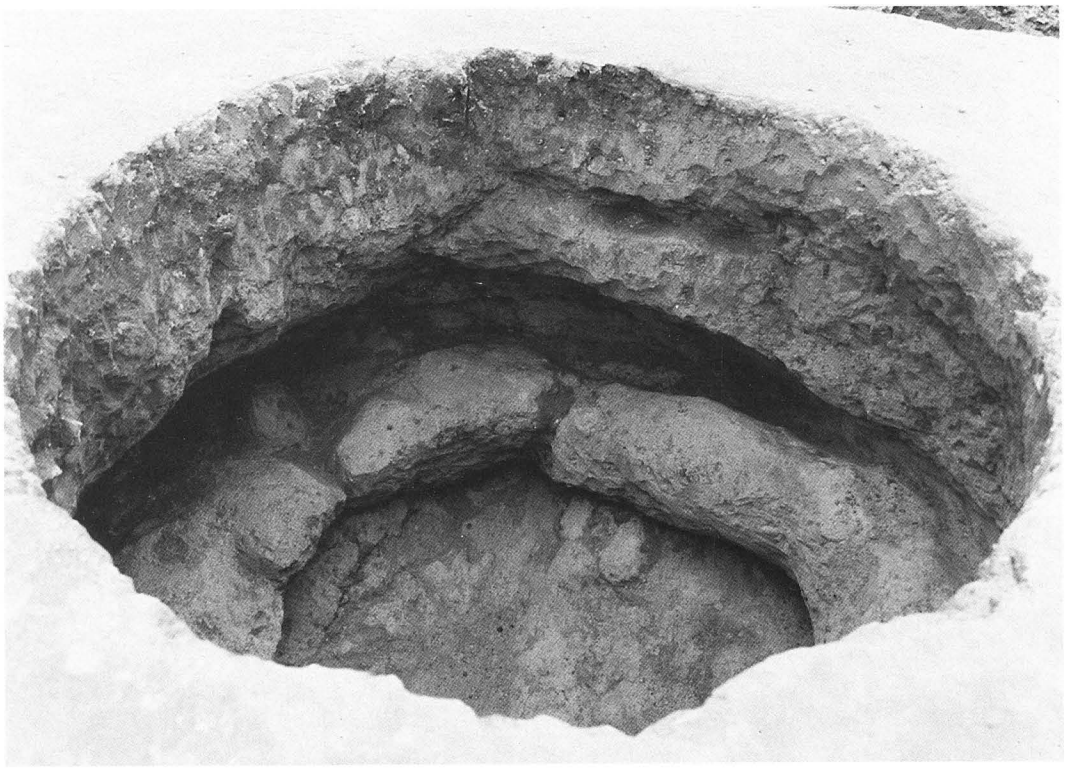
図版第四　第一次発掘区域内ベルト及び側面図

図版第五　第一次発掘区域主要部分図

図版第六　縄文式第六・七号住居跡

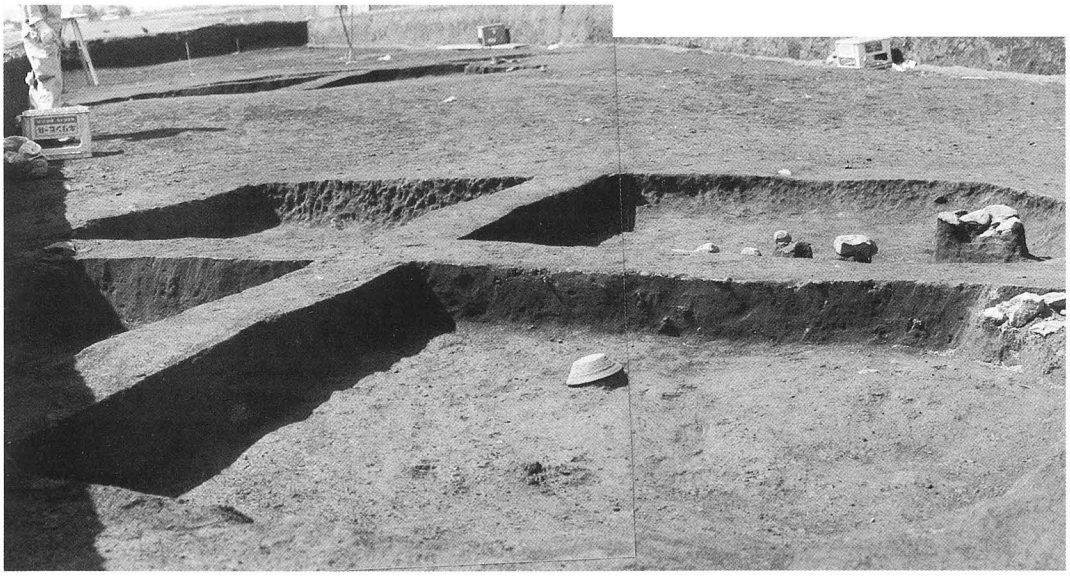


図版第七　土壙全景

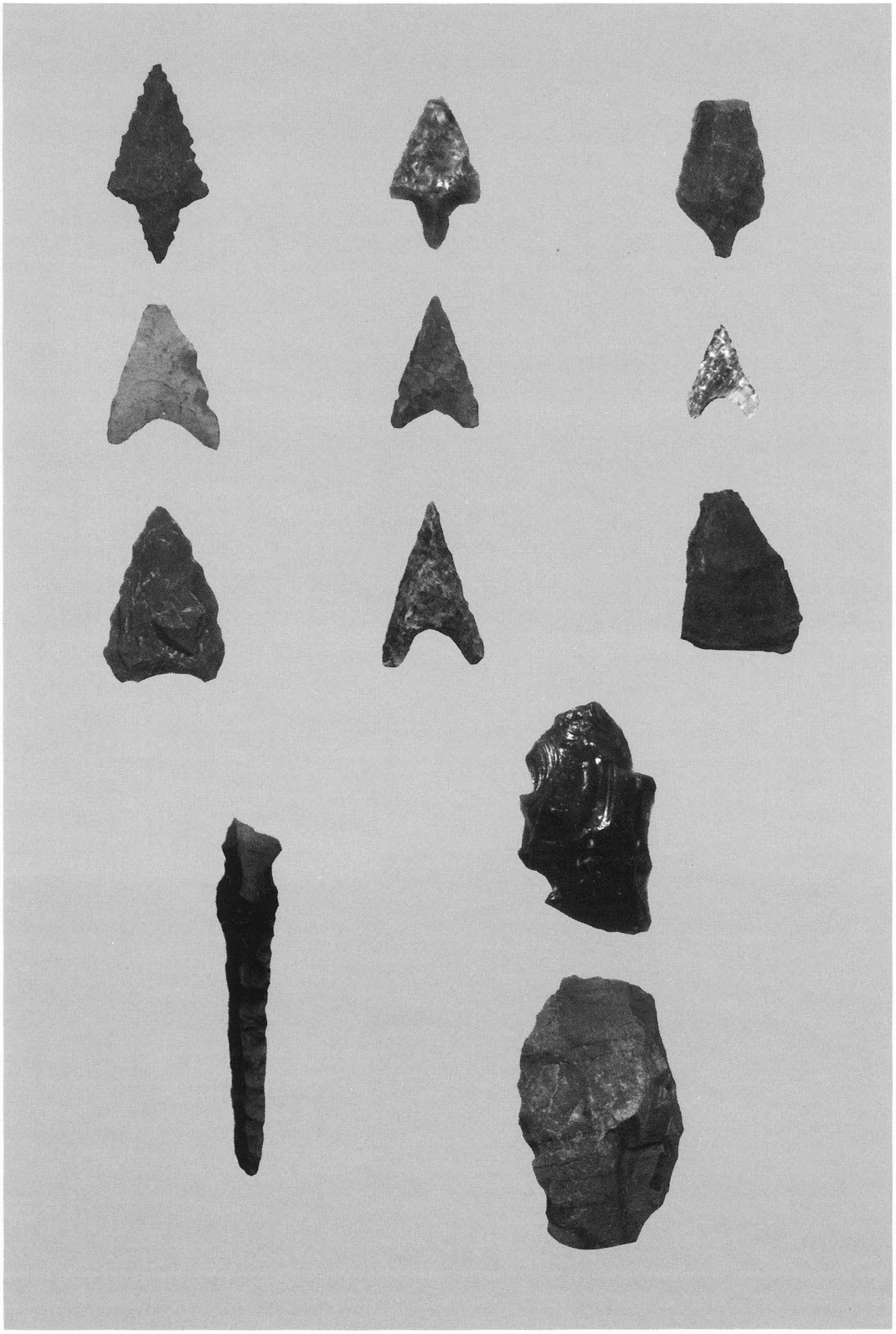


図版第八　土師式第一・二・三号住居跡発掘状況

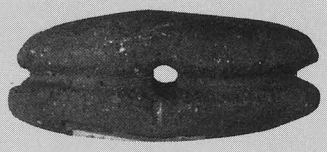
図版第九　土師式第四号住居跡発掘状況



図版第一〇　石鏃・石錐

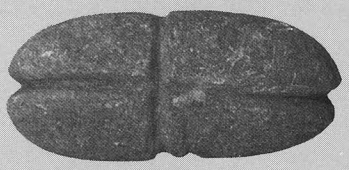


図版第一一　石錘

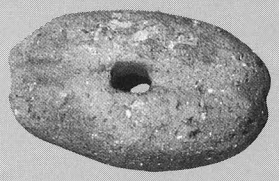


1

2



3

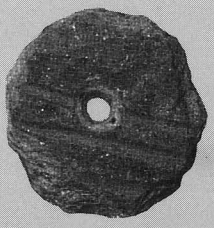


4

5

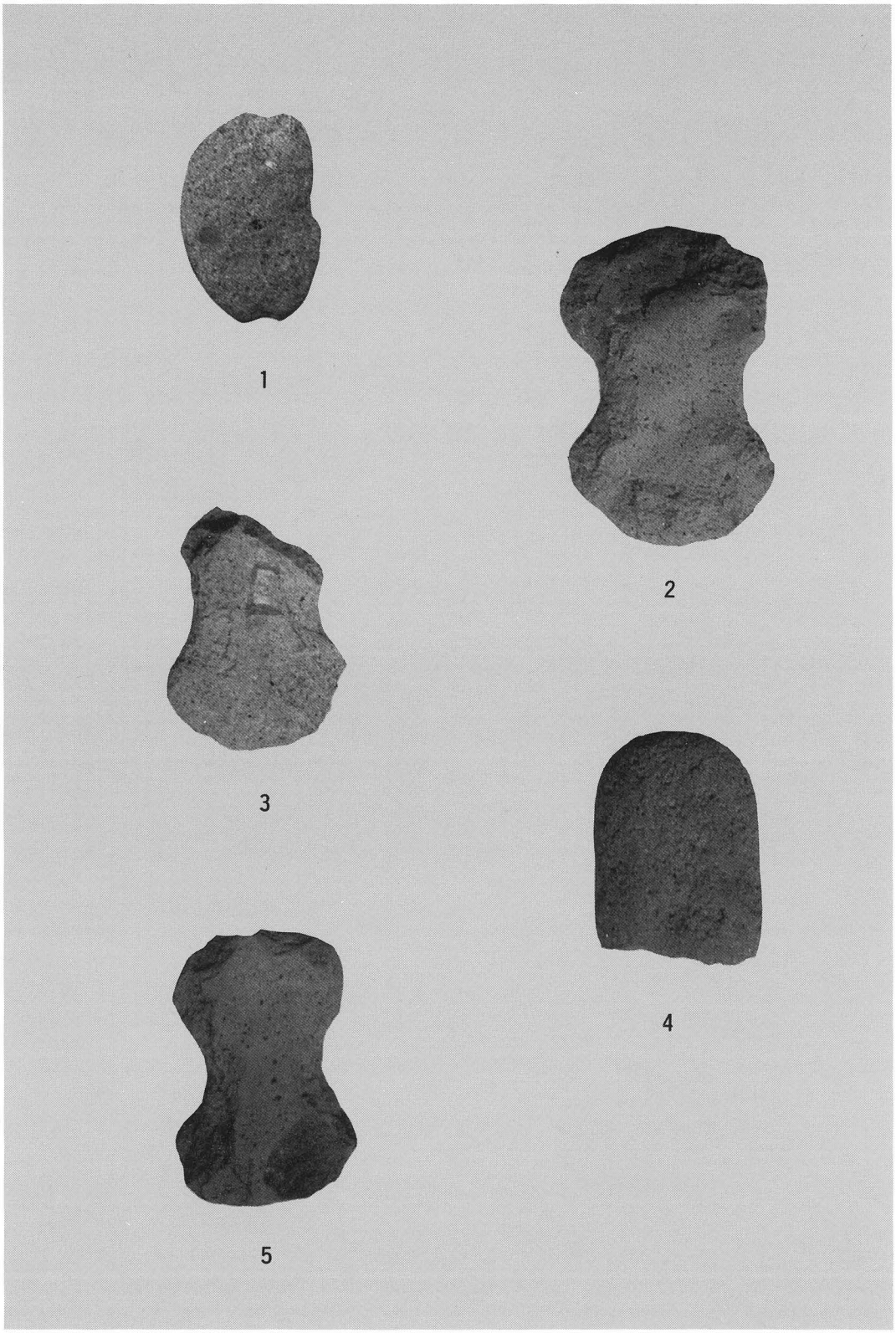
6

7

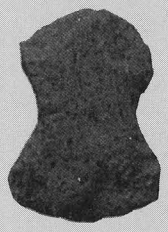


8

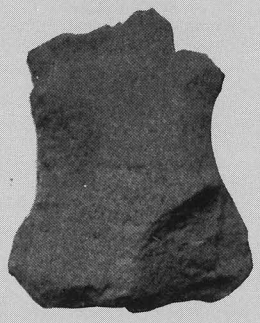
図版第一二　石斧―一



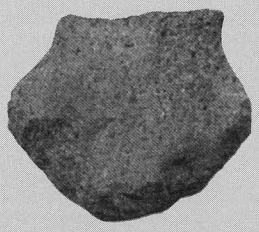
図版第一三　石斧―二



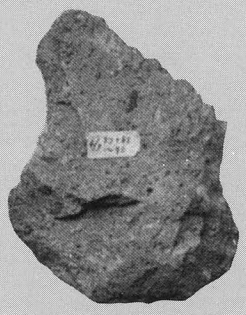
1



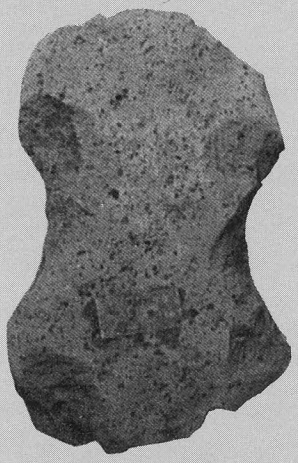
2



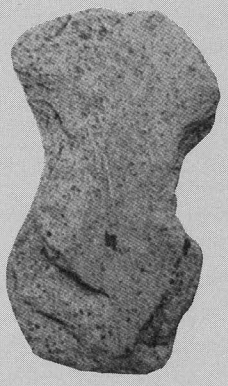
3



4



5



6

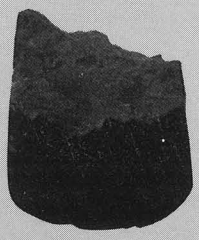
図版第一四　石斧一―三

1

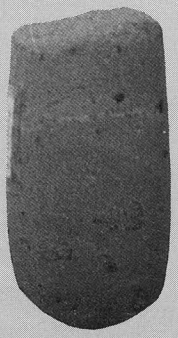
2

3

4

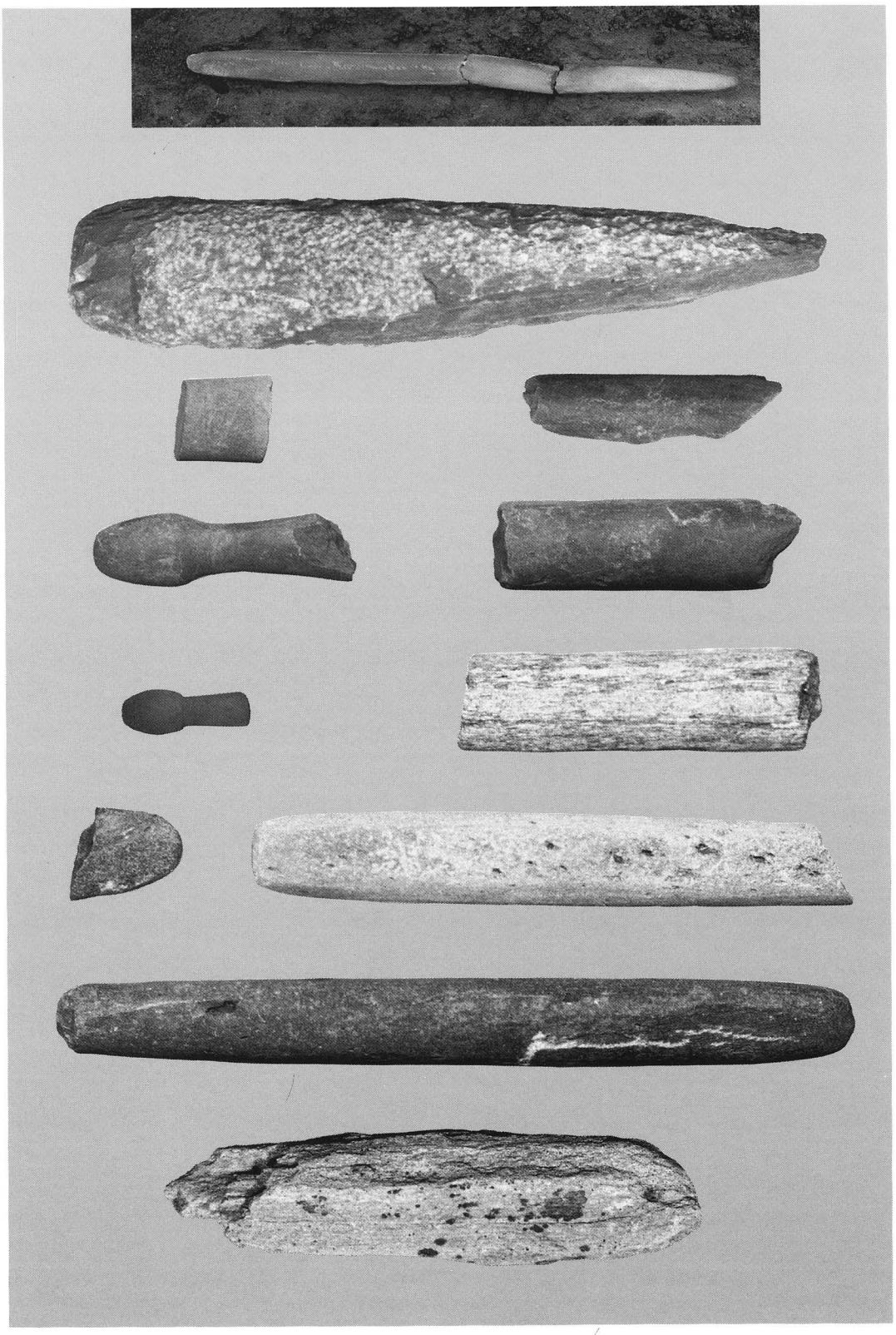


5

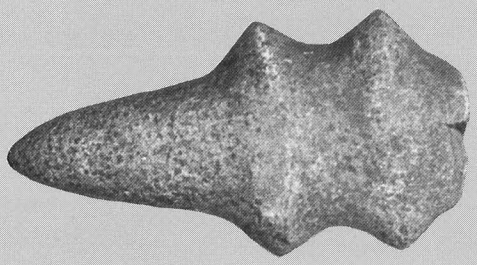


6

図版第一五　石棒

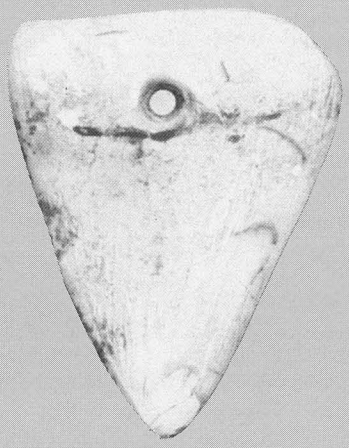


図版第一六　独鈷石及びペンダント



1

2



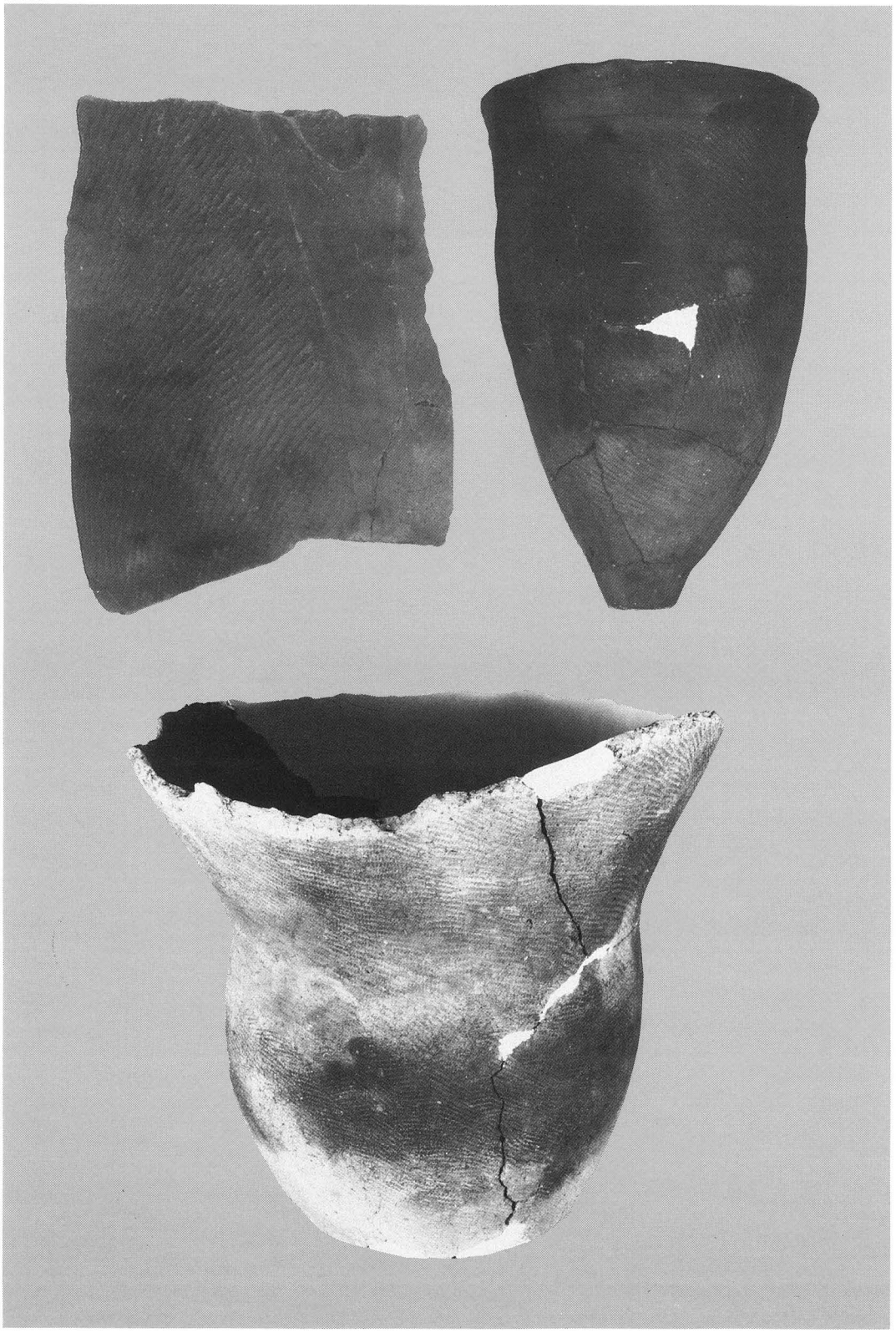
3

図版第一七　縄文式土器―一

1

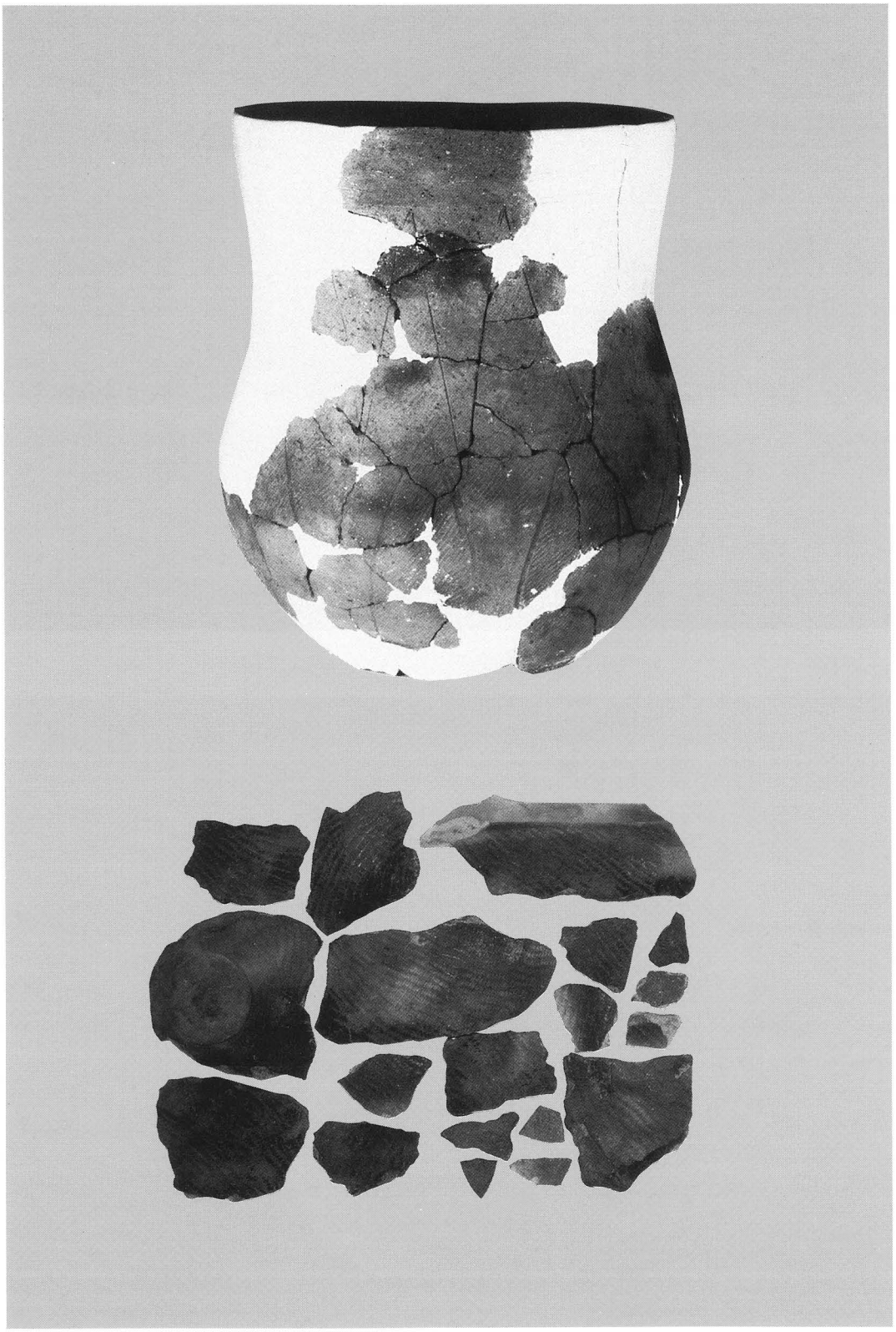
2

図版第一八　縄文式土器―二

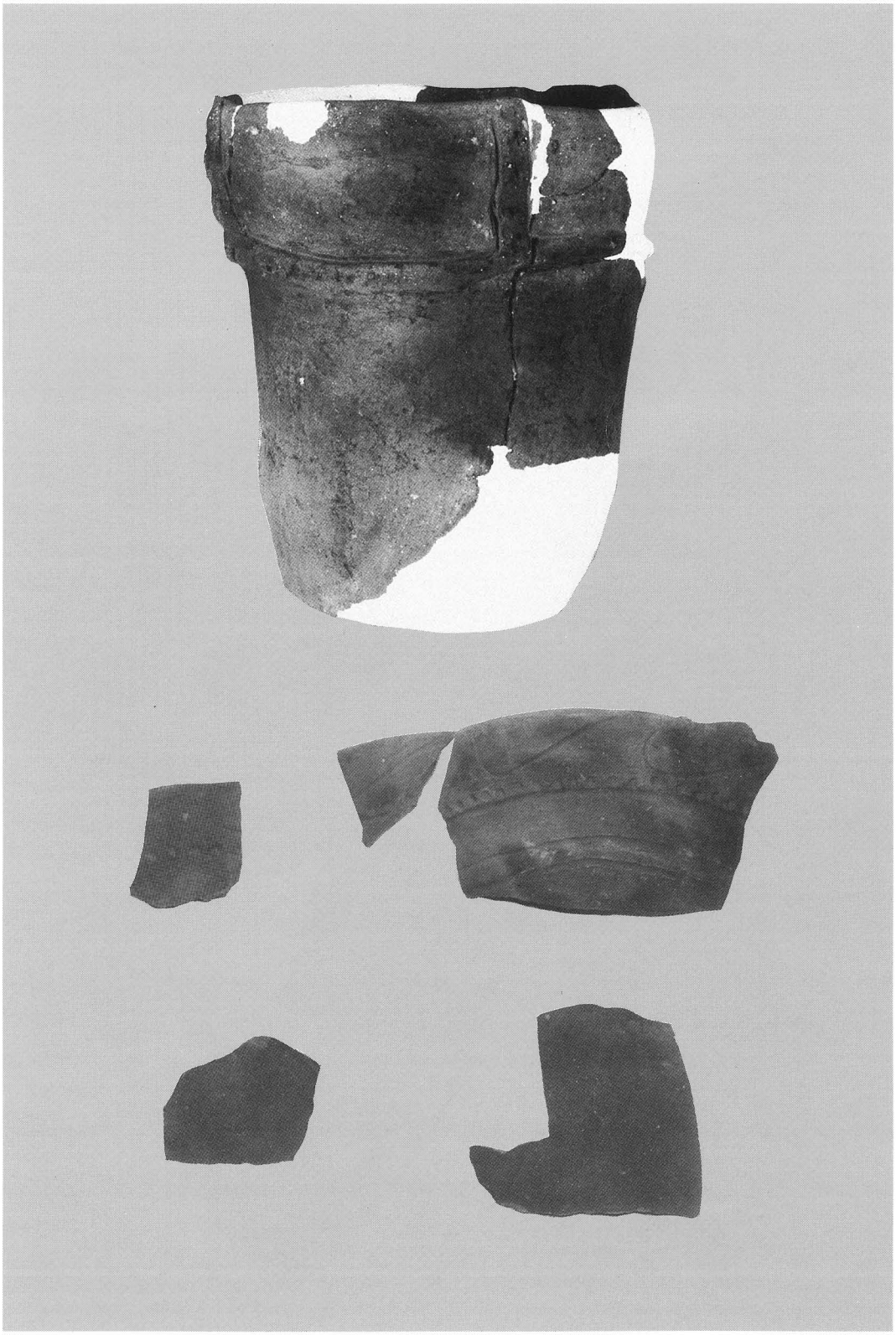


図版第一九　縄文式土器出土状況

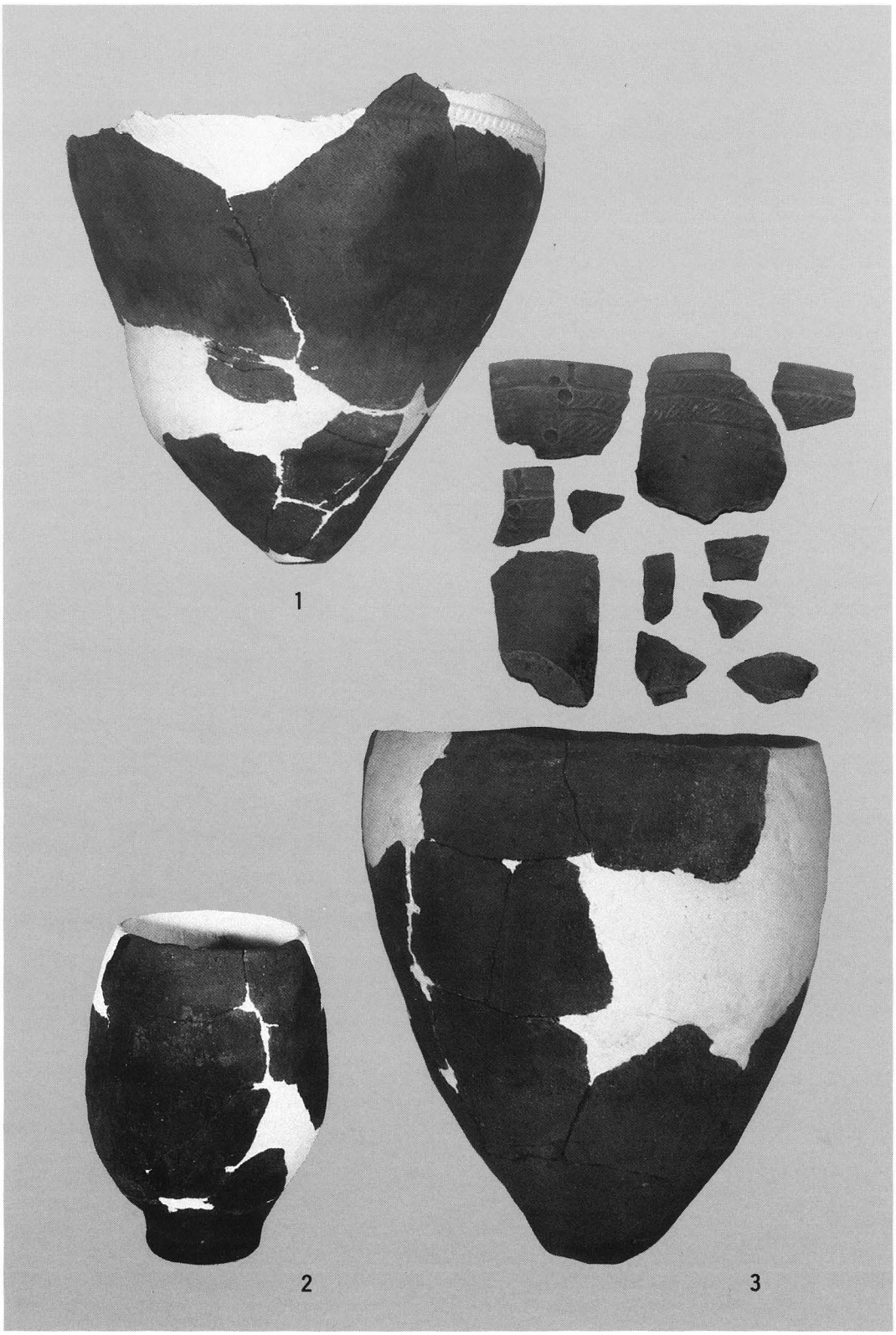
図版第二〇　縄文式土器―三



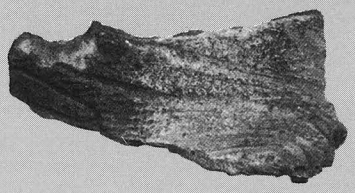
図版第二一　縄文式土器—四



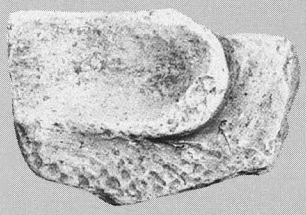
図版第二二　縄文式土器—五



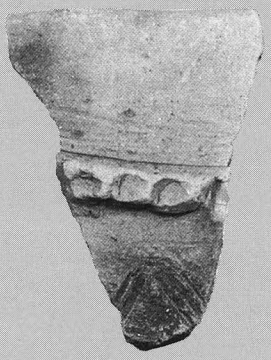
図版第二三　縄文式土器—六



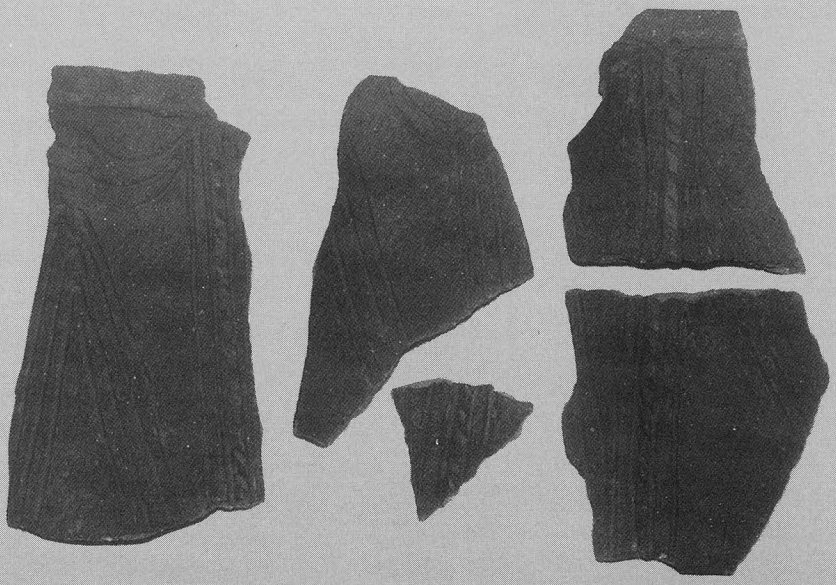
1



2



3



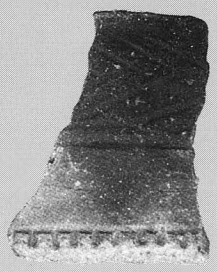
4

図版第二四　縄文式土器—七

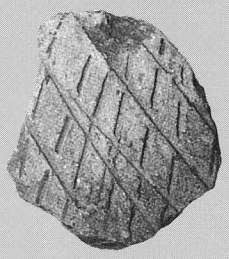
1

2

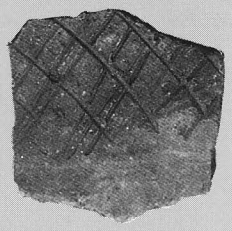
図版第二五　縄文式土器—八



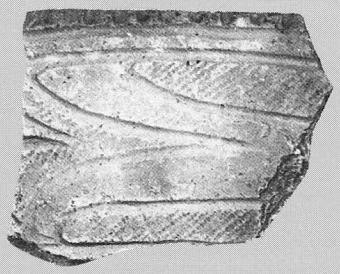
1



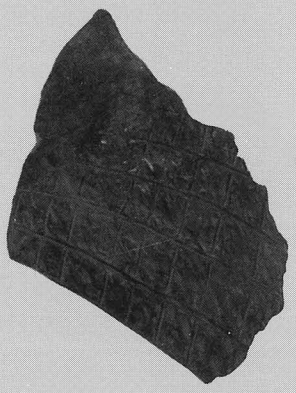
2



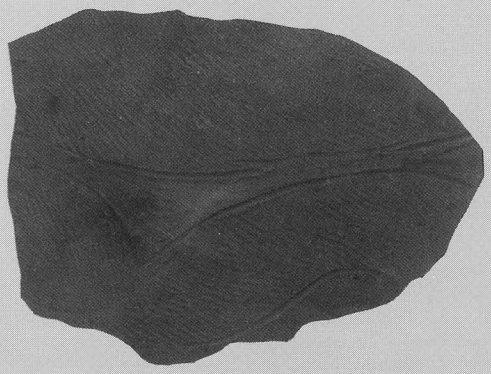
3



4

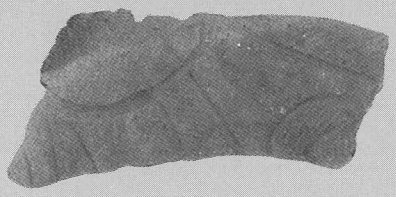


5

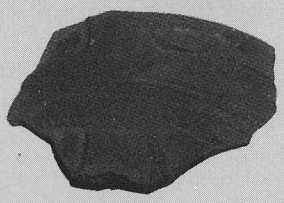


6

図版第二六　縄文式土器—九



1

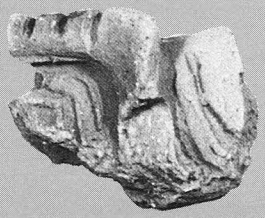


2

3

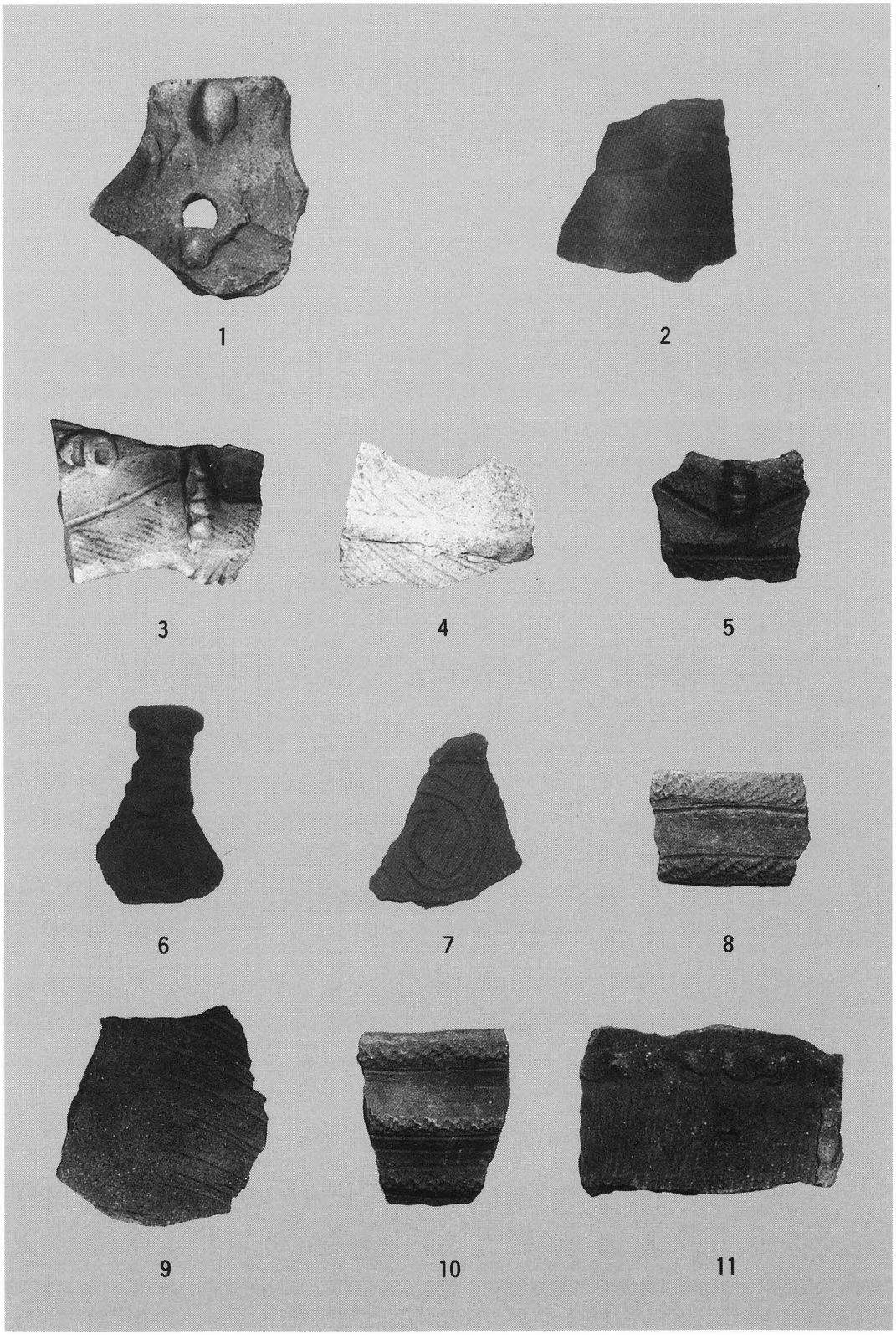
4

5

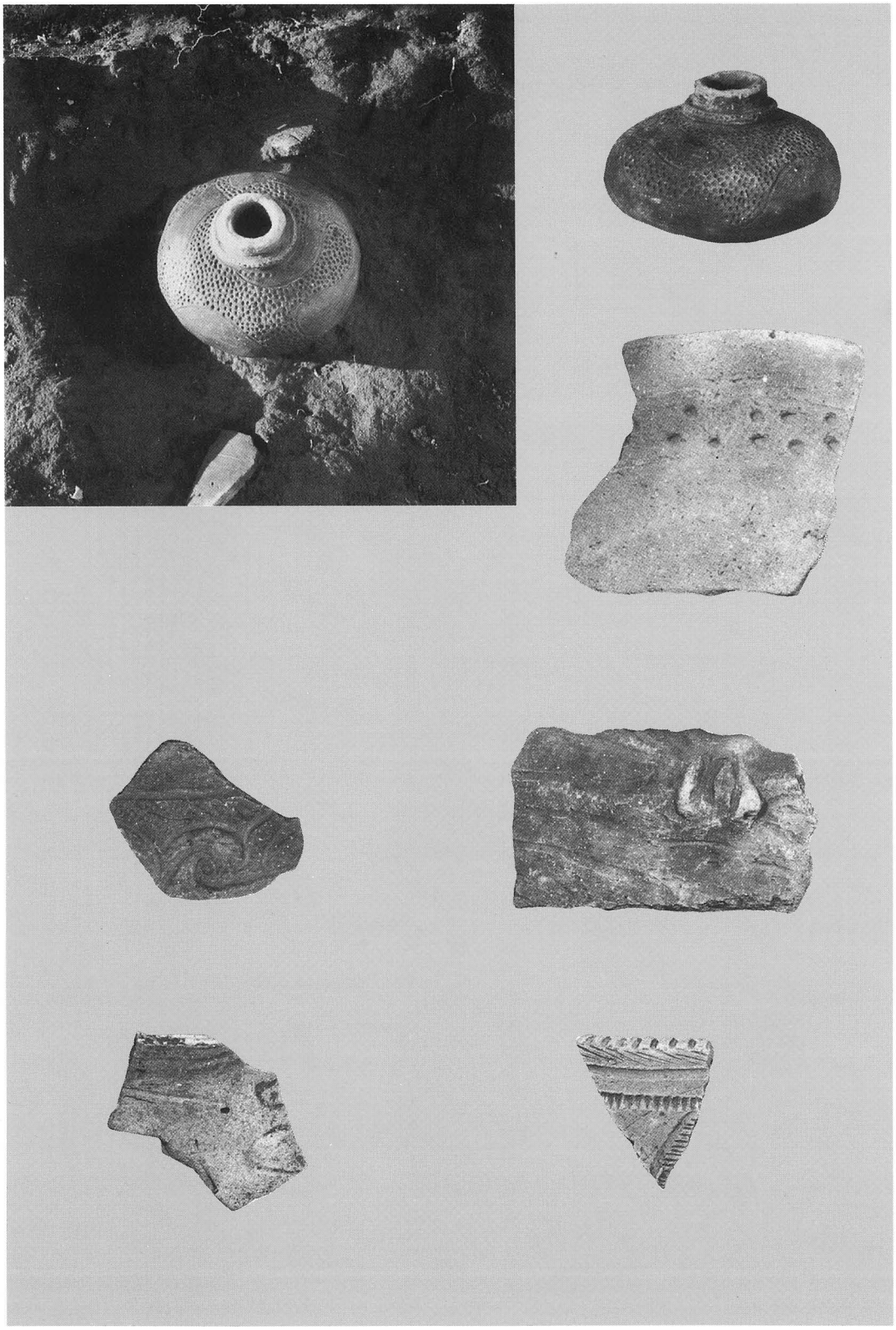


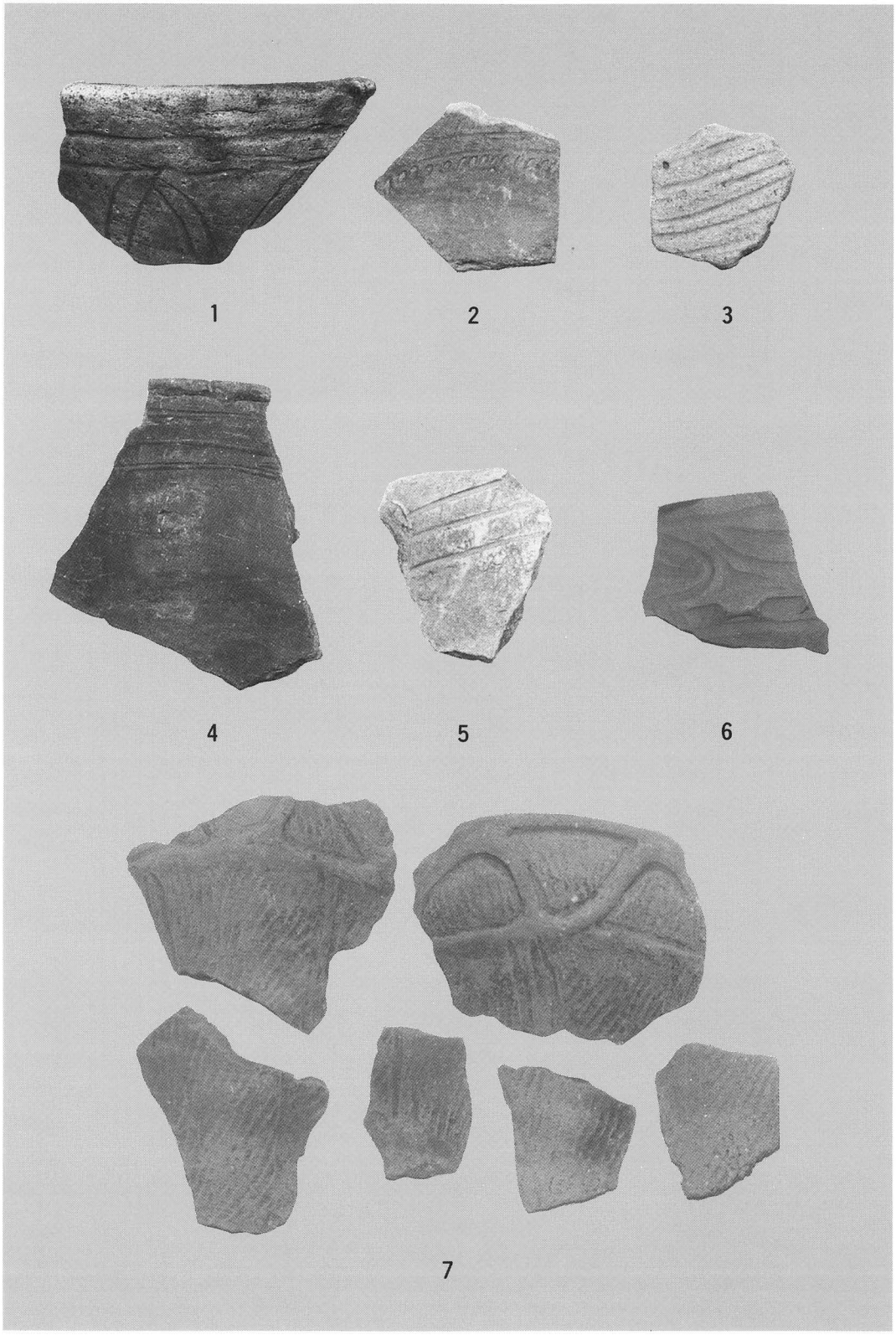
6

図版第二七　縄文式土器―一〇

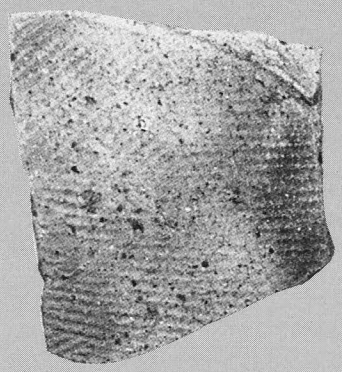


図版第二八　縄文式土器及び出土状況——一一

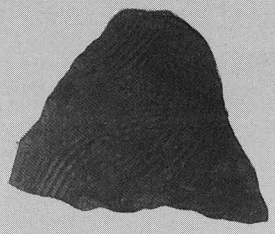



1
2
3
4
5
6
7

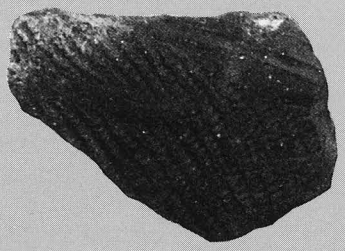
図版第三〇　縄文式土器―一三



1



2



3

4

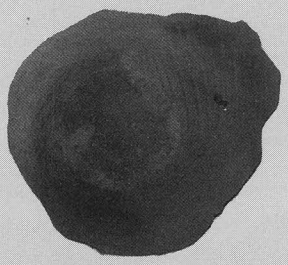
5

6

図版第三一　縄文式土器―一四

図版第三一　縄文式土器―一五

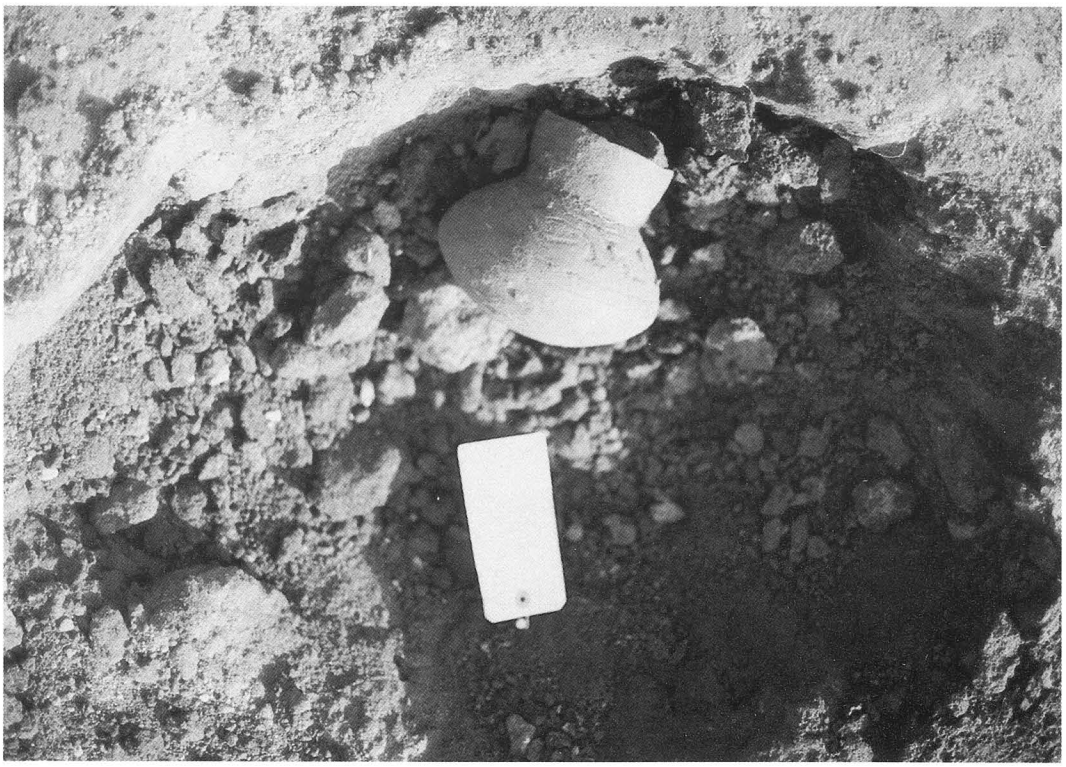
1



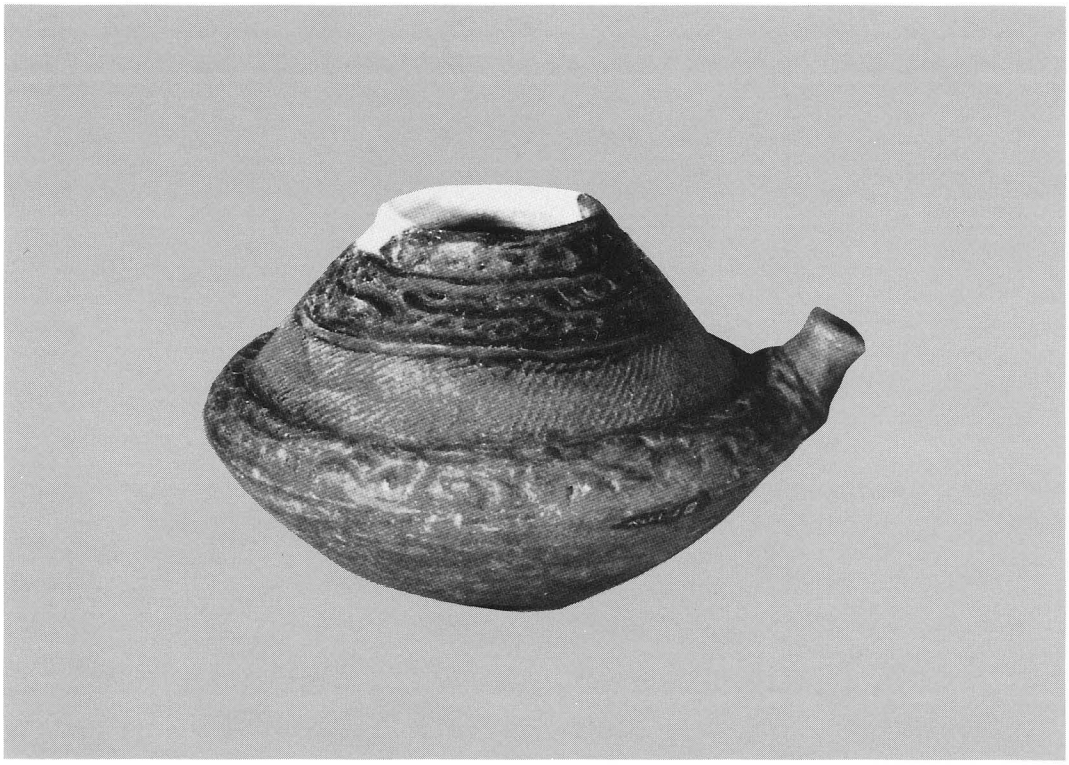
2

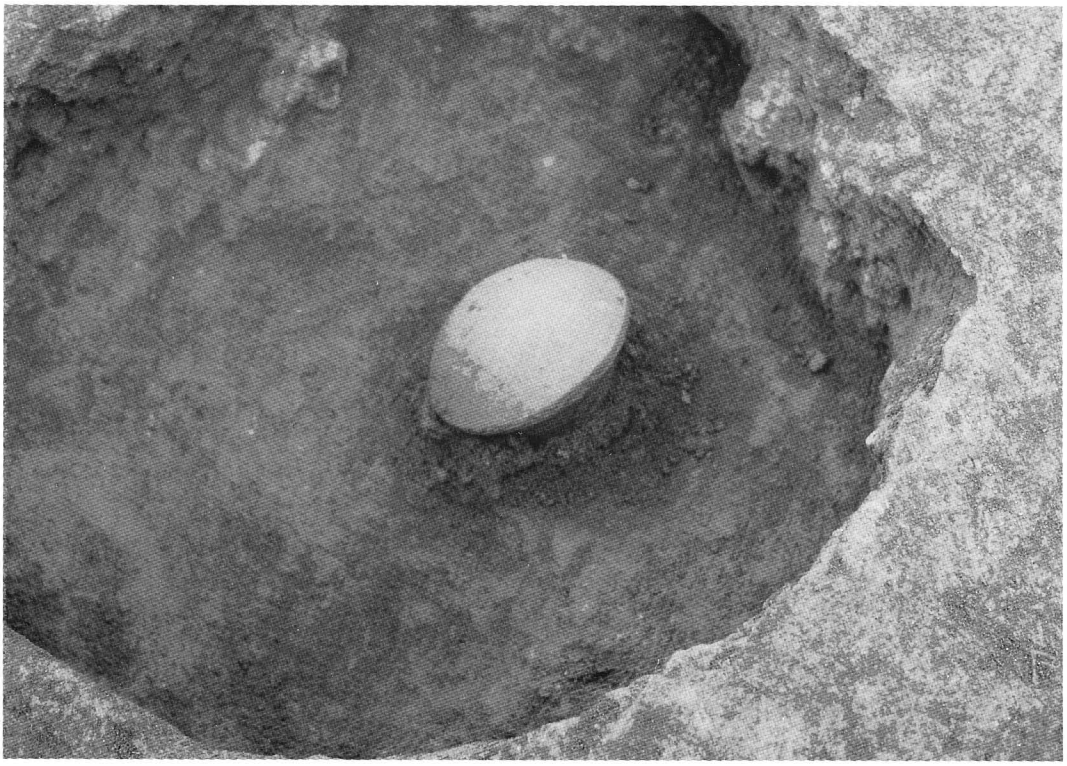
3

図版第三三　縄文式土器及び出土状況―一六

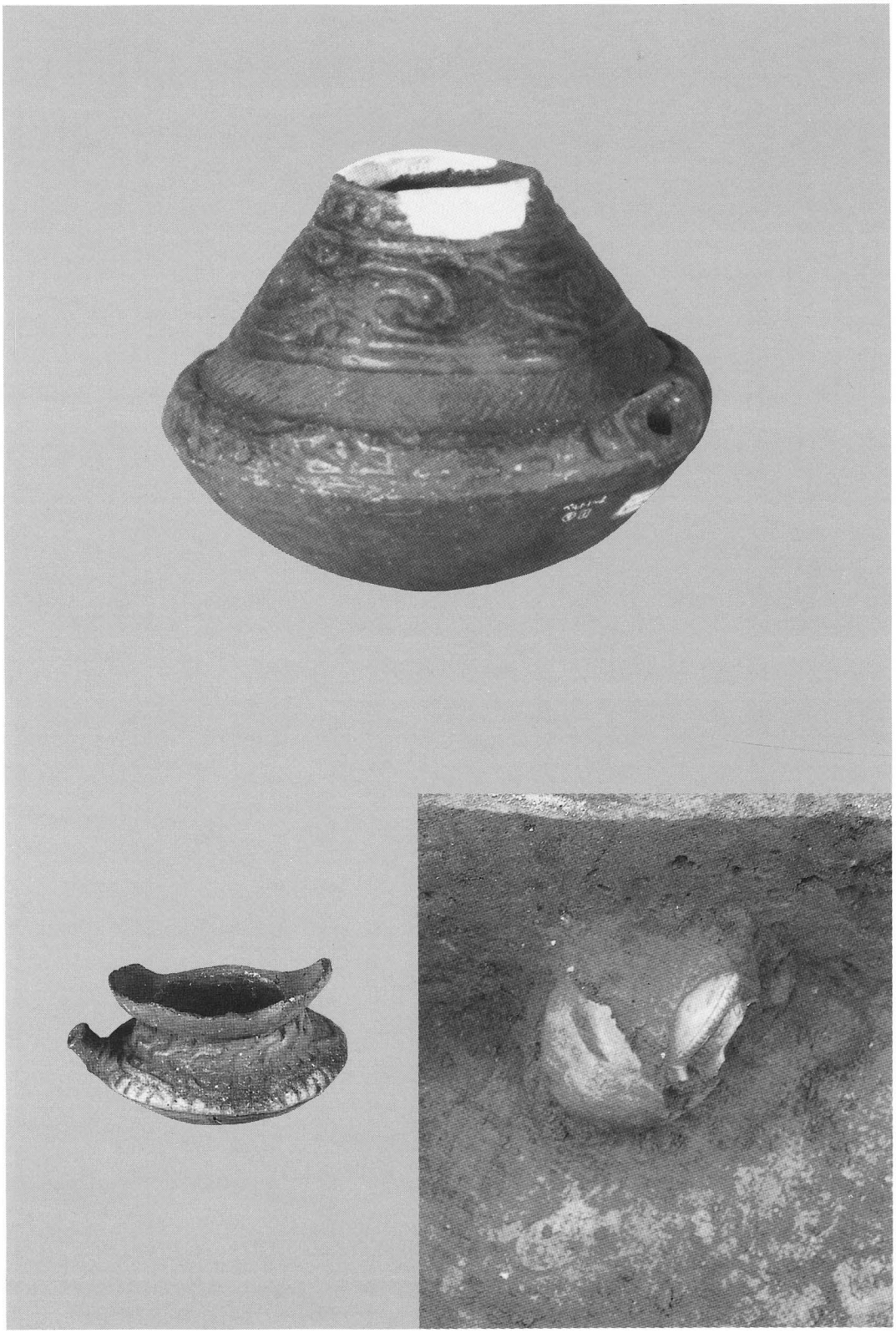


図版第三四　縄文式土器及び出土状況―一七

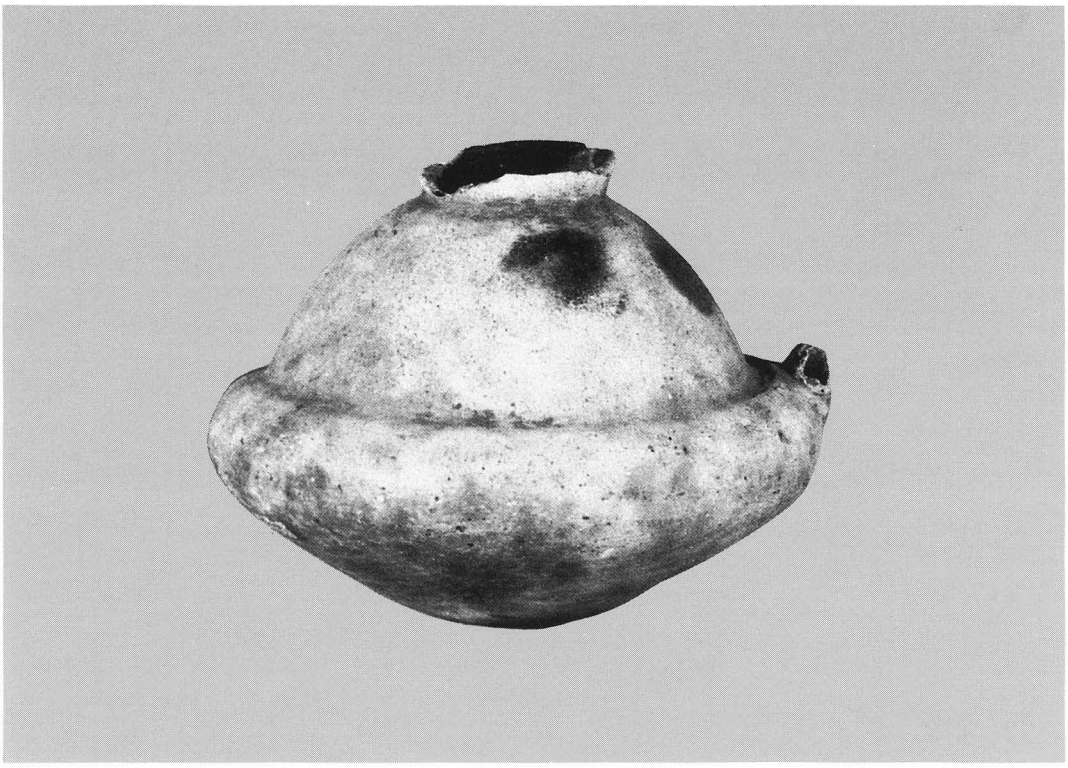




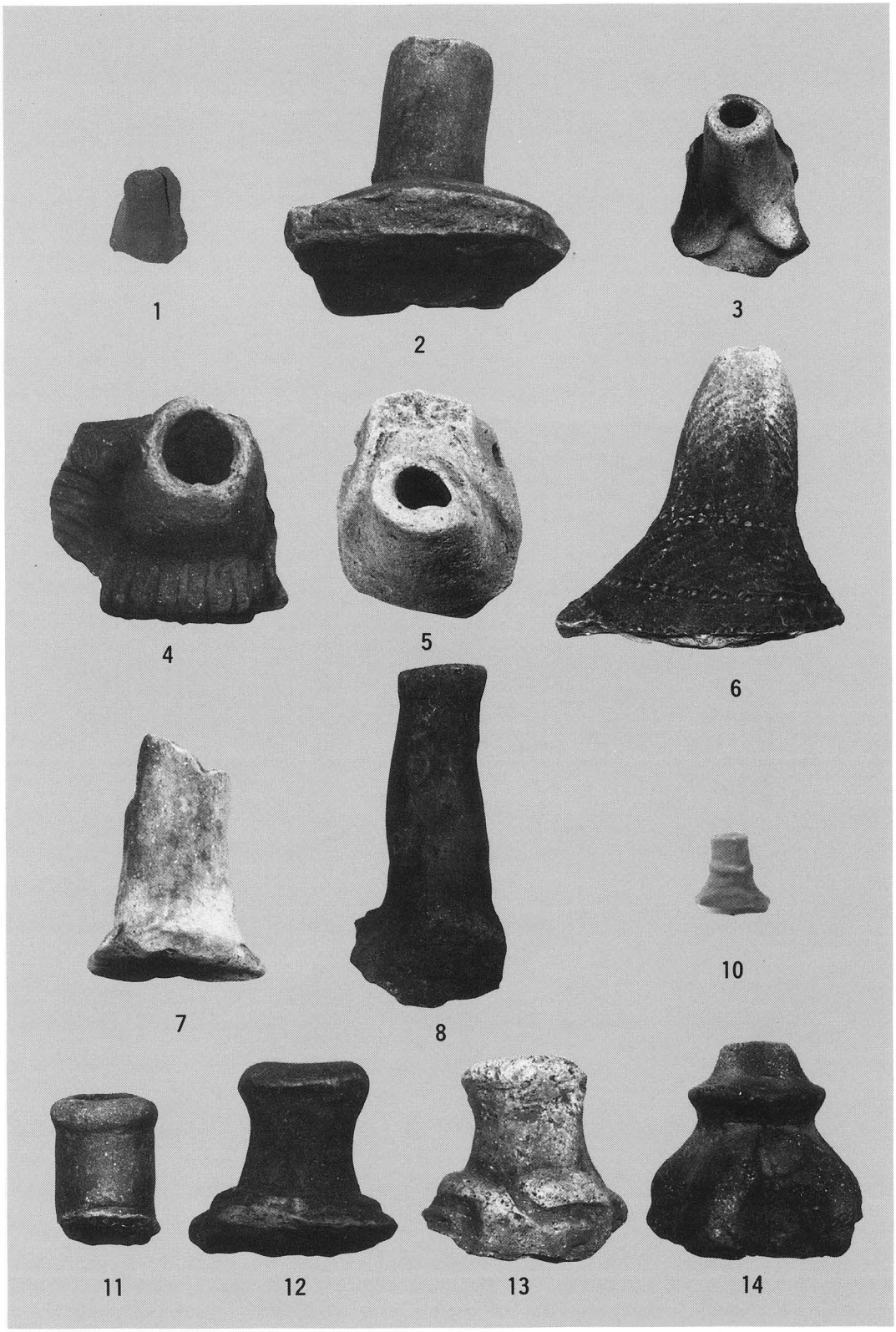
図版第三五　縄文式土器及び出土状況―一八



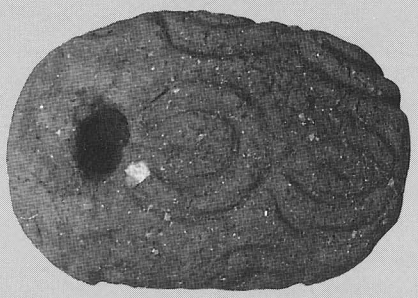
図版第三六　縄文式土器及び出土状況―一九



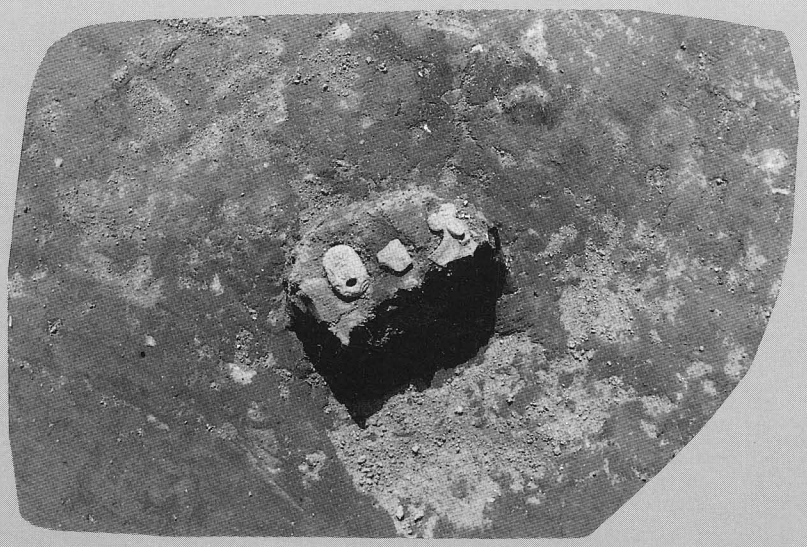
図版第三七　注口土器注口部



図版第三八　縄文式土器及び出土状況・香炉状土器

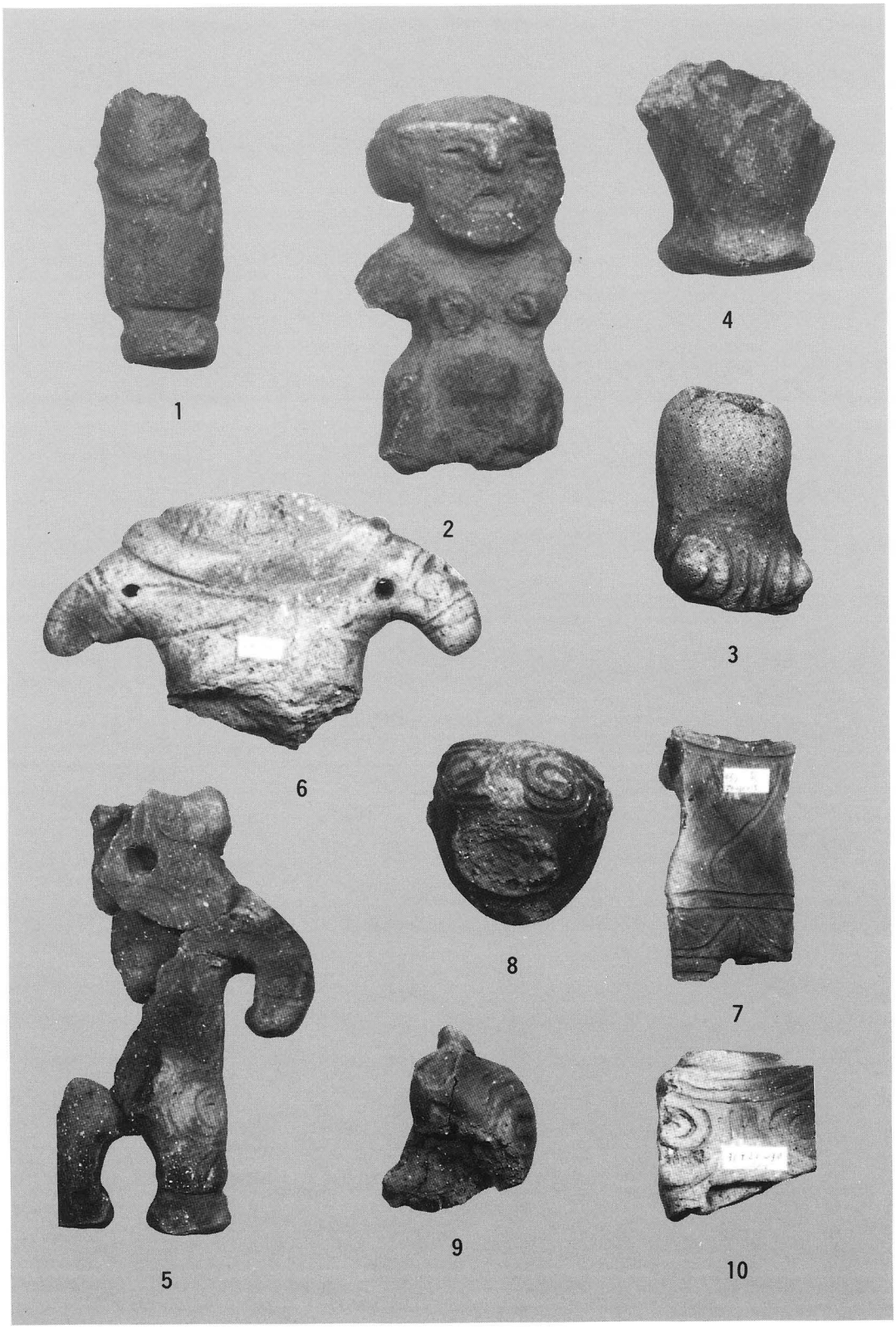


1



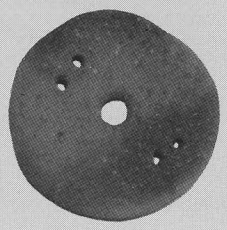
2

図版第三九　土偶

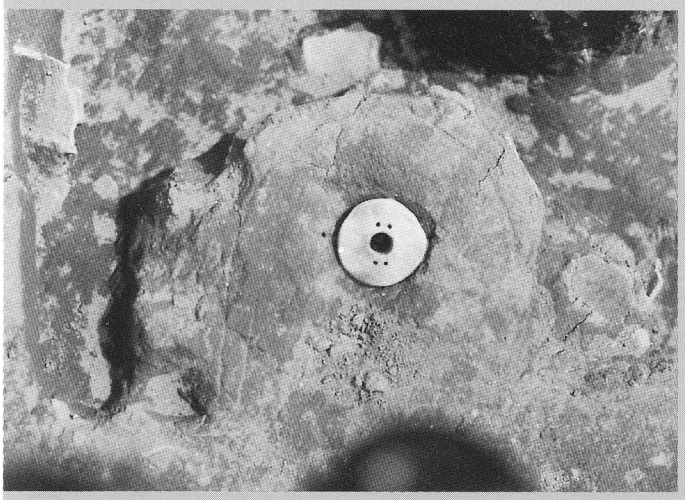


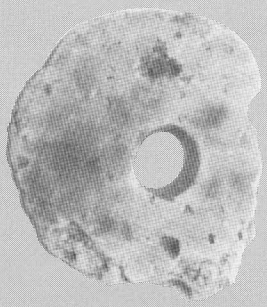
図版第四〇　有孔土器円板及び出土状況

1

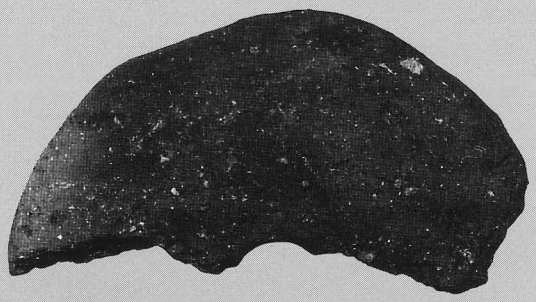


2

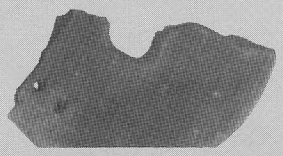




3

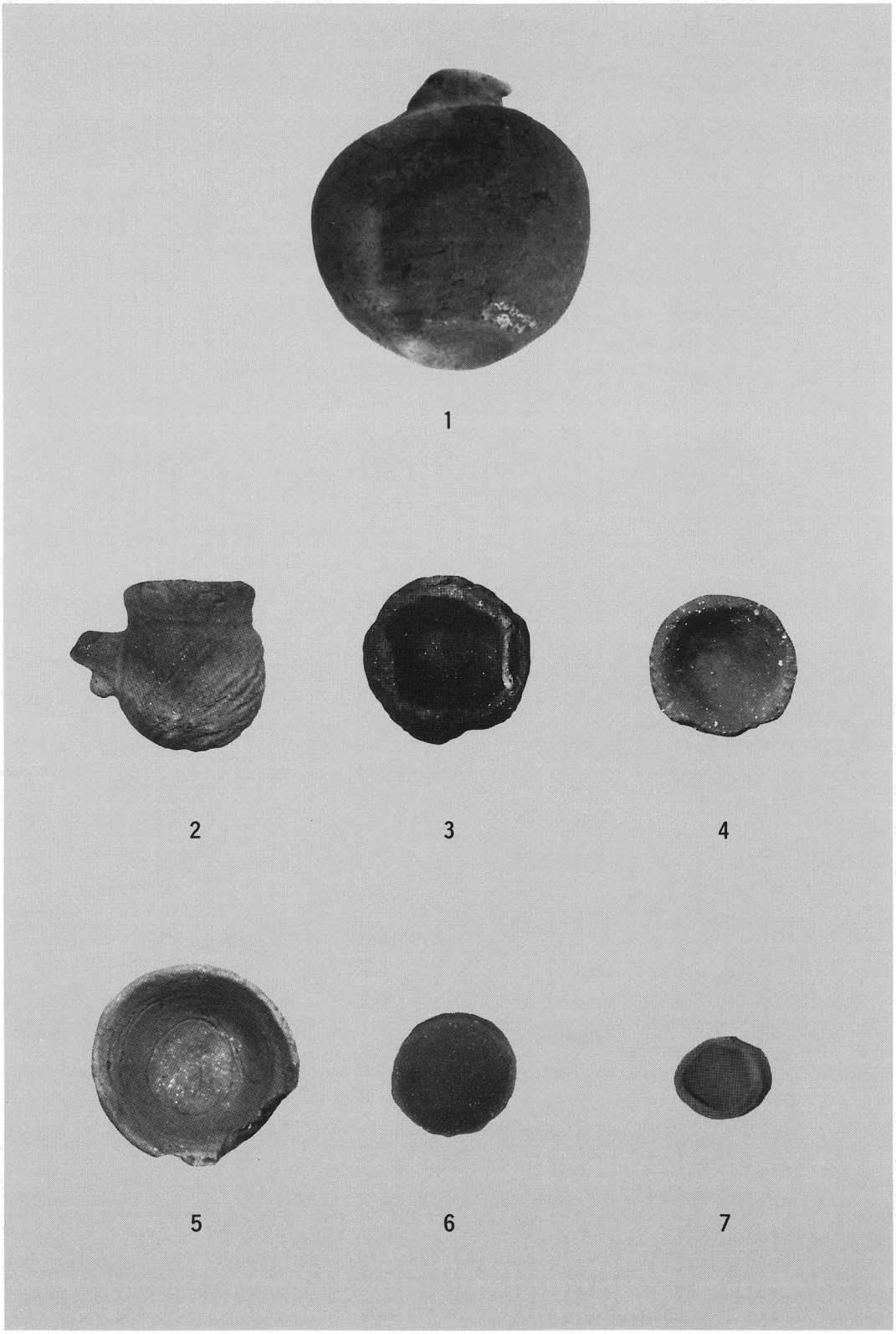


4

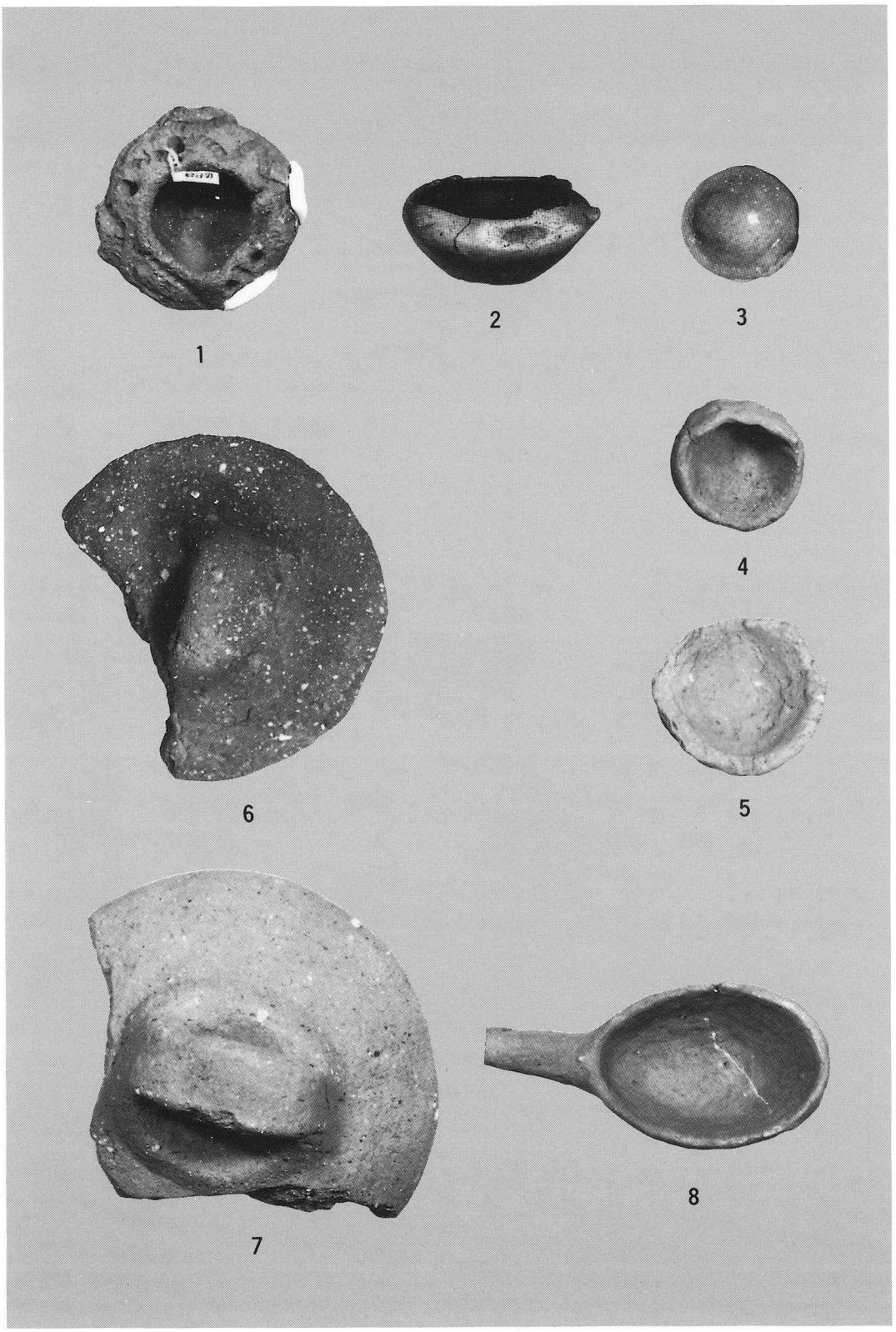


5

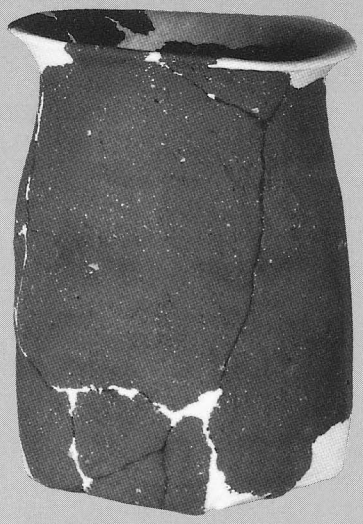
図版第四一　小形手づくり土器—一



図版第四二　小型手づくり土器—二



図版第四三　土師器―一

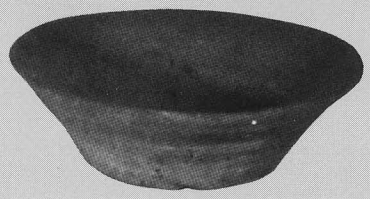


1

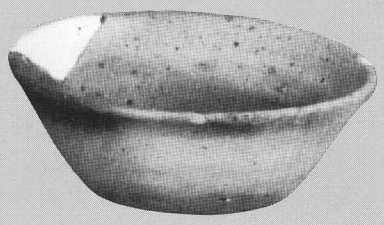
2

図版第四四　土師器—二

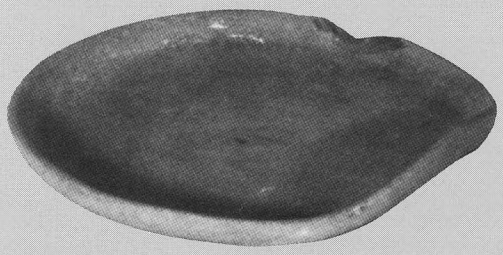
図版第四五　須恵器坏等



1

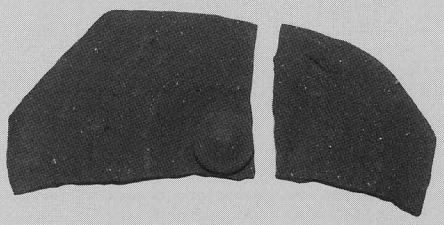


2

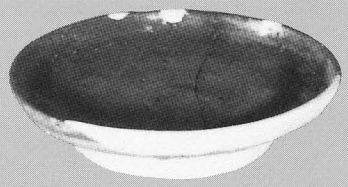


3

4



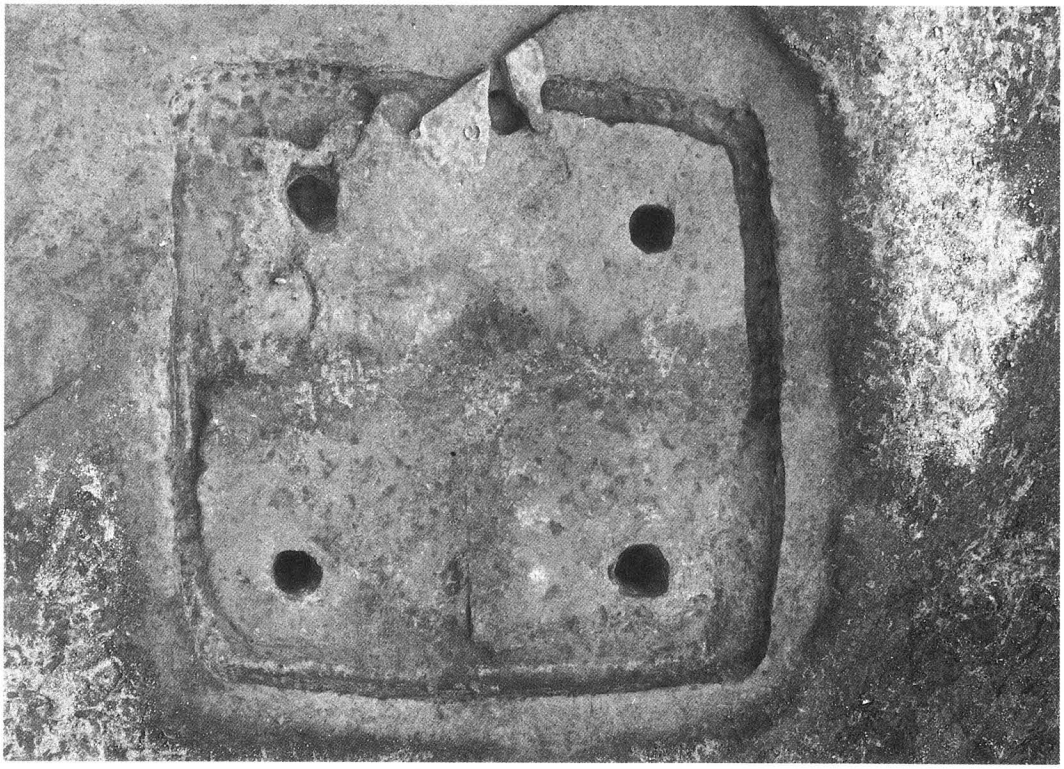
5



6

図版第四六　中世土器

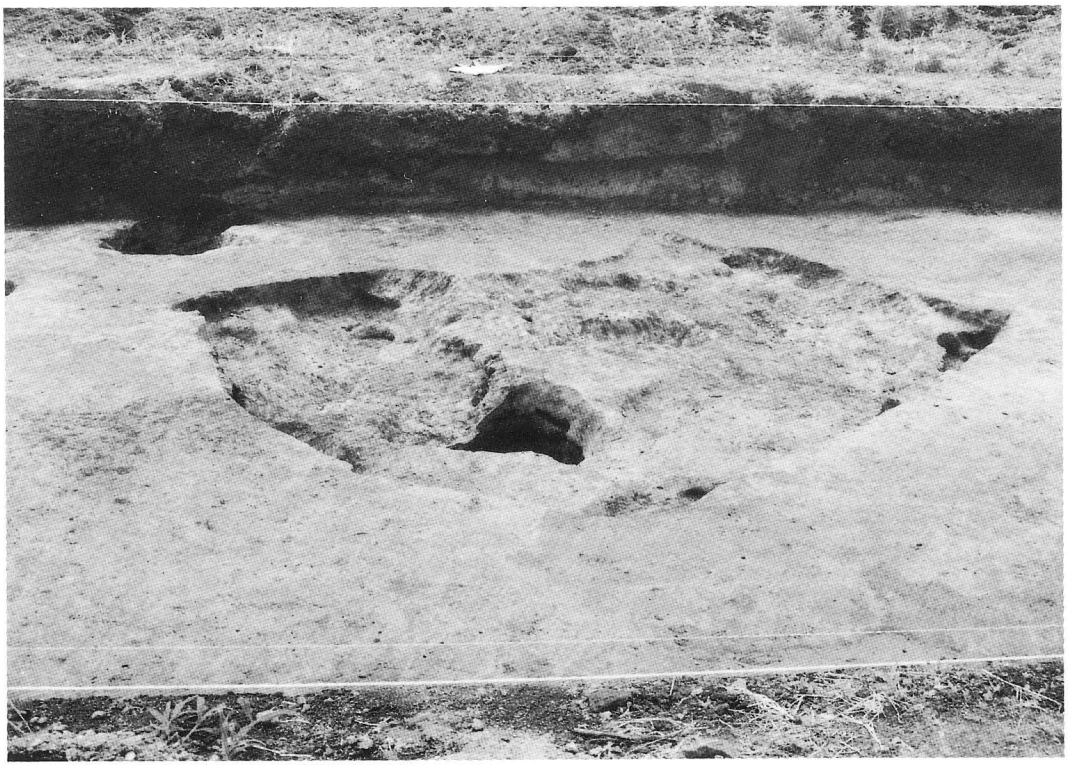
図版第四七　第九号住居跡全景



図版第四八　第九号住居跡壁及び全景

図版第四九　第九号住居跡カマド

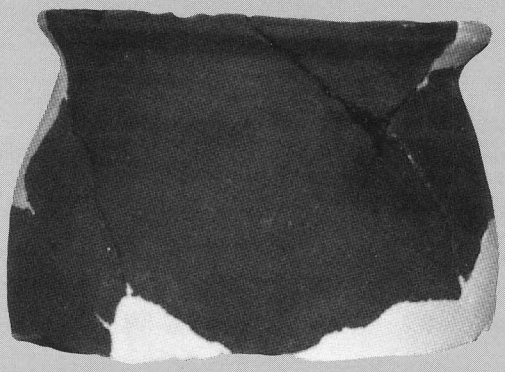
図版第五〇　第一〇号・一一号住居跡全景



図版第五一　溝全景

図版第五二　縄文式土器

図版第五三　土師器―一

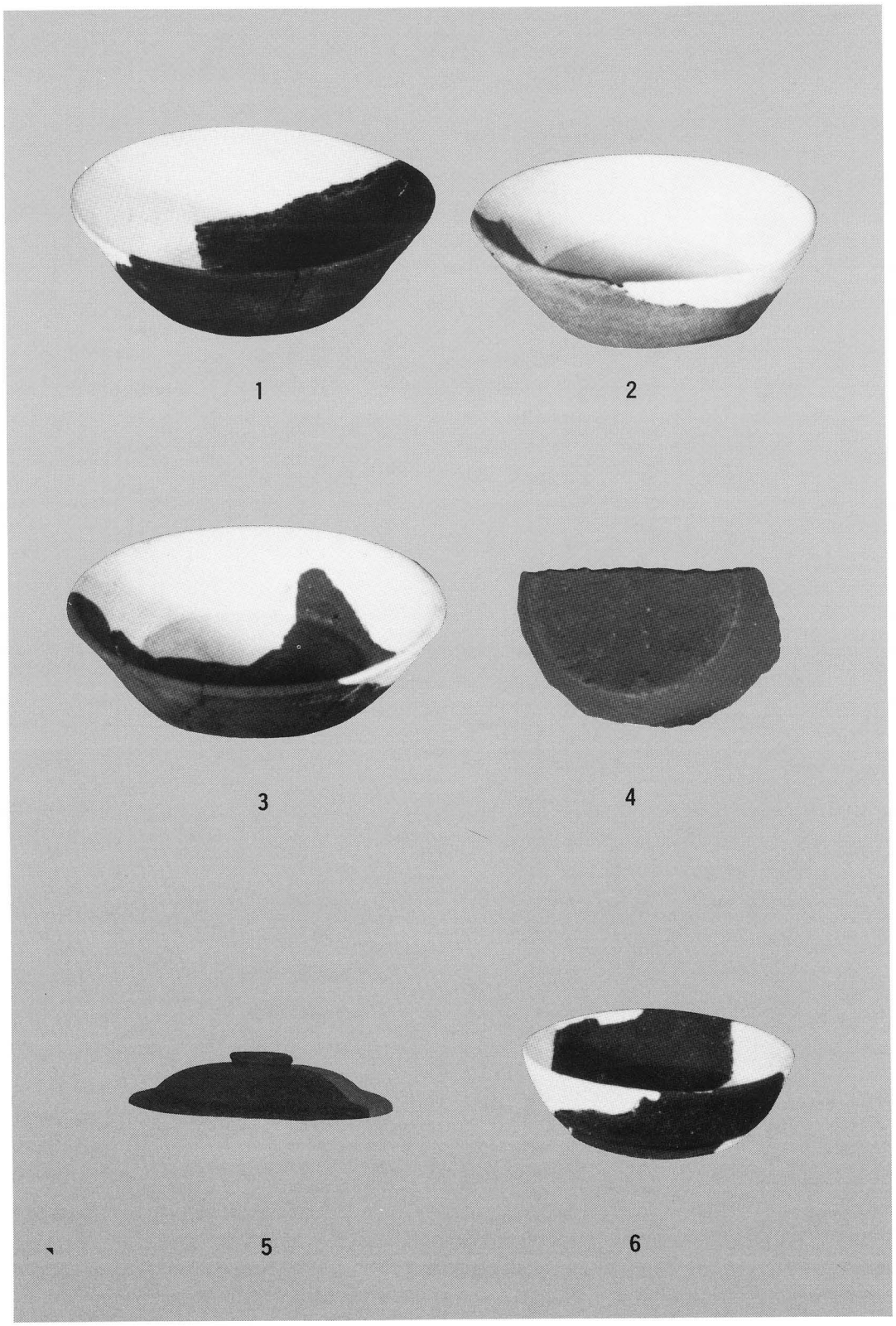


1

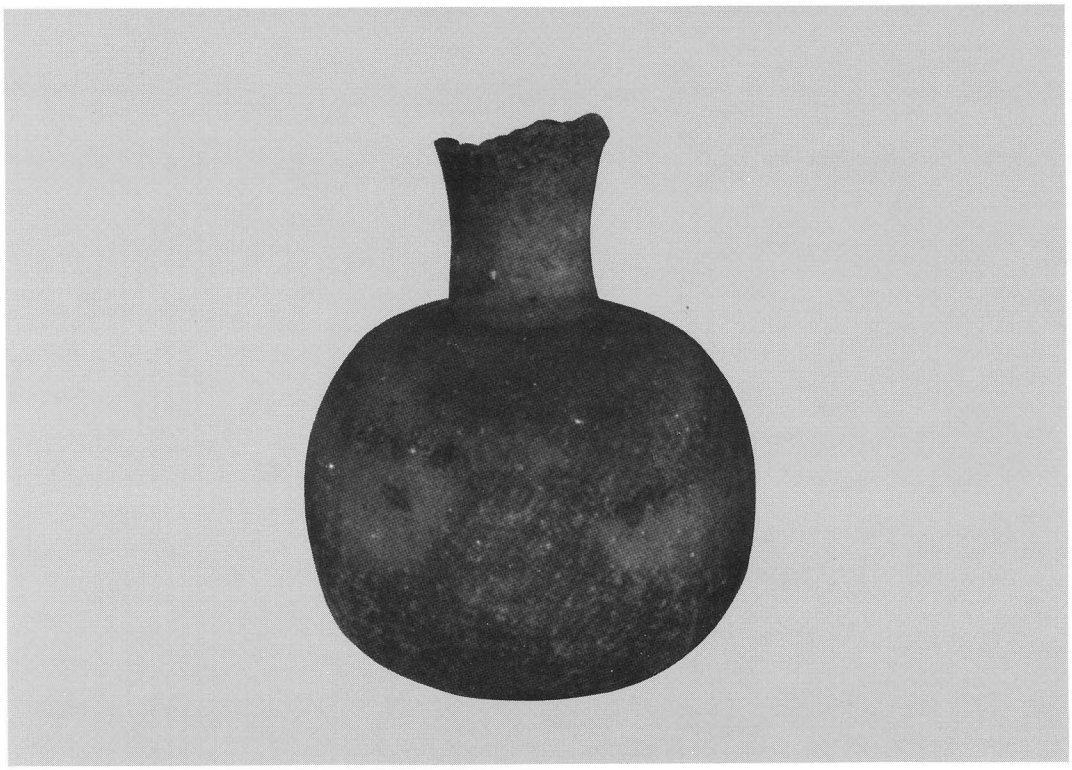
2

3

図版第五四　須恵器坏―一



図版第五五　須恵器及び出土状況―二



明野町埋蔵文化財発掘調査報告書第４集

山王堂遺跡発掘調査報告書

平成４年９月10日印刷
平成４年９月18日発行
発　行　明野町教育委員会
山王堂遺跡発掘調査会
印　刷　株式会社　高野高速印刷
水戸市東原2-8-1
TEL　0292(31)0989（代表）